

WIFE

特集 ● お医者さんを診断する

グラビア ● 傑作年賀状七人集

連載 ㊦ エッセイ 甲子ハイツ102号室 柳原和子

連載 ㊦ 智よ、自然に学べ 母親から見た山村留学の記録 こくぶんひろこ



東京新聞婦人家庭部編

男ってなんなの

定価 780円

ミズのための心理学

現代の清少納言たちが不思議な

男の像・人生についてホンネを語る

男ってなんなの

男というものの正体

劇作家 田中澄江

夫と妻のあいだとは

随筆家 木村治美

女より一枚上の知恵

評論家 三枝佐枝子

見ようとしないうちの姿

「わいふ」編集長 田中喜美子

永遠に抜きさしならぬ関係

絵本・童話作家 佐野洋子

男の現実、男の夢

弁護士 渥美雅子

粗大ゴミにならぬために

評論家 十返千鶴子

尊敬されたい、甘えたい

シャンソン歌手 石井好子

総女性的なこの時代に

作家 宇野千代

昔の女はよかったわねえ

作家 佐藤愛子

ミズのための人生セミナー

人生を一生懸命に生きて

女優 沢村貞子

新しい気分で自分を見直す

作家 桐島洋子

いつまでも若々しい精神で

作家 永畑道子

数字にみる

女性のライフ・サイクル

柏書房

〒113 東京都文京区本駒込1-13-14

☎ 03-9478251

近代日本

監修 中島邦 (日本女子大学教授)

女子教育文献集

第I期●全10巻

揃定価六八、〇〇〇円

現代も脈々と受けつがれている近代の女子教育に関する文献を探ることにより、婦人の問題を一層鮮明に論じられるよう企画された文献集である。男女平等というたてまえの下、「女子教育」ということばがあるにもかかわらず、「男子教育」ということばがないと嘆けく現代女性にぜひ御一読いただきたい。注文はお近くの書店へ。

■推薦者

丸岡秀子

女子教育の展開を知る文献集。

一番ヶ瀬康子

近代日本の女子教育の潮流をさぐる。

麻生 誠

新しい女性解放の道を学ぶために。

■全巻内容

①高名大家女子教育論(辻岡文助編) ②吾党之女子教育(巖本尊治) ③日本女徳案(関 以雄) / 女子教育論(永江正直) ④女子の身分 / 女子教育要言(三輪 田眞佐子) ⑤女子教育 / 女子教育改善意見(成瀬仁蔵)

⑥教育大家女子教育論(吉木竹次郎編) ⑦女子教育(下田次郎) ⑧最新学説女子教育論(澤田順次郎) / 女子教育管見(村上尊精) ⑨女性大観(伊賀駒吉郎)

⑩女房説法鉄砲三ぼう主義(大江スミ子) (別冊解説) 中島邦先生をはじめとする第一線の研究者八名の執筆による解説集。各巻A5判上製・布クロス装。

日本図書センター

東京都文京区大塚3・4・13
☎ 03(九四七)九三八七(代)

いいたい放題 したい放題

書きたい放題 よみたい放題の

投稿誌が わいふです

人間 ほんとにやりたいことは やれるもの

ウジウジ・イライラふり捨てて

思いつきりやれば 気ははれる

いろんな人のいろんな時の

いろんな心を材料にして

二か月に一回 わいふが出来あがるのです

仕上げに適量の“ユーモア”と

“思いやり”のスパイスを!

ピリツとくるか まろやかになるか

それはあなたの“うで”次第!

WIFE 186

わいふ目次

表紙イラスト 松本圭以子
レイアウト 岡島三紀子

投稿規定 4

傑作年賀状七人集 6

職場は多面体 9★

北川洋子・桜井淳子

うちの悪ガキ 12★

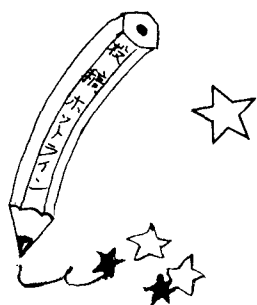
細野清美・YS

対話のページ 18★

松本弘子・木村道子・橋本由紀子・中西清美

特集・お医者さんを診断する

誤診に振りまわされて 30
原田静枝



わりきれない流産の体験 41

清水美佐子

薬恐怖症 太田千代 48

嘘のようなほんとうの話 50

三井早穂子

病気がくれた「弱者」の眼 56

野村純子

私の初産体験 村木京子 60

M医師とのめぐりあい 65

中山真紀子

ナウい熟年 阿部小枝 72 ★

エッセイスト・クラブ 73 ★

泉 響子・高宮みか・宮前 和
関根洋子・岡富実子

マスコミむしる 友松悦子 87 ★

WIFE・ガイドブック

子連れ遊びのガイド 羽根木公園 90
三崎成美

WIFE・新連載

きのえね

甲子ハイツ一〇二号室 94

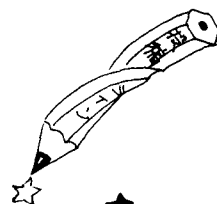
柳原和子

オットどっこい 伊藤智子 107 ★

わいわいがやがや 108 ★

柳本綸子・鈴木啓・遠藤敏子・
萩原幹子・酒井智恵子・
柏木輝子・山本真理

★印は
投稿ホットライン
の、ページです!



観たり聴いたり 吉村きよみ 114 ★

マジの発言 115 ★

久米昭江・岩田和子・田中恵子

ファミリー・イン・ブルー 122 ★

MN・HS・本川もと子

WIFE・新連載

智よ、自然に学べ 126

こくぶんひろこ

生きてます活字人間 140 ★

桜井じゅんこ・田中喜美子・里憲子
ショートショート

マンガ笑止・笑止 栗田笑 17

情報コーナー 70

サークルだより 89 投稿募集 143

編集だより 144

わいふ・投稿規定

書くもヨシ
書かぬもヨシヨシ

ドンドン書いてノドシドシ送ってノグイグイ載せますノ

●定期購読者になればどなたでも投稿できます。誌上匿名は可。ただし原稿には住所氏名を明記すること。(無記名ものは受付けません)

●次のコラムへご投稿をどうぞノ

- うちのワルガキ 子どもとその周辺の話について、どんなことでも。
- オットどっこい 夫について、ノロケ、珍談、不満、ケンカ、何でも。
- ナウい熟年 今どきの若い者へ、一言言いたい方のためのシルバースト。若い方がそれを読んで、文句言いたい場合もどうぞ。
- ファミリィ・イン・ブルー 家庭内、親戚づきあいなどのトラブル、よそ

では言えないホンネのはけ口に。

- マン・ウォッチング 家庭で、職場で、PTAで、その他どこでも、あなたの観察したヒト科男属の生態を。
- 職場は多面体 あなたの職場レポート。フルタイムはもとより、パートでも内職でも、切実な体験や悩みなど、ぜひ寄せて下さい。
- 親のホンネ 親、ことに母親ほどつらいものはない。子育ての全責任者、何でも母親のせいだと言われ……でもこっちにも言いたいことありますよ。母親だってニンゲンだ。言いたいこと言おう。
- 男性専科 敵に塩を送る心意気、男

の言いたい放題のページです。

- マスコミむしる 新聞、雑誌、テレビ。ずいぶんどうかと思うこと、腹の立つこと、被害を受けたこと……いろいろなあるんじゃないですか。遠慮ない告発をノ強いマスコミに弱いミニコミからなぐり込みかけよう。
- マジの発言 まじめは「わいふ」の本領なんですわね。あなたの主張や切実な体験を。
- 対話のページ 本誌の投稿や記事についての感想、反論など。
- 女の道楽 あなたがやってるホビーについて。
- 観たり聴いたり 映画、演劇、音楽

会、展覧会などの感想を。

●生きてます活字人間 読んだものについて。

●遊びましょ こんなところ行ってみた、こんな遊びしてみたなど、楽しかった話を。費用も忘れずにね。

●わいわいガヤガヤ どこにも当てはまらないものを押しこむスペース。

●エッセイスト・クラブ ずいひつものよさをたっぶり味わせてくれるよい文章を。この欄だけ千六百字まで。

●以上いずれも八百字まで。オーバーしても内容がよければ掲載いたします。締切り偶数月二十五日。

×

●持ちこみ原稿 詩、小説、評論、旅行記、ルポルタージュ、どんなジャンルのものでも。二十枚―三十枚程度。長篇なら連載も可。

掲載分には薄謝を贈呈します。締切日はとくにもうけません。

●短い投稿はハガキでもけっこうです。

友だちとおしゃべりする気分で氣楽に投稿して下さい。

●絵・カット・イラスト・写真などの投稿も歓迎します。作品を送って下さい。

×

●投稿は原則として一応編集部で選択しますが、投稿規定以内の枚数のものについては、ほとんど掲載されます。

●「わいふ」の特色は、完全な言論の自由を守ることにあります。思想信条を問わず、すべての女たちに自分の考えを発表する場を確保することが、「わいふ」の望みです。どうかこの場をフルに利用して下さい。

●投稿は多少添削することがありますのでご了承下さい。

●「わいふ」からこれまで数人のライターが巣立っています。文章を書くことをしごとにしたいと思っていらっしゃる方に、「わいふ」は絶好の

トレーニングの場となります。あなたもぜひ、利用して下さい。

●あなたの周囲に、誌上でご紹介できるようなすばらしい仕事をしている方、特殊な体験をお持ちの方、ユニークな生活をしている方――はありますか？ そういう方をご存じでしたら、ぜひ編集部までご一報下さい。

また自分自身、書きたいテーマをあためていらっしゃる方は、編集部へ声をかけて下さいませんか。有効なアドバイスをして差上げられると思います。

●編集部・編集長へのたよりで掲載ご希望でないものは必ず「私信」とお書きそえ下さい。

もう24才!と母。まだ24才!と私。

お嬢さんの幸せな結婚。
“偶然まかせ”で良いのでしょうか…。



私たちは一生の間に、理想の人に出逢えるチャンスが一体どのくらいあると思いますか。アルトマンシステムの学術顧問である西ドイツ・キール大学のユルゲンス教授は「理想の人とめぐり逢える幸運は統計学的にみて一生に4〜6回しかない」と述べています。アルトマンシステムは、そんな貴重な出逢いのチャンスを、最も適合性のある相手のデータを科学的に厳選して、毎週会員の方々にお届けしております。アルトマンシステムは、西ドイツの各研究所や国立大学の協力によって完成させた、ヨーロッパで20余年の歴史を誇る幸せな結婚のための情報システムです。

●アルトマンシステムの詳しい内容、ご質問、
資料請求は……

☎03(348)8588 (わいふ係)

※または、ハガキに「W.F」と明記の上、アルトマンシステムわいふ係
にお申込みください。

ただいま会員31,024名

現在、会員31,024名。5年8ヵ月で誕生した
幸せなご夫婦6,703組。アルトマンは、あな
たに最適な理想の結婚相手をより広範囲の
中から選出し、数多くの出逢いのチャンス
をお届けする結婚情報のデータバンクです。

(数字はすべて昭和58年7月末現在)

確かな愛の出逢いを創る

アルトマン システム

株式会社アルトマンシステムインターナショナル

本社／〒160 東京都新宿区西新宿1-26-2新宿野村ビル28F・29F

TEL.03(348)8511(大代表)《資本金2億5,500万円》

支社／東京第一・東京第二・札幌・仙台・名古屋・大阪・広島・福岡

投稿ホットライン——能ある鷹は爪をかくす

職場は多面体

愛すべき職場——死角の部分に何があるか？

企業にこそ非難の矛先を

神奈川県横浜市 北川 洋子

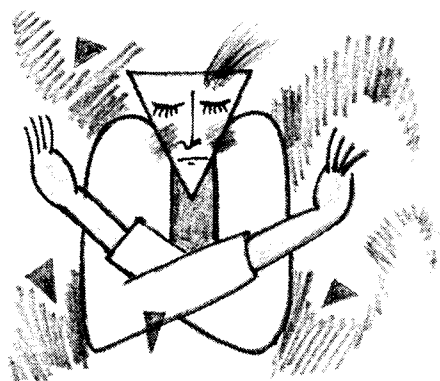
『法外に安い賃金で労働力を提供するパートが正規の女子社員の労働条件を引き下げる』

松本文化さんの憂い尤もなことである。そしてそのことで足を引っばられる気をする女子社員の心配やはり尤もなことである。

しかし、この様に劣悪な雇用態勢で女子正社員の地位を脅かしているの

は、パート社員自身ではないことを正社員的女性達は認識して、その非難の矛先をパート社員にでなく、安い使い捨て雇用を強いる企業にこそ向けなければならぬ。

私の夫も沢山のパート女性を使い、人件費を抑えることで業績をあげるのを得意とする男である。ある日帰っていうことに、



「今度雇った若い女子社員は能力がなくて本当に困るので説教してやった。」

『君、自分の時間給を考えたことあるのか。パートは時間給六百円弱であるに優秀に仕事をこなしているのに、君は千円以上とってなんだそのミスの多さは』と。だから私も夫に言った。「その優秀なパート女性に、時間六百円しか払わないということについての

あなたの感想はないの。ましてあなたの下のパートの労働条件は一日八時間、毎日出社の、有給休暇なしで働いているのじゃないの」

夫もこういわれれば胸が痛まない訳ではないので不機嫌になる。企業も決して不当に安く使うことを善しと認めているのではないらしい。しかし、企業間の競争という現実の前には、自分だけ高い人件費を払うことはできないというのだ。

それなら全企業が一斉に女性を男と同じ人間として認めさせる方法はないものか。ある。女子社員とパート女性か手を組んでさえいればその方法があると私は考えるのだ。パート女性も迷うことは大いに迷ってもいいが、決して職場を放棄しないこと。女子社員もパートの条件をあげることに機会ある毎に声をあげること。沢山の女性が職場に進出し、声をあげ、女性なしには仕事の流れない程その組織の内部に陣

を占めることなのだ。ごまめのはざしりも一人や二人ではただのごまめかも知れないが、数が膨大になり方向が一つになれば、もはやそれは企業の考え方を動かさずにはおかぬ強力な力となるのだ。

以上パートと正社員の相克という問題をとり上げての、松本さんの嘆きを考えてみた上での、私なりの意見である。ただし、パートの様な中途半端な仕事のしかたのほうが、家事・育児をするには都合がいいという意味で、パートを選択する女性については、私は答えていない。何故ならそれは家事の分担という時点での話であり、最初のテーマから少しはずれるからだ。今はあく迄も働きたいのに、パート労働しか与えられない女性の立場から私は考えてみている。

またここで新しく視点を変えて考えるとき、パート女性のために、私はもう一つの明るい展望をもつ。

今コンピュータによる革命が急激におしよせている。自宅での端末操作による在宅勤務・単調作業はロボットにまかせて、専門能力を活かす、時間の制約を受けない勤務態勢。この様な新しい社会は今までの正社員、パートという区別をあいまいにし全く新しい形の雇用契約を産み出す。その時に雇用の対象になる人、あるいは働く能力をもつ人は、常に人間らしい疑問を抱きつづけながらも、その解決を敗退という形ではなく、ふみこえるという意志と姿勢をもって生きる人だということだけは明確である。

確かに苦勞して勤めに出ていても、価値ある仕事を与えられる女性は、今のところ多くない。そしてそれはコピーとり、お茶汲みの能力しか女性にはないからだ、と豪語する男性もまだ多数いる。しかしそうした男やまた男の考え方は、もう既に過去の置物である。男性女性の区別なく雇った人間の能力

をフルに使わなければ、それこそ企業競争には勝てないことを、普通の男なら感じている。それを感じさせる体験を積み重ねてくれたのは、実に私達以上に口惜しい思いをして働き続けた、私達女性の先輩たちなのだ。感謝。

企業は有能な人間を狙っている。むずかしい価値ある仕事をこなす女性は勿論だが、つまらない仕事なのに、イキキと捌^{さば}いてきた女性こそが有能な

ワープロに夢中

翻訳が終り、ほっとしたのも束の間、このままでもいいからタイプしないと言われた。人事の問題で労働基準局に提出する書類である。A4紙にすると、英文で一枚、和文で一枚と三分の一である。少し残業しても、今夜中に仕上げようと、ワープロの前に座る。

ワープロに接して、まだ二カ月。なんとか打てるようになった。

のどと見抜く企業だけが、生き残る資格を得るのだ。

その日はすぐ明日にも開けて、私達に存分に腕をふるわせる職場を運んでくるかもしれない。或いはその日は私達自身のためには遠いかもしれない。けれども確実に私達の娘や孫娘がその光を受けることを思うと、私達のがんばりはとてもとてもすばらしいことだと思ふのだが。

東京都世田谷区 桜井 淳子

自分で翻訳したものであるから、原稿をみなくても、文は組み立てられる。英文に比べ和文を打つのは楽しい。本筋さえ変えなければ、自分で文体を考え、テニヲハを変えるのも単語をよりよいものに変えるのも自由である。英文の場合、書いた人の通りに打たねばならない。また英文を訂正するほど能力もない。和文の場合、こう変えた方

が説得力があると提案すると、すぐ通ってしまう。そこがうれしい。

ワープロは仕事なのに、あそんでいうようで面白い。東芝のJW3なので、ローマ字入力が可能である。あともう少しというところで、ディスプレイ(画面)から急に字が消えてしまった。

「誰? スイッチを切ったの!」
思わず叫ぶ。

私がワープロを使用しているのを知らない人が、気をきかして、メインの電源スイッチを切ってしまったのだ。残業は二倍の時間がかかってしまった。子供が好きなおもちゃを与えられたように、私は暇さえあると、ワープロであそんでいる。

仕事を辞めたら、購入して、ワープロで楽しみたい。俳句や詩の同人誌などの小冊子を、作成したらどんなに楽しいだろう。

夢はますます広がっていく。

(え・万谷陽子)

うちの悪ガキ

「もの」によって育つもの、育たぬもの

神奈川県横須賀市 細野 清美

ある日のことである。元気に遊びに飛び出して行った幼稚園の息子が、つまらなさそうな顔をして帰って来た。「どうしたの？」と聞くと「みんな自転車に乗って遊んでいるんだもん。つまらないよ」と言う。息子にはまだ自転車は買ってやってない。「補助付き自転車？ 甘い!! 補助なしので練習するのだ」という夫の意見のせいである。

事実、上の娘は、近所の子の自転車で何回か乗っているうち、幼稚園児の時に補助なしに乗れるようになっていた。今では二十インチのを買ってやり、乗っている。でも息子は体が小さいのでまだ無理だと思っている。私は言った。

「それなら外で遊んでいなさいよ。なわとびしたり、地面に何か書いても面白いし、オモチャの車を持っていったら

遊んだりしていると、そのうちみんなわたる（息子の名）が何をしているんだらう。面白そうだと思ってやってくよ、きつと」しばらく黙っていた息子。そのうち、車など数個持って出て行った。本当に私の言った通りになり、男の子たち皆でオモチャで遊び始めた。ホッとしたのも束の間。今度は小二の娘がふてくされた顔で帰ってくるなり、壁に寄りかかって座り込んでしまった。（喧嘩したのかな？）と内心思しながら、やはり「どうした？」と軽く聞いてみた。すると娘は「お母さん、ローラースケート買ってよ。私だけだよ、この辺で持っていないのは。みんなローラーやって私、遊べないもんね」と言う。

嗚呼、息子は自転車で、娘はローラースケート。もう何カ月も前からせがまれていたのだが、ローラーは買わなかった。「ねえ、買って!!」娘は追い打ちをかける。息子の自転車を買わないのは

納得させる自信はあったが、娘のローラーは私も気持ちが悪うてきた。
(買ってやってもいいのではないか。
それで皆と一緒に楽しく遊べるなら……)
娘に言った。「わかった。お父さんによく話してあげるからね」と約束した。

夜、夫に昼間の我が子達の惨め？な体験を話した。夫は「いいんじゃないの、そういうことあって」と軽く言う。
「あなたは直接そういうことを目にしないから何でもダメで通るのよ」と私。
我が家では、あんなに流行ったゲームウォッチも一個も買わなかった。理由は子供のオモチャにしては高すぎることに、一人遊びのものであまりよくないと思うこと、だった。子供達は近所の子達に貸してもらったりして結構楽しんでようだった。従って今回も夫は言う。

「近所の子達が買ったものを、次々と買っていったらどうなるのか。同じも

のを持たなければ遊べないでは困るではないか。それで遊んでもらえないんだったらそれでもいい。うちは買わないだよ」強いのだ夫は。確かな信念があるのだろう。私にはそれが無い。
私も近頃の子供達は、物を使って遊ぶ遊びばかりだと、苦々しく思っているが、私達夫婦の思惑とは逆の方向に現実はどう進んでいっている。

この頃、早期教育とやらで幼稚園に入る頃から、何かしら一つは習いごとに行くようだ。なかには二つも三つもやっている四、五歳児もいる。人気があるのは第一にピアノ・オルガン教室。第二に水泳教室。第三に英語教室。その他、習字・そろばん・絵・剣道等々。
我が家では何もやらせてない。この頃娘が「私も何か習いたい。いいなあ、みんなは習うものがある。私ぐらいだよ、何も習ってないのはー」この言葉に母親である私は弱いのだ。確かに小二になって何一つ習いごとをしてい

ないのは今では希少価値ではないだろうかと私も承知している。これも夫と相談してみる。夫は

「ピアノ？習ったら高いピアノを買わなければならぬぞ、そんなお金あるのか？何もあせることはないよ。大丈夫だよ。水泳？お金払って習うのか？俺が教えてやるよ(事実海が近くなので夏は夫が時々教えはするが)。英語はお前が教えられるだろ(私は家で英語の家庭教師をやっている)。習字は俺がやってやるよ(夫は国語の教師で習字も教えているが、娘にはまだ一回も教えてない)。そろばん？絵？早過ぎる。そのぶん友達と遊べ」こうである。こう言われれば正解ではないか。さらに、核心部分であるが、
「親がさせて見栄はってやらせることとは無い。子供は今、自分の欲求としてこれをやりたい、というものはないのだろう。ただみんなが何かをやっているから自分も何かをやりたいに過ぎ

ないのだ。もっと自発的になってから、本当にやりたいものをやらせるべきだ」と言うのには私も同感せざるをえない。

世の中には子供の好き嫌いもわからぬうちから親が一生懸命仕込んで大成することはある。しかし、そういう類の人達はもう小さい時から自分の歩む道は決まってしまうて、そのみ、という感じがしないではない。普通にやってみて自分で自分の好きな道を見つければそれはそれでいいではないか……。「全く、子供と同じレベルで騒いでいるんだからな」と夫に叱られてしまった。

夫の言う通り、自分の子供達が何に向いていそうか、それはまだこんな段階ではわからないし、すべてのことをやらせてみるなどという金も暇もないのが現実であろう。そうだ、あせることはないのだと自分に言い聞かせた。

後日、夫は娘に言った。



「有紀（娘の名）はローラーがやりたいのか？ それとまたみんなと同じものを持っていたいだけなのか？ どっちだ？ ローラーがやりたいなら近くのローラースケート場へ連れて行ってやる。こんな自動車の行きかう道路では危ないし、思いっきり滑れないぞ。こんなのローラースケートではない」と。

娘は習いごとと同じく、ローラーも、ただ友達と一緒にやりたいから欲しいのであって、ローラースケートそのものをやりたくて欲しがっているのではないのだ。しかし、「ローラーがなければ死ぬほど辛いなら買ってやる」という夫の言葉に対し、どうしてもそれが欲しい、とは言わない我が娘である。我慢する心が育っているのだろうか？ それとも、父親には言っても無駄だと思っているのだろうか？ とにかく、娘は「それほどではない」と言って、一件落着いたのだ。

それにしても夫婦は一致して子育てにあたるべきだとはよく言われることであるが、信念のない私はすぐグラついてしまうのだ。この先がまだまだ思いやられる出来事であった。しかし、夫の方もその後、ローラーのことを気にしている様子である。皆さんの家ではどうでしょうか。

親切のモノサシ

その一

自転車にのって、犬を散歩させていた中学生が、犬に引きずられて転倒した。耳からは血が流れ出ている。少年は痛そうに顔をゆがめながら、片手で耳を押え、片手で自転車を起こそうとしている。その上犬の鎖も握らなければならぬ。

たまたま通りかかった私は少年に声をかけた。

「自転車か、犬かどちらか小母さんが引いてってあげましょうか？病院へ行く？それとも家に帰る？」

少年は、いえ、大丈夫です、と一言だけいって、足を引きずりながら、自転車と犬を引いて、血をポタポタしたたらせながら去っていった。

Y・S

このことを、家で息子たちに話した。すると二人は、目を見合わせてシラッシュとしている。「お母さんて、オレたちの心理を何もわかつちゃいネエ」と……。

これぞ、中年オバンの、小さな親切余計なお世話だという。道で中年オバンになれなれしく声をかけられるほど、カッコ悪いことはない、痛くたって自分で何とか歩けるなら、自分で始末つける。見て見ない振りをしてやるのが中学生への思いやりというものだ。

その二

或る日、下の息子の自転車が盗まれた。友達の家の玄関先に止めて、小一時間近くその家に上がり込んで遊んで

いた間の出来事だった。

施錠するのを忘れていたのだから、息子にも落度はある。しかし何故、人の物を平気で乗って行くんだ？と私は憤った。すると、

「錠かけてなかったんだから、当然でしょ」

と上の息子がいう。

「当然じゃないわよ、他人のものは盗るべきじゃないでしょ」

「でもさ、駅やそこら辺の道端に置いてあるの、錠がかかってないとみんな平気で乗り回してるぜ。用が済んだら元へ戻すのじゃなくて、用の済んだ場所に残り捨てておくれ。高校生だって、大学生だって平気でやってるじゃん」

「人がやってようと、いまいと、いけないことはいけないんです」

ところがこの息子

「おまわりだって、錠がかかってなかったから一寸借りましたって戻したら、怒らなかつたよ、だから法律にはふれ

その三

新宿発、あずき一号、四人掛けの座席は、向かいに息子二人、私は通路側に座り、隣りの窓側の席は出張らしき中年紳士。連休のことで車内は家族連れ、友達連れで混んでいた。

やがて私の脇で、母子の会話が聞えて来た。

「お母さん、座ってる人と立ってる人では、汽車賃は違うの？」と十歳ぐらいの男の子。

「いいえ、ここは自由席だから同じよ」とでっぷりした母親。「ふーん、じゃ、座んなきゃ損だね」

こうなると私のお尻の下は何だか落ち着かなくなる。中学生とはいえ、二人共細身だから、つめてつめられないこともあるまいと、私の一存で、男の子を脇にかけさせてあげなさいといった。息子たちは身を窓際に寄せ、小学生は肘かけを机のようにして横向きに座った。やがて甲府にさしかかる頃、

母親は子供に、一寸席代って、と声をかけ、そのでっぷりしたお尻は大人一人分以上の席をしめてしまった。いくら細身とはいえ、中三と中一、一人分の席に二人座れるはずもなく、中三の息子はムツとした表情で席を立つ羽目に。

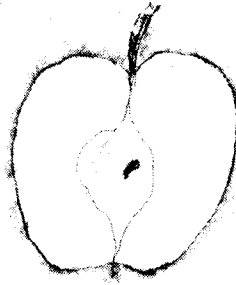
終点の松本で母子連れはニコニコと別れを告げ、私の方は旅行一日目は「お人よし」。「おせっかい馬鹿」と息子共から罵られ、揚げ句の果ては息子共と別行動となった。

混んでいる時はお互いさま、という私の考えも、彼らにいわせれば、

「座りたきゃ、一台遅らせて次のに乗ればいい。僕らだって座りたいから、人より早く来て並んでいたんだ。何がお互いさまだよ、子供に席あけてやったのに、あの親が座っちゃってよ」

太っていたからこそ座りたかったあの母親の立場もわからないじゃないけれど……。

(え・松本をきえ)

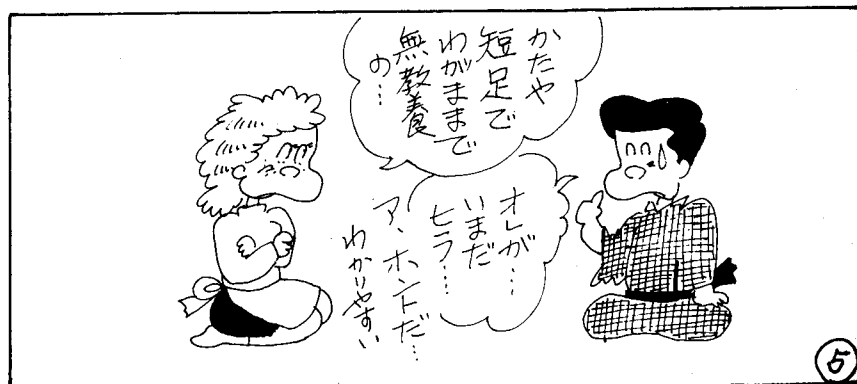
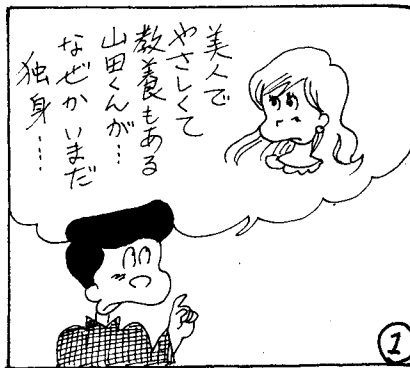


ていないんだ」
とうそぶく。

このケンカ、延々二時間は続いたのだけど、結果は物別れ。ところで自転車は、一カ月ほどすぎて、四キロも離れた所に住む親切な中年小母サンの通報によって発見されたのでした。

先生先生

お笑い先生



対話のページ

度し難い主婦

神奈川県横須賀市 松本 弘子（47歳）

「働きたい人が働けばいい。家にいたい人はいればいい。自由に選べばいいでしょ」と今主婦たちという。「自由に選ぶ」とは恰好よいが、実は「自由」なるもの、つまるところ夫の経済力と寛大さ次第で、「自由」は幻想でしかないのでは？ という意味の田中さんの御意見を、最近朝日新聞紙上にて拝見させて頂きましたが、言われてみれば現在の私の「自由」がまさにその通り、残念ながら一〇〇パーセント夫に依存した上でのもの、しかもその事実をすっかり忘れて、「自由」とい気になっているのですから、愚かというよ

り哀しくなります。

私の夫は数年後に定年を迎えます。健康であれば次の職場を探すはずですが、その際収入は良くて現在の三分の一。そうなると私は、もはや「わいふ」購読もままならず、ささやかな市民運動に従事するのも不可能となります。それを可能にしたければ、私が働く他はありません。その時五十歳を過ぎた私にある働き口といえば、食堂の皿洗いか、ビルの便所掃除、勿論必要に迫られれば私はなんでもするつもりでいます。

今を去る十一年前、出産、育児のため泣く泣く退職した私、その時点での収入は夫より少し上、退職するには惜しく、何よりも仕事のムシであった私としては、仕事を続けたいとひたすら思うばかりでした。しかし、近く

の保育所は現在のようにゼロ歳児から預かってはくれませんでしたし、会社も今でこそ、産後の女性の就労当り前となりましたが、当時は乳児抱えて働くなんて冗談じゃないという雰囲気でした。世の中変らぬようでも十年単位でみると、矢張りずい分変わっているものです。

私が辞めた後の会社にしても、以来後釜の常任社員を雇わず、専らパートの臨時社員で済ませている由、多くの会社で、正社員を減らしてパートに切り替える方式を採用しているようです。

つい最近の新聞が女子大生の意識調査と題して、「女性はいまの社会で差別されているけれど、それを変えていこうとは思わず、自立も望まない」という結果を報じていました。都内の三十二大学の女子大生五一七人（八割が四年制）を対象にしたものだそうですが、男性優位の社会のままで結構が四七％、男女平等に改善すべきは二八％、自立を望まぬも四七％、また、婦人運動自体はよいが、自分はいしたくないが五三％、自分とは全く関係な

いが二三％、自分も参加したいは六％、反対に婦人運動を否定する人も四％、その一方で、結婚後も仕事を続けたい人は七割にも及んだそうです。

結婚後も仕事を続けたければ、もう少し世の現状に関心を持ち、職場における女性差別問題などに目を向けて然るべきだと思います。

裕福な家庭で優雅な暮らしを楽しんでいる女子大生としては、世の冷たい風知る由もなく、社会に出てみないことには、問題は一つ見えないといったところでしょうか。

たまたまその後、現代アメリカ女性の意識調査（成人女性一三〇九人が対象）も報じられましたが、調査によれば、女として最も喜ぶべきことは？との問いに答えて、母親であることが二六％（七〇年には五三％）、妻であることが六％（同二二％）、主婦であることと八％（同四三％）、この十数年の間に、女として最も喜ぶべきことは、妻として母としての喜びより、「仕事」や「自由」の喜びに移り変っているのでした。

私自身、母親である喜びは、時として感じ

ますが、妻であり、主婦である喜びは皆無に等しいと思わざるを得ぬこの頃、であるならば、妻であり、主婦であることをさっさと返上して、独りで働き、独りで自分の喜びを求めて行くべきです。依然として夫に食べさせて貰う料簡で、言い度い熱を吹くとは、何と度し難い女（主婦）でしょうか。己が身の矛盾に呆れ悩みつ、女としても、人間としてもいかに生きるべきか迷いに迷っているのです。



前略 Y・Sさんへ

東京都目黒区 木村 道子

前略。わいふ一八五号、マン・ウォッチングの「口説かれても楽しくない」Y・Sさんの文章読ませて頂きました。でも何かひっかかるのですよね。貴女が、夜の巷で楽しく過しているらしいのは大変結構なことでご同慶のいたりですが、それでいいじゃないですか。

「お友達がほしいの。でも恋人はいらない」という一時代前の純情女子学生風に気をもたせないで、恋人になってもいい位の「お友達」が見つかるとは断固たる態度で、一人身にだけ与えられた自由を楽しんでいらっしやうってはどうでしょうね。離婚なさったことで、いつくせぬ程傷ついていらっしやることでしようけれど、そんなに気にして、肩ヒジ張らなくてもいい時期がきつと来るはずですもの。そして最後の文中、「わいふ」にどう奥様方よ、日々……のくだりは、笑いを越え

怒りすらおぼえますね。わいふ愛読者の奥様方って（奥様ということにはも疑問を感じますが）そんなに温室育ちばかりにみえるのでしょうか。「知っとりますヨ。そんなこと、体験済みよノ」という方々も多く居られるでありますように。

今日も貴女はラテン音楽を酒のサカナに楽しんでいられるのでしょうか。それが明日の活力となり得るひとときでありますよう、願ってやみません。頑張ってください。

幼稚園問題にひとこと

神奈川県横浜 橋本由紀子

「幼稚園の実体を斬る」を読んで複雑な気持ちになりました。存在そのものを問われるような問題を抱えた園が少なからずあるという事実、これは確かに衝撃的で、自分の子供が通っている園ははたしてどうなのかと、背ずじが寒くなる思いがしたのは私だけではないと思います。

幼稚園は子供を入れてみなければよくわか

らない、というのはよく言われることで、それは親たちが幼稚園の情報集めにさほど力を注いでいないことのあらわれでもあります。

しかも多くの親が、それでいいのだろうかという疑問すら持たないことも確かです。というのは実体はよくわからなくても、当の子供は結構楽しく通い、親も少しの不満はあっても、こんなものじゃないかしらというところで過ごしてしまうのが、おかたのようだからです。

それでよしとするのでは決してなく、幼稚園選びはもっと慎重にするべきとのレポートの指摘は、切実に受けとめねばならないことでしょう。

しかし、いくら詳しく調べても、よほど内部に精通していない限り、実態の裏の裏まではよくわからないのではないのでしょうか。一見良心的にやっていそうな幼稚園でも、どこかしらおかしいところの一つや二つは隠されているのではと思いますが、それが当の子供の幸せとどうつながるかは、また別の問題であると思えるのです。

厳密な幼稚園選びをしても、近所から自分の子だけひとり行くという場合、迷ってしまうのではないのでしょうか。なぜならば降園後に遊ぶ友だちは、同じ幼稚園の子同士に限られる傾向にあるからです。子供にとって、降園後に遊ぶ友だちが近所にいないというのはさびしいことです。

また、室内保育が多いか、自由遊びが多いかも、子供にとって合う、合わないという形であらわれてくることと思いますし、通うのに遠すぎて車や電車を使わねばならないと、下にきょうだいがいる場合、下の子を犠牲にすることにものなりかねません。こうした理由から、質のよい、良心的な幼稚園に入れば、それが即、子供にとって幸せにつながるかどうかは疑問です。

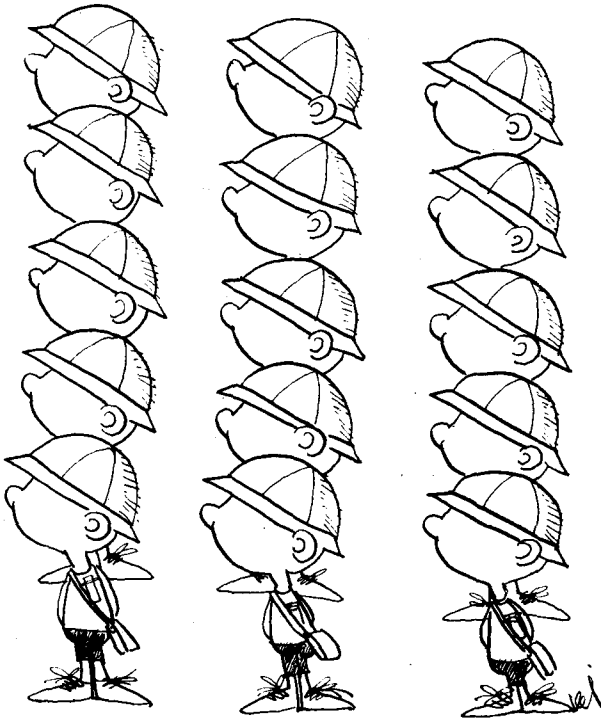
かりに、今、長女が通っている幼稚園について、森本さんが最後に示された十項目をチェックしてみると、半分以上ひっかかりそうなのです。

行事は結構盛大にやるし、授業参観は年二回。清掃などの雑用をする人は雇っていない

し、園長はもと小学校の校長で頼りなげ。経営者は父母に対して常に低姿勢だし、母の会の活動は活発です。でも、長女は実に生き生きと楽しく園生活を過ごし、私は入れてよか

ったとしみじみ思っています。

長女は年少の三期からこの幼稚園に入りました。それまで通っていた園で、二期の時に、ある事件を発端として娘が登園を嫌が



るようになり、また私自身も園に対する不満——クラスごとの懇談会がなく、父母との接触がきわめて少ないこと、行事などについての改革案を出しても園の方針だからと切り捨てられること、子供に問題が起きた時の担任の対応のしかたに親身さがみられないこと、あまりにお勉強主体のカリキュラムなど——があったので、思いきって転園させたのですが、前の園では例の十項目のうち、三つしかひっかかりません。

ということは、前の園の方が良心的なのかも知れませんが、長女には合わなくて、ちっとも楽しいところではなかったようです。それは近所から娘ひとりしか通っていないかったことや、しつけが厳しくきゅうくつだったこと、できないと責められたことなどからも思うえます。

娘は年長組になった今でも時々「お母さん、幼稚園変わって本当によかった」と言いますが、前の園でも楽しく通園している子供もいるでしょうから、子供が園に合う合わないということとは言えると思います。

子供を幼稚園に入れる時に親がやるべきことは、できるだけきめ細かく園の教育内容や体質などについて調べること（これは私自身おこたったことなのですが、幼稚園は大差ないと思い込んでいたので）を基本として、それとともに、子供の性格をよく知り、親の好みのワタにはめずに、子供に合った園かどうかを判断すること、また近所の友だちも行くかどうかということも欠かせない大事なことだと思います。

森本さんの問題提起にうなずきながらも、私自身の苦い経験から、少し補足したいことを書いてみました。

枚数がかなりオーバーしてしまいました。が、これでも半分以上越えたのです。というのは、レポートの本論とはずれてしましますが、子供がなぜ転園したのか、そのいきさつをもっと詳しく書きたかったからです。少し長くなると思いますが、読者の方々に、こういうケースもあるということを知っていただきたいので、ここに書いて

てみることにします。

娘が年少の二学期に、隣の席の体格のよいT君にいじめられるようになったのがそもそものきっかけですが、彼は一学期に別の女の子をいじめており、その子が父親の転勤で引越してから、娘に矛先が変わったのです。入園前に近所の大勢の子と遊び、もまれていた娘だったので、私は娘自身で解決できたらと、担任や相手の親に言うことなく、しばらく様子をみていたのですが、そのうちにイジメはエスカレートしていき、手首にかなりのひっかけ傷をつくられたので、担任に相談しました。

担任は、気をつけてはいるのですが、と席を変えてくれましたが、それでも担任の目を盗んでイジメがつづき、ある日、私は娘が円型脱毛症になっていることに気づきました。イジメがその原因と思えたので、T君の母親とも相談し、互いに双方の家を何回か親ぐるみで行き来するうち、イジメそのものはおさまってきました。

しかし、娘はすっかり自信をなくし、園

で委縮してしまい、できるはずのこともできなくなつて、お迎えの時に泣いて私にしがみつくことも、しばしばありました。そのころに私自身がもっと娘の気持ちを受け入れてあげる必要があったと思いますが、心では思っている、そのすべを知らない未熟な母親でした。

担任に相談すると、お母さんが神経質になるとよくないとか、よほどのことがなければこちらから申しませんとか言われ、また、娘の内向性を指摘され、だからよけいこういうふうになってしまつとも言われました。そしてしまいには、お母さまは園に何をお望みなのですかと言われ、二の句がつけませんでした。

娘は園のことを一切話さなくなり、体重もへり、顔色も悪くなりました。私は何とかしなくてはとあせるばかりで、スモックの脱ぎ着から、工作の手順などを家でやらせたりしてみました（その園はかなり高度の内容の工作をさせていたようです）、それらは根本的な問題解決にはならなかつ

たようです。

三学期になる直前に、娘がどうしても行きたくないと暗い顔で言うので、夫と相談して、近所の子が大ぜい行っているM園へ転園させることに決めました。転園するところが長い目でみて娘にとってプラスになるかどうかは判断しかねましたが、とにかくこの時点では環境を思いきって変えることが必要なのではないかと思いつたのです。また、前の園の方針そのものも娘に合っていないかと思っていたので、ここでごんばらせてもかえって悪循環になるような気もしました。

M園は入園を決める時に最後まで迷ったところなのですが、送迎バスが出るので足がきたえられないこと（前の園は歩いて二十分位）や、経営者がかみ手で応待するのでは何となく嫌だったことや、マンモス幼稚園なので子供に目が行き届かないののではない、やめたところだったのです。娘は皆と一緒にいきたいと言ったのですが私は自分の好みを娘におしつけた形になってしま

いました。これは大いに反省すべき点です。皮肉なことに娘のためによかれと思っただけが裏目に出たという結果になってしまったわけです。幼稚園の内容や体質にさほどの差はないと思ひ込んでいた私は歩いて通え、少人数の園の方が娘にとってはよいのではと固く決めていたのです。

転園後、娘はすっかりもとの明るさを取り戻し、生き生きとしてきました。担任の先生は娘がいわゆるいじめられるようなタイプの子ではないことから、きつと悪い要因が重なったせいでしょうと判断されました。

また、前の園は有名小学校の予備校との異名もあるほどでしたが私は全く知りませんでした（情報不足——これも反省）。知っていたら勿論入園させていません。今年は何人国大附属や私立に入ったかというところで園にハクをつけるようなところがあつたようです。これは余談ですが、やめてまもなく、前の園ではしっかりしている子の親に有名小の受験をすすめる、そのための塾

も紹介しているという事実を知り、受験戦争の片棒をかつぐようなところに長居させないでよかったとしみじみ思っています。

そういうところだからこそ、結局ついていけなくなった子に対しては厳しくおしりをたたくようなことをしていたらしく、娘も、できないとダメよ、と先生言うんだも



のと私にははじめのころ、しきりに言っていました。できなくてもいいんじゃないの、がんばれば、と私が言うと、だって先生がダメっていうんだものと言いつ張っていました。

やはり、子供が楽しく通園すればそれが何よりと思います。幼稚園は今冬休みですが、娘は早く行きたいと言って、大好きな担任の先生にお手紙を書いたりしています。前の園でも、もし子供に問題が起これなければそのまま通園していたかも知れず、問題が起きてはじめて見えてきたことがいくつかあったわけで、そういう意味では勉強になりました。

田中さんへ

京都府長岡京市 中西 清美

先日朝日紙上に発表された報告、なかなか刺激的で面白うございました。「ネアカになった」とお叱りをうけた（そううけとめております）三十代の主婦の一人として感想文を

書かせていただきました。

私自身は、ある意味で「よほど運の悪い主婦」の一人だと思っております。その理由はいろいろありますが、一つは残念ながら夫が今風の「やさしい夫」ではなく「あからさまに妻を抑圧し、無神経なふるまいをする」と私が感じたことが多々あったからです。さらに、私自身が「ネクラ」であることが、三代主婦の主流派にならない最大の理由でしょう。だからこそ、確かにおっしゃる通り周りの主婦と話をしても私の「ネクラ」が浮き上がり、話がすれ違ふことが少なくありません。私の個人的状況をよく知っている友人は、私が日本の主婦の一般的な状況を話すと「それはアンタの個人的状況や、イマドキ、そんな夫婦はオラン」と断言します。どう論点がズレるかと申しますと、

私 日本では主婦が財布を握っているとはいっても、必要な最少限の金が必要なところに支払っているだけ、彼女の自由裁量分はほとんどないし（例えば一万円以上のモノを独断で買えるのは、半分もないハズ——そうい

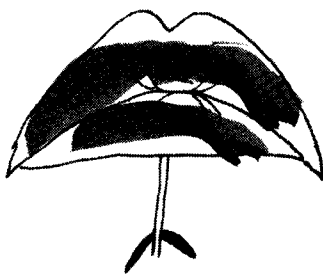
うアンケートがあったように記憶しているのですが）第一、公開家計簿で、主婦のこづかい「ゼロ」（例えば実態はそうでなくても）は一万円以下というのが何と多いことか！友 そんなこといったって、現実には皆自由に食べたいものを食べ、ビールでも何でも飲みたいものを飲んでいるではないか。ダンナに気をつかって、又は顔色をうかがってやりたいことを我慢したり、買いたいものを買わないなんてハナシはきいたことがない。

私 日本では、育児のため一たん職をやめた主婦が再就職する場合、よほど運がよくなければ（少々の技術や資格があったってダメ、時間的にダメということもある）新しい職場で一から再出発しなければならぬし、収入も大幅にダウン、対等なハズの夫の収入の数の一から十分の一ということもありうる。そうなること妻の労働を夫は自分の労働と対等とはみなしがたく、結局妻のキバランかヒマツブシぐらいにしか考えず、そんなことのために、一日精一杯働いてきた上に家事まで押しつけられてはカナワンと一切非協力を実行

するか、不在のため現実は一切分担せずということになる。

友 主婦が外へ働きに出るのに最大の障害は「子供」、子供に不自由な思い、淋しい思いをさせるのは自分がイヤだから、家でできる仕事か十時頃から二時か三時までの仕事しかできないことになる。ところがそういう仕事がないということが最大の問題、夫の協力がナイということが最大の問題、たとえかえたって民間サラリーマンである限り全く不可能、ハナから考えられない。(結局彼女は夫個人の圧迫は全く感じていないのです)

夫婦や家庭の問題は、確かに個別的部分が多くて、それぞれの家庭でそれぞれの個性に合わせて解決されていくものであり、一般論は非常に述べにくいものですが、あえて「ネクラ」代表の私と「ネアカ」代表の彼女との最大の違いをいえば夫の存在感でしょう。私にとって夫は敵として私の頭上に君臨し、時には強い力で頭を押さえつけようとする。支配力そのものなのです。



十年以上も結婚生活を続け、私はそういう「夫像」の大部分が虚像であったことに気づきました。私の勝手な「思いこみ」の部分もあつたということです。「夫がリードし妻が従う」という社会のモデルに反発しながらも影響はされ、そう思われていたということかもしれません。

一方彼女にとって夫はあくまでも横に寄りそってくれるパートナーです。必要なときには彼女のかたわらでやさしくしてくれ、不必要なときには遠のいていてくれる人です。彼がそばにいる時彼女は不満を感じることがありません。何かしてやれば「ありがとう」と感謝するし、彼女が頼めばそうじでも何でもやってくれるそうです。二人の生活の始まった時から彼女は「被支配感」とは無縁です。彼女の最大の不満は夫が「仕事」に奪われ、彼女のそばにいてくれないことです。その点では彼女も典型的日本の妻です。けれど彼女の怒りは夫ではなく会社に向けられればやかされます。

山田太一さんという脚本家は、昭和九年生まれですが「民主主義男女平等」というアメリカ直輸入の理念をまともに受けて育ったために女の人に「オイ・オ茶ノ」とえらそうに言うことは不可能なのだそうです。私の感覚では、今の四十代の男性で彼のような人はたぶん少数派だと思いますが、確かに戦後生まれのニューサティーと呼ばれる世代の男達、つまり私の友人の夫達にそういう人はけっこう多いように見受けられます。彼らは学生時代、小学校から大学まで十六年もそれ以上も、しっかりした女の子達に「○○クン、ダメじゃないノ」と叱られ続けてきて、女を低くみる、女にいばるなんてことがもう本能的にできなくなっているのでしょう。

男性優位の企業社会にどっぷり入って、少しはいばることを覚え、妻にえらそうにしてみても、妻には「仕える」なんて発想がどこにもないから「どうしたん？ ビョーキ？」といなされるのがオチ、そういう、やさしい夫をもった妻達はネクラになりようがない——本当にそうなのでしょうか。

林真理子さんというコピーライターを御存知でしょうか、彼女は昔なら「ネクラ」に生ききれなかったタイプの女です。まず、彼女は美人に生まれませんでした。オツムの方もイマイチ、しっかり受験には失敗しています。もちろん就職もダメ、不採用の通知が四十通も束になったそうです。オトコもダメ、「ふられ続けている」のだそうです。

私が二十代に彼女のような生活を送ったら私もはっきりに怒り狂う「ネクラ」になったでしょう。まず受験システムに憤り、就職の男女差別に憤り、カワイコちゃんばかりチャホヤして「私」をかえりみない男ドモに憤り、めっちゃめっちゃおもしろくない青春を過ごしたことでしょう。でも林さんは全く私とは違うのです。おそらく今までの日本女性の類型には全くないタイプではないかと思うのです。彼女は、憤らない怒らないといって「おしん」のように我慢するのでもない、といってクールなのでもない、なんとなくフワッとのりきってしまう、運が向いてくるとそのことははっきり自覚して、その運、与えられた

状況を徹底的に利用して、ルンルンはしやぎまくる……。

彼女はもちろん例外的な人です。しかし、いくら例外だといっても、彼女のようなタイプは確かにこれまでの女性像の層からは生まれなかった……そういう気がするのです。フワフワしてみえるがしたたかな「ネアカ」とでも形容すればいいのでしょうか。彼女は矢のようにとんでくるありとあらゆる非難に、決して完全には打ちのめされない、といって固く殻を閉ざして全く聞く耳をもたないというわけでもない……こういう「新種族」を生み出す基盤が確かに三十代以降の「ネアカ」女性群にあるのかもしれない。

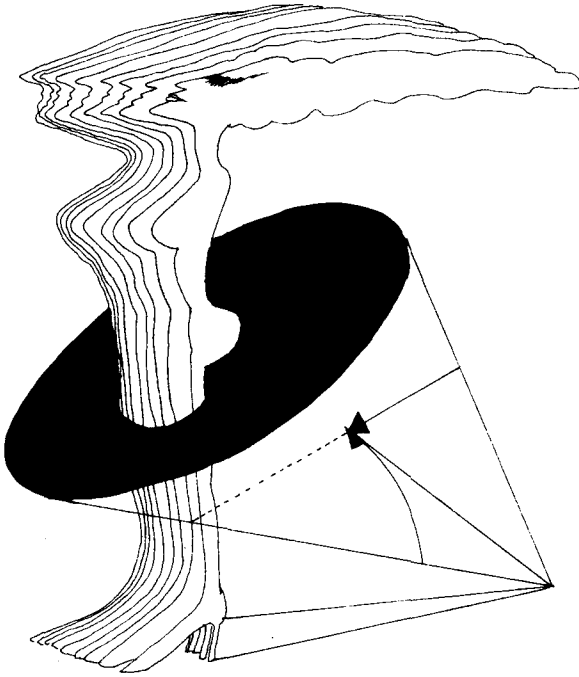
彼女達が「ネアカ」でいられるのは、あきらめるべきはあきらめて、それ以上そのことにこだわらないで、さっさと転換できるからでしょう。

よほど特殊能力に恵まれて、しかも実家・親からの応援があるなどの幸運にも恵まれないう限り、とぶのは不可能、それならその状

況の中でできるだけ自分も楽しく、家族も楽しくできる生活をしていく……確かに賢明な生き方でしょう。自分のための「こづかい」はなくとも現実に家計費という枠とはいえ、十数万、場合によっては数十万が自分の自由裁量下にある。そういう幻想であるかもしれ

ないけれども日常的「自由」の中で彼女達はしたたかにたくましく生きている……それが現実なのかもしれません。

ところで話は変わりますが、毎日新聞一月八日付「新アフリカ人間考」で面白い方が紹介されていました。G・C・ムアンギさん、



東アフリカ・ケニアのキクユ人（族）というところとはあえて避けています（京大法学部博士課程の学生さんだそうです。私自身「女性差別」も世の中にあるあらゆる差別の一つだという考えですが、彼も「アフリカ・黒人差別」に触れながら、インタビューの中で「女性差別」に触れている。やはり同じ差別としてとらえている、彼は男性だけれど日本社会の中の女性差別に気付いている、そこが面白いと思ったのです。ただし、彼の「日本の女性差別」分析は又面白くて「女性差別」がまがっているからやめようというのではなく、先進国の中で恥ずかしいからやめようと思うとのこと。

それからもう一つ面白いと思ったのは、言葉と差別の関係に彼が触れているということ。例えば「クロンボ・クロちゃん」は当然として「部族」も差別用語としてとらえていること。その英語相当語TRIBESには野蛮な人間たちという意味があるとのこと。（ちなみに研究社の辞書によれば①種族・部族・蛮社（同一の血統・制度・慣習を持ち、上に族長

をいただいて群居する)との説明のあと、例として the Arab (Red Indian, Mongol) 及び Tibb. とあり、ヨーロッパ・白人系の民族には TRIBE は使わないものらしいですから、彼の言うのはそう的外れではないかも知れません。俗語辞典によれば、単に「家族・特に大家族」ぐらいの説明しかありません。ところでキクユ語には「部族」という言葉はないとのこと、自分達とは違った人間のグループを見下して呼ぶ言葉がないということなのでしょう。

その他アフリカ人・黒人として差別される側として、同時に男性として差別する側として、いろいろ彼に質問したいことがあります。例えば

① 具体的にどういう点で日本で特に女性が差別されていると感じるか。
② 日本以外の国の人々の間に、日本の女性は差別されている、虐げられているという見方と、いや実際には表面的にはそう見えるだけで、家庭内では女性はしたたかで強く、実権を握っているという相対立する見方がある、

それについてはどう思うか。

③ 日本女性の間にも、差別を感じて鋭く追求・糾弾する人、あきらめる人、逆に、先に私がふれたように、感じない人も今ふえつつあるようだが、そのことについて、特に女性差別を感じない女性についてどう思うか。

④ 女性にまつわる差別語は日本語には数多くあるが、どういう言葉・表現をムアンギ氏はご存知か、キクユ語にはそういう言葉はないのか。

⑤ 世界の非黒人系の国々の中で、日本は黒人差別が強い方が、そうでないのか、もし強い方なら、なぜあえて黒人であるムアンギ氏にとつとは住みにくいであろう日本へ来て勉強する気になったのか、日本の現状を知らなかったとするなら、ケニアではほとんど日本という国は、知的な人々の間ですら知られていないということなのか。もし、それ以上に魅力を感じていたということなら、日本の何が彼の心をとらえたのか。

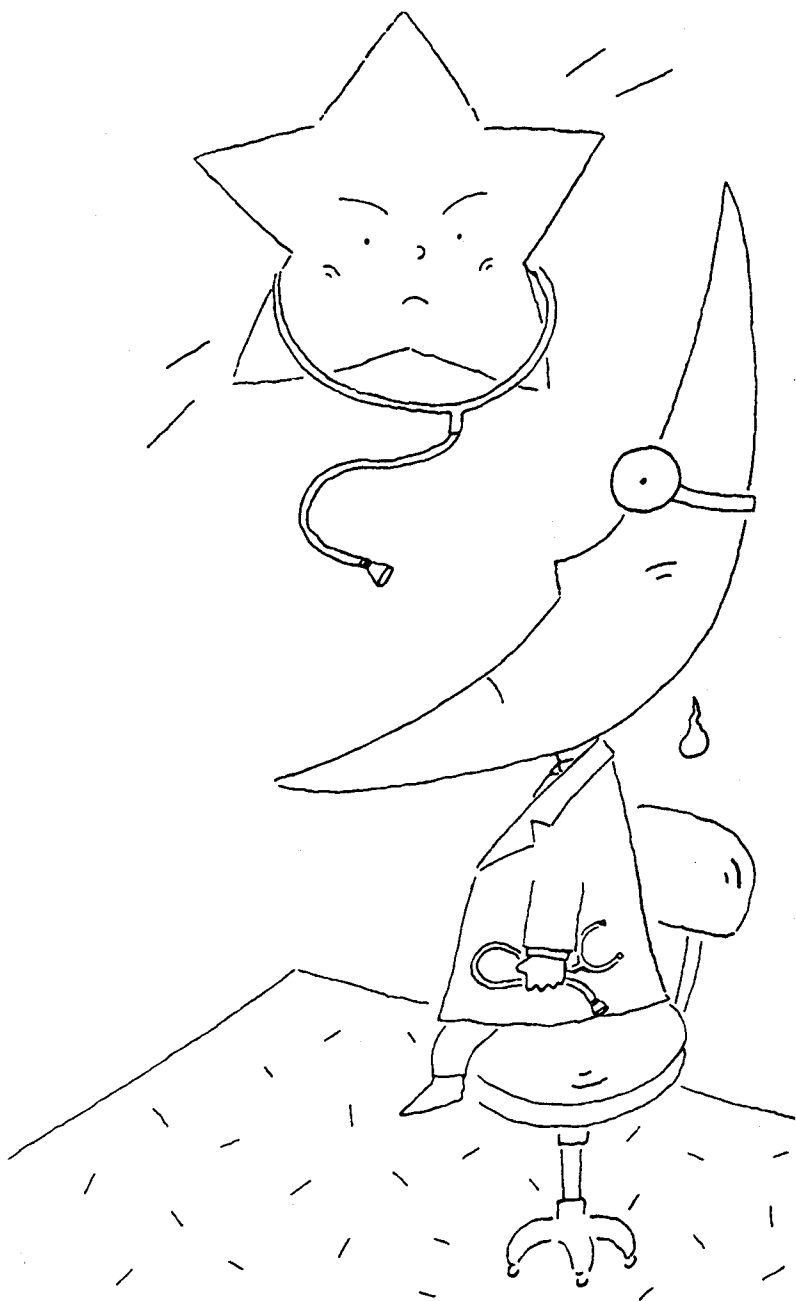
田中様及び「わいふ」のオエラガタは私の

質問どうお考えでしょうか。ピント外れでしょうか。ぜひ私、彼に質問したいと思うのですが、何せ私は「ただの主婦」何の肩書きもなければ彼はよくて戸惑うか、ふつうはムシされるのがオチと思うのです。そこで、お願いがあるのです。「わいふ」の名前を借用させていただきませんか。インタビューアーとして全く素人の私ではダメとおっしゃるなら、他の専門の方にしていただいけようです。滞日十年になろうとするアフリカ黒人男性に日本の女性観を伺うのはかなり面白いことだと思うのですが。皆様、お考えはいかがでしょう、お返事お待ちしております。もちろんレポートにして「わいふ」に寄稿する所存です。

(元・松本圭子)

特集

お医者さんを診断する

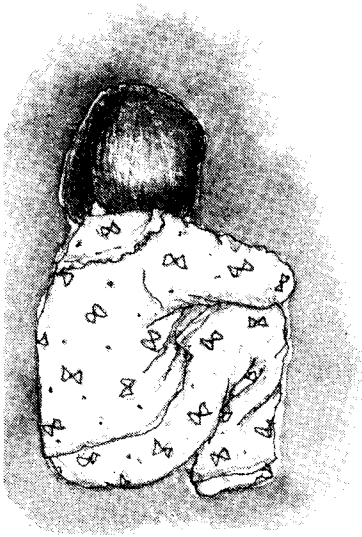


小沢恵子

誤診に振りまわされて

原田 静枝

東京都多摩市



昭和五十五年、わが家は都内からH市のマンモス団地に引越した。当時三歳二カ月の息子と一歳六カ月の娘を育てていた私は、何よりも先に小児科の先生を探す必要があった。そのころのH市は新興住宅地として開発されはじめたばかりで、病院など数えるほどしかなかったが、やがて隣接する団地の医療センターに小児科のあることを知り、ここを「かかりつけ」と決めた。

そこはM小児科といい、医者は五十年輩のM先生一人、受付に奥さんと看護婦さん二人の小さな医院だ。団地住民は比較的年齢層が若いので幼児が非常に多かったし、周辺の住宅地からも通院して来る子ども達がいて、M小児科は連日ラッシュ。待合室はいつも人いきれでムンムンしていたし、待ち時間が長くて閉口しながらも、通院できる距離に小児科はこしかない、と親子ともどもじっと我慢して順番を待つことになる。

超ラッシュの病院ではあったが、診療時間の長いことは大変な魅力だった。

午前九時から正午までと、午後一時から二時の育児相談・予防接種を挟んで八時までが正規の診療時間。夜八時から十二時まででは急患受付で、M医師は夕食を診察室ですませて待機している。更に深夜から朝にかけてはM医師の自宅に電話すれば、いつでも起きて診てくれる。「私達は子どもに恵まれなかったので小さい患者さんの苦しみを放っておけないのよ」と受付にいる奥さんから聞かされたことがあったけれど、陸の孤島といわれる環境での子育てには、いつでも診てくださる先生²の存在はありがたく、私のみならず母親たちみなM医師を頼りにしていた。

しかしこの信頼が後年私を金縛りにし、娘の苦しみを正確に把握できない母親、と周囲の非難を浴びせられることになったのである。

「過保護が子どもを

ダメにする！」

昭和四十九年、息子は小学校一年、娘は幼稚園の年長組になっていた。この四年ほどの間病氣といったら風邪ばかり。それでも「咳が出た」「のどが痛い」といってはM小児科に飛んでき、注射か薬を二、三日続ければすぐ直ってしまう程度のもので、怪我もなく元気に育っていた。M医師ともすっかり顔なじみになって、聴診器を当てられながら冗談も言い合える先生と患者の関係になっていた。

六月十日の朝、娘がふらっと起きてきた、と思ったら「わたし寝る」と再びベッドへ戻っていった。その日は幼稚園は代休だ。前日は日曜で運動会、徒競争や母子一緒のフォークダンスで大ハッスルしていた娘。きつと疲れたのだろう、と私は軽く考えた。

しばらく家事を片付けて様子を見に

行くと、薄目をあけて妙にぐったりしている。少し熱っぽい感じだ。「M先生に行ってみようか」と起き上らせた時、胃液のようなものを吐いた。小児科の待合室で「気持ち悪い」とまた吐く。この時母親の直感で、おかしいな、と私は思った。娘にはいままで吐くという経験がなかった。食べすぎたわけでもないし、胃液様のもので出すなんて変だ。

M医師は診察をすませると、「風邪に自家中毒が併発」という。吐き気止めと精神安定剤の注射を三本打った。「自家中毒なんて初めてです。どうしたのかしら」と私。M医師は「幼稚園で何かあったと思うね。心当たらないかな？」という。

何も思いつかない。娘はお茶目でふざけやさん。家ではもちろん園でも、保育室から一人飛び出してスベリ台で遊んだり、おしゃべりが過ぎて廊下に立たされ、戻って来るとき「ガンバラ

ナクツチャ／＼と大声で叫んでクラス中に笑いをまき散らす、と屈託がない。「まあ今日一日ゆっくり休ませてやれば大丈夫だろう」ということで帰宅した後、夕方までぐっすり眠った娘は確かに元氣を取り戻したように見えた。おなかすいた、と茶碗一杯のうどんをペロッと平らげ、それは無事胃に納ったので、やれやれ初体験の自家中毒も軽くてすんだ、とほっと一息ついた。ところがそう簡単にはいかなかったのである。

二日目の朝、目覚めた娘は「おなか痛い痛い」と泣きやまない。驚いてすぐ病院へ飛んでいく。「まだ落着いていないね」とM医師は点滴をしてくれた。夕方まで眠り続ける娘の熱が、三十九度になったり三十七度になったりと不安定だ。おかしいな、と心配になったけれど風邪の熱と思えば考えられぬこともない、と開き直る。

一日中何も食べないで寝ていた娘が

夜になって「おなかやが欲しい」と要求、また茶碗一杯食べた直後、「痛いよお、痛いよお、おへその周りが痛いよお」と泣き出した。私はおろおろし、娘を連れて夜十時診察を受けに行った。

M医師はすぐ痛み止めを打った。その時私は思わず「先生、こんなに痛がるのは盲腸じゃないですか」と口走った。それまで私の身近で盲腸にかかった人はいなかったので未経験ではあったが、何か本能的にというか、母親の直感というか、無意識にそう言ってしまったのだ。

だが言い終った瞬間、日ごろ温和なM医師の顔が真っ赤になり、ものすごい勢いで「誰が盲腸と言ったんだ／＼」と怒鳴ったのである。それから長々と自家中毒症についての説明——二、八歳の小児に、突然に、原因となるべきものがなく発症し、頻回の嘔吐・高度のケトン尿・全身倦怠感・傾眠状態がある——を聞かされた。原因の一つに

過保護があるともいっただした。「お母さんがそんなに神経質だから子どもが自家中毒になる。もつとのんびり接してもらわなくちゃ困るなあ、自家中毒は病気じゃないんだから／＼」

自分では子ども達を過保護どころか厳しく育ててきたつもりで私であったが、M医師のあまりの剣幕にその自信もぐらつき、勝手に憶測して申しわけなかったと詫び、「こう毎日連れてくるようじゃ子どもに不安感と甘えを植えつけてるようなもの、明日は一日静かに寝かせて置くように」と言い聞かされて帰宅した。

三日目。娘は終日うつらうつらしながら「おなか痛いよお」、水を飲んで「痛いよお」。腸が動くせいか胃が痛むのか。熱も下らない。夜になってリンゴ汁飲ませるとまた痛がる。「ママおしっこ」と甘ったれるので、とうとう私の感情爆発。

「あなたがしっかりしないから、ママ

が先生に叱られるのよ。病気じゃないんだからしつかりしなさいノ」

と、ベッドから抱いて床に立たせた。

「あっ、痛い」

と、娘は体を二つに曲げた。私は口惜し涙こらえて知らん振りをする。うらめしそうな顔で私を見つめ、体を曲げたまま一人歩いて行く娘の後姿を、かわいそうどころか腹立たしい思いで見送った。

夜八時ごろ娘と大の仲良しY子ちゃんのママK子さんが様子を見に来てくれた。Y子ちゃんは日ごろよく吐く。かかりつけはもちろんM小児科で、自家中毒と診断受けるたびに三日間アメだけしか食べさせてもらえない。吐き気が止まらなければ自家中毒は直っていないのだから、とK子さん。「それにしても嘔ちゃん吐かずに痛がるのは変よ」と娘のおなかをさすりながら、意地を張っていないでもう一度診てもらったら、と強く主張する。



仕方なく電話して、夜十時に連れていくとM医師、「まだ直らない？」とひどく不機嫌な顔で言う。私はおろろと懸命に弁解した。見捨てられたら近くにもう小児科は一軒もないのだ。

深夜十二時までかかって点滴三種、その間娘はすやすや眠っている。病院にしていると不安感が消えるのか、おなか痛いといわないのだ。M医師は書棚から部厚い『小児科全書』を取り出し、「ここをしっかりと読んで自家中毒という私の診断が間違っていないこと確認しなさい」という。私は娘の枕元でそれを読んだ。医学用語がずらっと並んでいる専門書は、素人には難解であった。だが娘の症状と書かれた内容のところが一致してる、と思えたのは事実だ。吐き気・だるそう・よく眠るetc。

点滴のあと、注射一本打ってレントゲン撮影をした。「ああ、おなかにガスが充満してる。ここまで悪くなると

は思わなかったけれど、もう大丈夫。

明日浣腸すれば直るよ」とM医師は太鼓判を押した。母親の私は、この三日間時には最悪の事態（それは具体的なものではなかったが）を想定して恐怖に襲われもしたが、深夜まで娘のために尽してくださるM医師に、ありがたく感謝もしていた。

四日目、朝十時の検温は三十九度。

午前中来るよう言われていたので連れていく。このところほとんど寝ていない私は、疲労から持病の腰痛が出て、団地四階のわが家から娘を背負って階段を下りることができなくなった。K子さんが代っておんぶ。知り合ってからずっと娘をかわいがってくれるK子さんに、「母親の私じゃなく、あなたが甘やかしているんじゃない？」などと悪態つきながら行く。尿が出なくなっているのでお尻に注射一本打たれた。夜七時、また熱が三十八度三分に上っている。もう一度M小児科へ連れて

行って点滴二種、下熱注射一本。一時間半かかって点滴を終らせると、「帰らずにちよっと待って」と呼び止められた。そしてH市立総合病院への紹介状を手渡されたのである。

驚く私にM医師はこう言った。

「明日（金曜日）はうちが休診日なので診てあげられない。何しろ子どもで自家中毒を悪くするのは親なのだ。枕元で心配そうな様子を見せると、子どもには敏感に伝わるものだよ。こういう時は親から離して入院させ、一日か二日ゆっくり点滴をしてくるとケロッと直る。いままでも何人かこういう親がいて、子どもを入院させて直したことがあるし、みな上手くいったんだ。お宅も入院させなさい」

突然のことに、どうやって帰宅したのか覚えていない。頭の中がぐるぐる回って、宙に浮いたような気持だ。娘をベッドに入れると、彼女は痛みを訴えながらも疲れて寝入った。夫と二人

どうしてこんな事態になったのか、娘の誕生から今日までの五年間を思い出し、私達の子育てにどんな失敗があったのか、話し合う。しかし過保護の原因は思い当たらない。堂々巡りしながらも娘が哀れで何度もベッドをのぞく。

とにかく明日入院だ。一日二日ということだから、身の回り最低限にしておこう、と準備をはじめた。

深夜十二時すぎ、突然電話のベルが鳴った。M小児科からだ。

「いま熱は何度ありますか？ ひとまず切りますから、病院へお電話ください」

計った。三十七度二分。ダイヤルを回す。

「わかりました。只今から先生お宅に伺います」

私は、結構です、こちらからお願したわけではないから、と強く辞退した。また「親の過保護」と聞かされるあの恐怖から逃れたかった。

零時四十五分、医師来宅。着流してあった。娘のベッドに直行し、聴診器当て、耳から採血。すぐ玄関に戻り、「アセトンが出ているので完全に自家中毒です。採血の結果は今夜お宅に知らせません。朝になったら直接市立病院に行ってください。何しろ親が・こ・んなにしたのだ・」

それだけである。呆気にとられた夫と私。M医師はわざわざ自家中毒と念を押しに来た。それにしても耳からの採血に疑問が残る。まんじりともしないで夜が明けた。

やっとわかった病名

六月十四日の朝は雨だった。それも雨足強く暗い空。八時四十五分家を出た。車の運転をしながら振り返ると、夫に抱かれた娘が小さく小さく見えた。幼いながら入院と聞いて不安におびえる娘の姿に、私は涙が溢れてくる。

九時半、日市立総合病院に着く。はじめての病院だ。外来受付にM医師の紹介状を出す。すぐ診察・検査・レントゲン・採血・採尿（これは娘が「出ない・」と泣くので中止）すませて、小児科病棟に入院手続きして病室に入る。

白いベッドに寝かされた、と思う間もなくまた「診察します」と看護婦さんの声。小児病棟入院患者としてのチェックだそう。娘が抱かれていったあと、私は空いたベッドの端に座って病室の中をぐるっと見回す。八つの白いベビーベッドに、幼い子たちが静かに横たわっている。母親が附添っている様子はない。どんな病いここに連れて来られたのだろう、遊び盛りの子ども達のいたいけな姿。ガラス窓に張られたバンビや花の賑わいが、わずかな救いであった。

お昼ごろ娘は戻ってきた。看護婦さんが「検査の間中我慢してちっとも泣



かなかったのはえらいわ。こんなお子さんも珍しいですね」とほめてくれる。肛門からもカテーテル入れて検査したそう、相当苦しく痛い思いをしてきたようだ。

点滴がはじまるとぐったり寝入る。看護婦さんが「大丈夫しっかりお守り

しますから一度お家に帰っていらっしやい」とすすめてくれたのと、一人置いてきた息子も気がかりだったので帰宅し、K子さんに留守を託して病院に戻ると、娘はお尻に注射されてベソかいていた。発病以来十数本も打たれ続けだから、泣きたくもなる、と哀れに

なった。お小水の出る点滴をしているうちに、夕方やっと排尿することができた。ほんとに何日振りだろう。

五時、附添いの私にだけ食事が出る。とても食べる気がしない、と辞退したけれど、「お母様が元気でないといとこれから先の看病ができませんよ」と看護婦さんから注意され、やっとの思いで飲み込む。それにしても変だ。一日二日の入院ですむ、それも親から離して、とM医師は言ったではないか。しかし検査の様子が単なる自家中毒とは思えぬほど。看護婦さんの「これから先の看病」という言葉と合せて、私はますます不安になってきた。娘の痛みを忘れさせようと、童謡を歌っていたも人形遊びの相手になっていても、その事ばかりが気にかかる。

夜七時ごろ「のど乾いた、お水」というので、飲ませていいか、と聞きにいくと「ちょっとお話があります」と医局に呼び入れられた。そこで、



「M先生のカルテに基づいて私共が診察・検査したのですが、どうも自家中毒ではないようです。すい臓かとの疑いもあって調べたけれど、そうでもない。現在のところ開腹してみないとはっきり言えませんが、虫垂炎ではないか、というのが小児・外科医師団の診

断です」

ああやっぱり、発病二日目に私が盲腸では？と言った時怒りに顔を紅潮させたM医師の顔が目の前に浮ぶ。

「熱が下らないのは部分的に腹膜を起している疑いがある。くわしくは明日朝ご主人にお話しますが、手術と考え



てください」

私は驚き、今夜このままにして置いて万一のことはないのか、と食い下ったが、医師は「全体症状が落着いているので大丈夫」と答えた。発病以来一日も欠かさず入れていた栄養剤の点滴が効を奏し、体の衰弱が見られない、というのである。

何ていうことだ。自家中毒を直すためにしてきたこの五日間の治療が、本命の病いの手術に役立つとは、それでは熱と腹痛に苦しみ抜いた娘と、親の過保護と責められ続けた私の苦しみ悩みはどうなるのだ。『いますぐこの事M先生に伝えます』と私の声は大きくなっていたのだろう。「いやあ、あちらには私共から連絡しますから、お母様は何もおっしゃらないでください」と押えられてしまった。

「手術」という思いがけぬ事態にショックを受け、動転した心を鎮めきれぬまま病室に戻ると、娘が泣いている。

私の顔を見たとき、「ママ今すぐお家に帰ろう」とますます泣きじゃくる。何も知らない娘、明日開腹手術を受けることになるなんて……。

「直ったらスイカ、みかん、玉子ごはん食べたい。そしておむすび持って動物園に行く。スーパーでアイスクリームも買って、ね」

「よし、よし」

気をまぎらせ、なだめ、やっと寝ついた娘を残して受付の公衆電話まで走り、息子の世話をしている夫に「明日の手術」を伝えているうちに、涙が溢れて止まらなくなってしまった。

命びろいした娘

六月十五日（土）入院二日目

一晩中三十八度三分の熱、「ママ痛いよ」と何度も目を覚ます娘。腹部をさすってやりながら、これは手遅れじゃないか、と私は恐しきで全身が震え

てくる。夜は白々明けて、昨日とは打って変って空は晴れ上っていた。

八時に回診あり、「お母さんは外に出ていてください」とうながされ、非常階段まで出る。雨に洗われた後の澄んだ街並、あざやかな緑、舗道を笑いながら登校して行く小学生の姿。一年生になったばかりの息子は今朝どうしただろう。突然母親と妹が家を空けてどんなに戸惑っているのか。

レントゲン室から抱かれて戻った娘の後を追って先生が来られ、「すぐオペです」と言われた。ああいいよ——。娘の体はすると裸にされて、全身くまなく清拭。母親の私を寄せつけない厳しい雰囲気だ。抱きしめて逃げだしたい思いをこらえて立ちつくす。頭に帽子、青い手術着におおわれて、すっかり小さくなった娘はストレッチャーに乗せられて引かれていく。その横を歩きながら、「頑張ってるね」と声をかけると、コクンと首が動いた。一

階の手術室の前で夫と私は取り残され、娘はドアの中に消えた。

午前十時、赤いランブがつく。暗い廊下のベンチに座って、夫と二人、どうしてこんな事になってしまったのか、口惜しくて繰り返す、泣き言ばかりになる。手術室の中を思い描こうにも、未経験の私にはどうしてもイメージできず、ただ祈るしかなかった。

十時四十五分、小児科の医師が出てきて「やはり虫垂炎でした。随分散っていました。が、くわしいことは外科の先生が話されます」といつて去る。よかった、生きられたんだ、と夫と顔を見合せてはっとする。

十一時半、やっと娘が手術室から現われた。「あき／＼」と叫んで駆け寄る。外科病棟に用意されたベッドに移された後、しばらくして娘はうつすら眼を開けた。「あきちゃん、ママですよ。わかる？」と看護婦さん。かすかにうなずく。生きてた、生きてた!! 全身

麻酔のため、娘はぼーっと静かだ。

そのまま点滴に入る。「水ほしい、水」と何度も訴えるので、からからに乾いた唇をガーゼで湿してやった。今日から娘の主治医になったT先生が見えたので、「助けていただいて本当にありがとうございます」とお礼をいう。先生は「大事に至らないで本当によかった。一日遅かったらちよっと危ないところでした」とほっとした様子だ。私は、あらためて日曜日にずれ込まないうちに手術できた幸運を思った。M小児科の金曜休診がなかったら、娘はまだ自宅から通院していたに違いない。

その後手術経過を聞かされた。小児科・外科医師団としては「虫垂炎」では？との診断で手術に踏み切ったが、それ以外の場合もあり得る、とメスを大きく入れたこと。結果は予想通りだったが、化膿した部分の膿が半分腹膜内に流れ出していたので、蒸溜水 1000ml

使用して洗滌した。しかしこの後化膿するかどうかは、抜糸する時までわからない、ということであった。

とにかく手術は終わったのだ。M医師から「一日二日の点滴でケロッと直る」といわれた自家中毒ではなかったけれど、病源は切り取られた。命びろいしたのである。

夕方六時半やっと点滴終了、私に抱かれて娘は待望の白湯を飲む。まず口をすすぎ、あらためて入れた一口をごくくと飲む。一口飲むたびに顔を上げてニコリ笑った。まるで五年前の赤子に戻ったようなあどけなさで……。



薬害の不安が現実

しかし、母親の私がM医師を四年もの間信頼し続けていたツケは、まだまだ払い切れなかったのである。

手術後三日間、三十八度前後の熱がどうしても下らない。娘は傷口の痛さに加えて体がだるいと、ひどく機嫌が悪い。小児科からの回診では「のどが少し赤いから風邪のせいか、ひどい便秘のためだろう」といい、主治医のT先生は「腹膜の化膿が進んでいるのかも知れない」という。手術成功の喜びも束の間、私の頭の中は（どうして？どうして？）と原因がつかめず混乱していく。

四日目の朝、浣腸で大量の排便をしたが熱はそのまま。午後T先生が見えてやっとわかった。「手術後使った下剤がまったく効いていなかったのです。いままでも随分強い薬を飲んでいた

んですね。明日から葉を変えてみます」との報告だ。手術のとき得た娘の体液につけてみて調べたそうだが、これまでずっとM小児科から「風邪薬」と飲まされていた抗生物質、それが抗体を作り手術後の治療のさまたげになっていた、という。

「葉の乱用は避けよ」とは聞かされていたが、いま考えると二、三日温かく寝かして置けば自力で直る風邪でも、すぐ「M小児科に行こう」と連れていった母親の私の軽率さと、その都度ピンク色に染った抗生物質を処方して手渡すM医師の葉第一主義の弊害が、ここに現われたのだ。四日目の夕方からやっと熱は下った。

七日目抜糸。娘が処置室に入って間もなく私は呼ばれた。「何とか腹膜炎は起こさずにすんだが、腹膜と表皮の間が化膿してしまった。膿を取りながら肉の盛り上りを待つ」という。恐れていたことが現実になって、娘も私も

沈んだ気持ちになった。T先生も「あれだけひどい状態だったから心配してましたが、残念でした」としきりに慰めてくださった。

T先生は中国人で、娘の手術の執刀をし、主治医となってくれた外科医だが、実に優しく患者と家族に向き合っており、病状については隠さず納得のいくまで話してくれた。毎朝八時必ず娘のベッドに来て「おはよう」と声をかけ、診察のあと葉の紙で猫や象や兎など折って娘に与える。その見事なこと。外科医は器用な人が多いとは聞いていたが、T先生は事の外折紙が上手で、娘は沢山の動物たちに囲まれてどれほど励まされたかわからない。こういう医師も存在するのだ。M医師の高圧的態度に苦しんだ後だけに、私にはとても身に泌みた。

十三日間の入院の後、毎日ガーゼ交換に通う。よくもこれだけとあきれるほど膿が出た。カテテールを傷口に入

れる時は非常に痛いそうで、「大人だって悲鳴をあげるのに我慢強い子だ」と何度も言われた。娘のこの我慢強さが虫垂炎の痛さや、M医師の言いなりになっていた母親の叱責に堪えたのだ、と思うと哀れでならなかった。

「明日からはもう来なくていいよ」と完治宣言されたのは七月の末、発病から四十日も経った夏の日盛りであった。

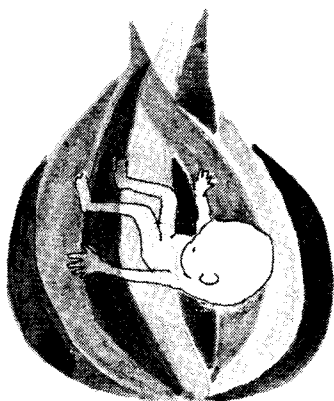
いま娘は十四歳。右下腹部に斜め深くくい込んだ一筋の傷は、そこだけ色濃く消えずにある。この傷を見るたびに、手術の後「もうM先生とママの言うことだけは信じない」と強い口調でいい切った五歳の娘の姿が思い出される。

そしてまた、病院側の手落ちで幼児を失った両親が訴え、という記事を読むたびに、私の体は堪え難く震えてくる。

わりきれない流産の体験

清水美佐子（31歳）

兵庫県川西市



数日前より吐き気と熱っぽい状態が続いていたので、予定月経を二週間過ぎた六月中旬、産婦人科を受診するため勤務先の病院を休出した。

私と夫は、同郷出身の核家族で、過去二回の出産は夫婦話し合いの上、里帰り分娩をしていた。次回出産の際もそのつもりになっていたが、毎回の定期検診先であった市民病院が、増改築に伴い移転したため、通院が不便になり、来春、長男が就学年齢に達することもあって、今回はやはりゆったりと里帰り分娩という訳にもいかず、現居住地である自宅近くで出産先を決めることになった。

最終月経から割り出すと、出産予定は来年の二月中旬の計算になるので、その頃はまだ長男が幼稚園へ在園中であるし、登降園の際、出産先の病院へ立ち寄るには、何かと都合がよからうと、幼稚園にほど近い〇産婦人科医院で診察を受けることにした。

以前、産科の定期検診に通院していた市民病院の各診察室は、患者が溢れるほど混んでいて、朝九時の受付で、へたをすると十二時を過ぎる半日がかりの診察にうんざりしたものだったが、O産婦人科の小さな待合室には、妊婦と中年婦人と二人だけのひっそりしたものだった。

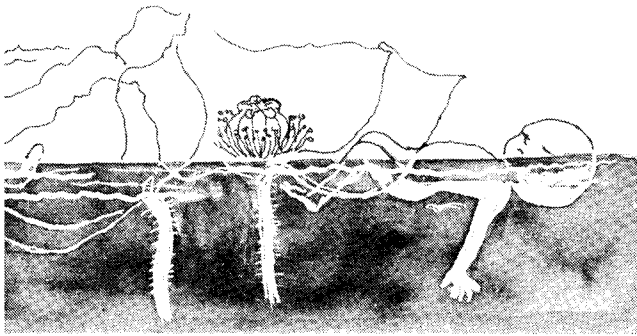
受付で来院の目的と自宅の電話番号を聞かれたあと、「おしっこを採ってください」と尿コップを渡され、受付を済ませてから二十分たらずで名前を呼ばれた。

さきほど採った尿の妊娠反応を簡単に説明したあと、カルテと保険証の家族構成をみて「お子さんは今、二人いらっしゃるんですね。それで、三人目はどうされるんですか」と暗に中絶を勧めるような医者のことばに、しばし哑然とした。

きくところによると、核家族の夫婦は子供はせいせい一人か二人に制限し、

三人目以降は、ひそかに人工妊娠中絶をするケースが多いという。

二人だけの生活を縛られるのはいやだから、子供は一生つくらないと、徹底した避妊をしている若い夫婦もある



とのこと。

だからといって、初診の患者に向かつて開口一番「三人目は……」とは、いささか早計ではないだろうか。

医学的な問題は別として、たとえば、本人が妊娠継続を躊躇しているとか、高年齢の上でのひょっこり妊娠であればまだ納得もできるが。

三人目だろうと四人目だろうと産みたい人は産むのである。

目前の、四十歳の後半と見受けられる産婦人科医の医者としての良識を疑った。

私は子供がいらないからふしあわせ、二人いたらしあわせ、三人いたらもっとしあわせの、子だくさん幸福論者ではないが、自分の体内に宿った生命は愛しいと思う。ましてや、難産の末にやっと出産したとか、その他の諸事情があるならばまだしも、三十歳では三人目の出産を拒める年齢でもなからう。先刻の医者のことばを否定するよう

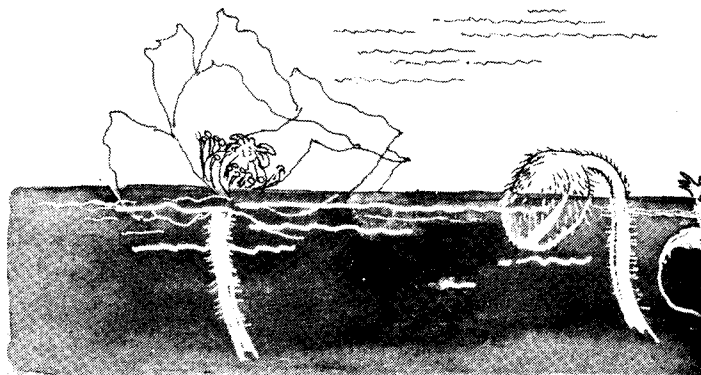
に、出産の意志を告げると「そうですか、それでは……」と内診台での診察になった。

受付で診察料を支払い玄関を出ても、不愉快な思いは消えず、安易に病院を選んだことを後悔した。

つわりもどうにか落ち着き、そろそろ一カ月検診を受ける時期になっていたが、初診の時、医者から受けた不安で転医も考えたものの、結局は幼稚園へ近いからというだけの理由で続けることにした。

〇産婦人科の待合室には、中年の婦人が一人、ポツンと居るだけで、月遅れの婦人雑誌と読み古された週刊誌があるだけで、閑散としたものだった。

椅子に掛けてしていると、聞くともしなしに、診察室の奥から医師と患者のやりとりが聞こえてくる。医師の声はとぎれとぎれにしか聞きたれぬが、患者の方は何か抗議しているようで、切り



たくないとか、切らなければいけないのとか言っているようである。

そういえば、この待合室は戸や衝立などのくぎりはなく、長椅子を置いてある壁に面して、医師の机と患者用

の丸椅子が配置してあるから、待合室の周囲が静かであれば、医師や看護婦の私語なども聞える訳である。

間もなく、診察室から三、四歳位の女兒を連れた妊婦が出てきた。話の内容容からすると、帝王切開に関することだったので。

中年婦人のあとに、私の番になった。「何か変わったことはないですか」と、医師に型どおりの質問をされ、すぐ内診台へ上がるようにと指示された。腔内に器具を挿入され、腹部の診察は、初診時と同じだったが、二度目の腹部の診察は、妊娠初期の触診にしては、腹部をかなり圧迫され、時間が長かった。

過去二回の出産を通じて、このような診察のされ方は、今回がはじめてである。(三カ月初めの最も流産しやすい時期ではないか)(いや、もしかしたら、私の腹部に腫瘍のようなものできていて、それで診察に手間どって

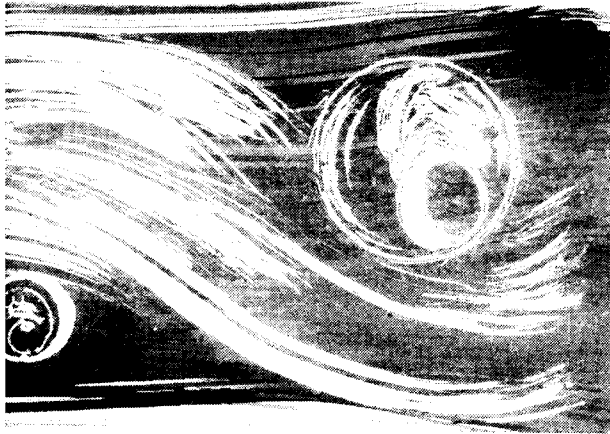
いるのでは？」と内診台の上で、いろいろなことを考えた。

内診後、医師から、何か言われるのではないかと身構えていたが、異常に關することは、何も言われず、妊娠に必要な血液検査を受けただけで、その日の定期検診は済んだ。

内診のことが気になったが、医師それぞれ、診察方法も異なると思い、この際は、医師を信頼するしかなかった。

その日の夕方、排尿後、おりもの様の薄いピンク色の出血があったが、内診時の器具で腔壁が傷つき、そのための出血だろうと軽く考えた。翌日もやはり、トイレの度にピンク色の出血がある。その時になってはじめてもしかしたら？という思いがあった。

定期検診の翌々日の午後より、ピンク色から、茶褐色の出血になった。出血は少量ずつだが、下腹部鈍痛に加え、腰痛もある。もう流産の徴候に間違いなかった。



流産の原因は、いろいろあるといわれている。ウイルス感染症、下腹部への外傷、過度の性交、精神的ショック、黄体機能不全などなど。初期流産の四〇〜五〇％は、染色体異常との報告があると記されている。けれど、不明な

場合も少なくないとい——。

医学専門書を参照すればきりがない。考えれば考えるほど、不安だった。

長男の時も、次男の時も、妊娠の経過が順調だっただけに、ショックだった。

不安はあったが、〇産婦人科へ来院すること自体不安で、土曜日は、職場にその旨を申し出て、極力、安静状態で過ごした。

翌、日曜日は、生理時の三、四日に相当する出血量で、腰痛も増している。流産の症状は、日を追って、徐々に進行しているのだ。

もう、迷っていられず、明日は、どうしても行かなければならなかった。

月曜日、二度目の診察日より五日後、〇産婦人科へ、電話連絡した。

こちらの話の内容をひととおり聞いた後、「△日に受診された清水さんですね。実はこの間の血液検査で、よくない結果がでているので、お宅へ何度

も電話したのですが、通じませんでした」と婦長格の落ちついた年配看護婦の声だった。

（血液検査でよくない結果？）貧血の検査かH B 抗原か梅毒の血清反応なのか。

「出血のことが、気になりますので、今からそちらへ伺います」と電話を切り、身支度をした。O産婦人科へと急ぐ路上で、先程のよくない結果と言われた血液検査が、気になった。

O産婦人科の待合室は、月曜日にもかかわらず、外来患者は二人だけだった。

受付で「おしっこはせずに、しばらく待ってください」と口早に言われ、その日は、内診をせずに、超音波断層診断装置での診察だった。黒と白の画像の中で、心臓が規則的に動いているのがみえた。

医師から「お腹の赤ちゃんは、大丈夫なようです。家でもなるべく安静に



して、無理をしないように。次に出血のことですが、子宮の入口に、あずき粒大のポリープがあります。内診直後の出血はこのポリープからだと思えますよ。その後の出血は、切迫流産のた

めです」との説明があった。

子宮頸管ポリープのことを言われたのは、O医師が、はじめてだった。次男出産の一カ月検診以来（五六年八月下旬）、婦人科へ受診していないので、ポリープがあるとすれば、それ以後、できたものなのだろう。

次に血液検査の結果、報告書を渡された。

梅毒血清反応の、ガラス板法が「陽性」になっていた。

これも、今回がはじめてのことである。医師に、ありのままを告げると、梅毒反応だけ、もう一度検査して、検査の結果次第では、主人も検査する必要があるとのこと。

切迫流産の件といい、梅毒の検査結果といい、もう、踏んだり、蹴ったりで、その日は流産止めの薬を処方され、帰宅した。

検査を受けることを、主人が、心よく引き受けてくれたことで、私の気持ち

ちの負担は軽くなったが、O 医師への不審は、倍加するばかりで、再検査、梅毒反応の結果が、気掛りだった。三日後、流産の経過観察と、梅毒の検査結果のために、再び来院した。

やはり、再検査でも結果は同じで、TPHA テスト「陰性」、ガラス板法は「陽性」とでていた。

もっとも、妊婦には非特異反応としての、生物学的陽性反応があるので、TPHA テストが「陰性」であれば、心配いらないのだが、医師から「再検査の結果次第では、御主人も……」と言われれば、指示に従わねばならず、その日、長男の幼稚園でおとまり会があり、寝具を運ぶため、自宅で待機していた夫と連絡をとり、検査を受けて貰うことにした。

夫の梅毒血清反応の結果は、ガラス板法、TPHA テスト、いずれも「陰性」だった。

その後、流産の症状は、小康状態を

保っていたが、二十九日の早朝より、陣痛様の腰痛があり、結果的には、切迫流産の徴候から、約二週間後の七月二十九日午後一時二十二分、自然流出

した。

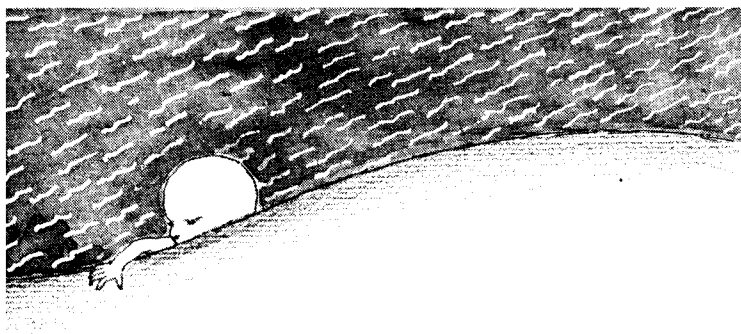
O 産婦人科へ、前もって連絡後、排出した胎児を持って、来院した。医師から、胎児が出た時間を聞かれ、すぐ内診になった。

不全流産なので、子宮内容清掃が必要とのことで、機器の準備をするまで、内診台へ足を開いた状態で固定され、待たされた。

静脈麻酔を手にした看護婦の声にならって、八まで数えた時、意識が薄れかかった。うすらいでいく意識の中で、医師の「やっぱり……」の音が聞こえた。

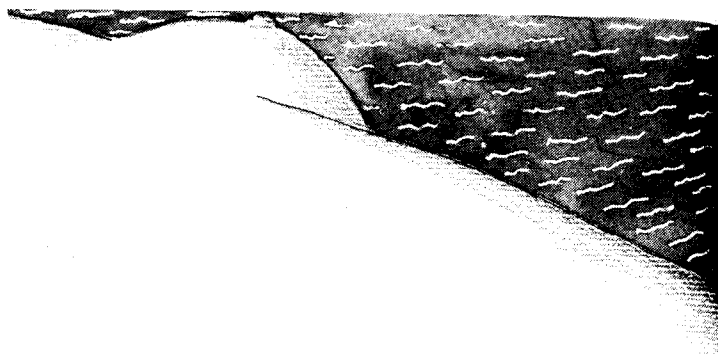
時間にして、何分程、眠っていたのか。看護婦達の「重いー!」「ちょっと、こっち持ってよ」の声で、ぼんやりと意識が戻った。二人に抱きかかえられて、ベッドに寝かされた。

手術は終わったのだ。下腹部に鈍痛があるので、手を伸ばすと、ぶ厚い脱脂綿があててあった。手術が終ってから、



四十分後に、看護婦が様子をみにきた。時間と共に、意識の方は、はっきりしてきたが、立ち上がると、フラフラするようで、二時間余り、仮眠した後、帰ることにした。インターホンがあったので、連絡したが、何の応答もなく、診察室のドアが、開けてあり、医師が所在なげに座っていたので、「もう帰れそうです」と声を掛けると、手を振って、「会計に行ってください」という。

切迫流産の症状で来院した際に、医師より、子宮頸管ボリープのことを言われたので、手術の時、切除したのか、あっても影響ないものだからそのままになっているのか、聞きたかったが、不親切な医師の態度に、気がひるみ、言われたとおり、会計に行くと、年配看護婦から、どぎつい色をしたブルーの錠剤を渡された。出産後、服用したことのある薬だった。妊娠中絶用に特別に作られたものなのだろう。薬袋の



裏に、手術後の注意が五つ程箇条書きに示されてあった。
「十日以上も出血が続くようであれば、連絡してください」と注意を受け、最

後に「おだいじに」の言葉に押されるように、玄関を出た。外来患者が、だれもいないのが幸いした。

思えば、O産婦人科へは、何度足を運んだことだろう。

もう二度とO産婦人科へは、来院することもないだろう。安易に病院を選ぶべきではないと、今回のことで、痛感した。

《後記》

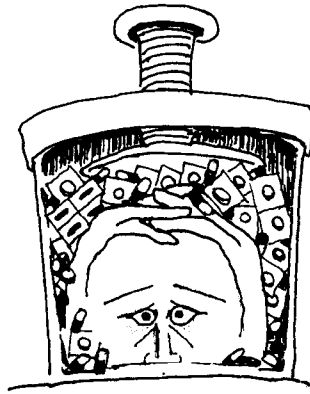
幸い流産後の経過がよかったので、流産後、最初の月経から基礎体温を測定して、排卵日を予測し、現在、妊娠五カ月目です。（出産予定日五九年六月上旬）前回の流産が寂然としなだけに、もう一度頑張ってみようと決心しました。当然、転医しました。現在の主治医は、温厚な先生で、安心して出産を託せそうです。

薬恐怖症

太田 千代

東京都新宿区

三年前のこと、私は持病の喘息が悪化し、激しい発作をおこしてしまいました。それまで自己流の対症療法で何とかきりぬけてきましたが、これを機に思い切って都内某総合病院のアレル



ギー科に診てもらうことにしました。

当日、息も絶えだえの状態で這うようにして漸く病院に辿りついたのが朝八時半、待合室はもういっぱいの人で、みな苦しそうな顔をしています。三時

間近く待ってやっと順番がきました。先生もお忙しいだろうからとあらかじめ発病の経緯を便箋一枚に要点よくまとめておいたのをまず差し出しました。先生も「これは助かる」と喜ばれ、早速診察、応急の治療を受け適切な指示もいただいて、今度は調剤の窓口で待たされること約一時間、もらった薬がなんと吸入薬も含めて全部で九種類もありました。

色も形もとりどりで錠剤ありカプセルあり粉薬あり、薬袋の表にはただ食後何錠一日何回と記してあるだけでどれがどういう症状に効く薬なのかさっぱりわかりません。

喘息、といっても人によりまたその時々で現われる症状はさまざまです。私の場合、くしゃみ、鼻みず、咽頭のかゆみ、眼のかゆみ、痰のからむ咳、狼の遠吠えのような咳、のどのぜん鳴、等の症状が交互に現われ、結局は息を吸うのも吐くのもままならぬ呼吸困難

に陥ってしまったのです。早目にその症状に合った薬を使えば大事に至らずにすむわけで、こうなるともう薬次第ということになります。調剤の窓口でたずねてもとりあってくれず、朝早くから待たされ通しなので疲れ果ててしまい、初日はそのまま帰って来しました。

とにかく順序をきめて一種類ずつ服んで、自分で人体実験をしてみるしかないのです。一錠でピタリと効く時もありましたが、時には胸の鼓動が急に激しくなったり、手が震えて字が書けなくなったり、猛烈に睡くなったり冷汗が出たり、もうすっかり薬恐怖症にかかってしまいました。

次の診察日と指定されたのは六カ月後です。私はその日を待ちかねて今度はわら半紙にそれぞれの薬を一錠ずつ、間隔をおいてセロテープではりつけて持ってゆきました。さすがに先生も苦笑されて一つ一つ考えながらこれは鎮咳剤、これは去痰剤と書きこんで下さ

いました。これでもう安心です。私は大喜びで最敬礼して診察室を出ました。ところが受取った薬を見ると何種類かまた別の薬がまじっているのです。

次の時もそうでした。すぐ診察室に戻ってたずねようとしたのですが、次から次へと患者の応待に追われている先生や忙しそうに立ち回る看護婦さん達を見ると、これ以上しつっこく聞く勇氣もなく結局諦めてしまいました。

いくら忙しいからといって医者はなぜ自分の処方する薬について最後まで責任のもてる方法をとらないのでしょうか。こんなやり方でみんな何とも思わないのかしら、と不思議でたまらず、ある時、待合室で隣り合わせた同年輩位の人にそれとなくたずねてみました。その人は笑いながら後の壁の貼紙を指さしてくれました。見ると「喘息友の会」入会の案内で、これに入ると喘息についての知識や入院の幹旋、薬の名前、効用など先輩達が体験談をまじえ

て親切に教えてくれるのだそうです。なるほど、と思いました。

しかしどこかおかしい気がしてなりません。ともかく薬にもする思いで入会はしてみました。いろいろな人の話を聞いていううちに私のはまだ症状が軽い方だとわかったのは収穫でした。しかしこういう形に頼っている間はいわば傷のなめ合いに終わり本当の意味の病いからの脱出は望めないと感じ、間もなく退会しました。

現在私はアレルギーに対する免疫をつけるための注射を定期的に行いながら、とにかく薬を服まずにすむよう日常生活の中で必死になって身体を鍛えることに努めています。病気そのものも恐いですが、むしろ、病気に罹って現在の医療体制の中に身をゆだねることの方がもっと恐ろしい気がするからです。

嘘のような

ほんとうの話

三井早穂子

東京都新宿区



大気汚染がこの数年、いくらか落ちて来て来たのだろうか、東京には咲かないと思われていたきんもくせい、再びあの甘酸っぱい香りを放つようになった。

毎年、この香りに誘われるようにして、私には、忘れられない記憶が甦える。

それは、三十数年の昔にさかのぼる。医療事情が現在とは比べようもなく悪かった時代だからこそ、起ったことなのだろうけれど、当時十三歳であった私には、やはりそれはショックであったし、その時の光景を思い出すのは今でもおぞましいことである。

そのおぞましさを、敢えてここで活字にして再現することに、今、ためらいがないわけではない。第三者の読み手の方々に、どんな不愉快なショックを与えるかと思うと、やはり今日まで家族の中だけの記憶に押しとどめてきたように、そっとしまい込んでおくべ

きかとも思う。

さらに又、それをありのままに私が書いたつもりでも、それからの医学はあまりにめざましい進歩をとげていて、読み手の方々にはとても合点のいかないう内容であろうと思う。

そんなわけで、これを書くに先立って、近くの大学病院の医師に、知人を通して、私の見たことが目の錯覚であったか、或いは現実に取りうるかどうかを尋ねてもらった。

それによれば、昭和二十四年という時代背景、九月末の、まだ残暑の残る日々であったこと、そうして当時の人々の栄養事情等からくる抵抗力という点でも、それは起り得たであろう、というご返事をいただいた。

戦前、私の生家は日本橋で洋服店を営んでいたが、いよいよ戦局が怪しくなり、数人いた職人さん達も次々と兵

役にとられ、父は父で将校達の軍服を縫う為に憲兵学校に徴用されて、店は閉店を余儀なくされた。尤も開店していても、紳士服など注文するのは国賊とみられた時代で、布地も手に入らなくなっていたから閉店は時間の問題であったかも知れない。それと前後して、私たち国民学校生（小学生のこと）は強制的に疎開させられることになり、集団疎開のめじめさを聞いてきた父は、急きょ郷里の親戚を頼って離れを一軒借り受け、母と私たち子供を疎開させたのである。

翌年、三月九日夜半の空襲で、生家は焼かれたが、父と、学徒動員で軍需工場に働いていた兄たちが命がけで持ち出した一台のミシンが、戦後の疎開先での、私たちの暮らしを支えることになった。

戦後、農地は開放され、都会から訪れる買い出し客で、農家はかなり景気がよくなっていた。農家の人達も次々

に背広を注文するようになり、父の下にも弟子入りを希望する人も出て来て、農家の離れでは手狭となって、宇都宮市のはずれに土地を求めて店を新築し、移り住んだのが私の中学入学の春であった。

父の交通事故は、その翌年の、秋の初めてのことであった。客筋は、徐々に市内にも得られるようになっていたけれど、これ迄の農村地帯も、店にとっては大切な得意先である。注文がある人と伝てに聞けば、父は何処へでも自転車で出掛けて行く。

事故は、そうした一軒からの帰途のことであった。追突した大型トラックの運転手の責任は勿論のことだが、父の側にも、自転車で往復した疲れもあったのかも知れない。

父、五十一歳の時のことである。だが、この事故で、父と運転手とが最初にとった処置が、今の私達からみ

ると考えられない行動であったことになる。

父の左足は、完全にトラックの下敷きになったというのに、父の意識はつきりしていて、家に連れていってくれといったという事で、運転手たちは病院に父を連れて行かず、自宅に連れて来たのだった。

尤も事故は農村部の街道で起きたことだ、電話を持っている家などめったになかったし、考えてみれば救急車のサイレンさえ、当時私は耳にした記憶がない。

いいかえれば、当時者の双方が事故に慣れていなかったから、とっさに取った判断は自宅に連れて行くということとだったのだろうし、また市内の総合病院を探して走るより、自宅の方が遥かに近いと踏んだのもあろう。

こうして、父はとにかく近くのかかりつけであった医者に往診してもらったのだったが、診断の結果は、脛骨

に異常はなく、細い方の腓骨にヒビが入っている程度で、膝下全体の内出血さえ引けば大丈夫だというものであった。

けれども、何せ父の足の上に乗った大型トラックは、製粉会社の荷を満載していたのだ。この程度の怪我で済んだのは奇蹟に近いと医者にもいわれ、父は神のみこころで救われたと、日頃からの信仰心をますます深めて、私たち家族も素直に父の信仰に従う結果となった。

だがそのことが、逆にいえば医療に對しても不信感を抱かない家族にしてしまったのだと、後々になってやっと気付いた私である。

奇蹟だ、奇蹟だと、後に見舞客の訪れるたびに、父は語り、牧師や、信仰の仲間と共に感謝の祈りを捧げていたが、今にして思えば戦後の交通事情の悪さを、父は自転車ひとつで乗り切ってきたのである。

商売のためとあれば、遠く隣県までも自転車で往復したこともある。勿論、都会の舗装された道とはまるで違ふ、石ころだらけの山道を越えたりもする。その困難も、職人さんも含めた十人の家族への責任感が乗り越えさせたのだろうけれど、結果的に足の筋肉を発達させ、それが骨を守ったのではないかと私は思うのである。

一方、骨のことはさておき、内出血の状態はひどいものであった。

三、四日続いた高熱のあと、痛みのいくぶん柔らいだ頃から、父の病床に異様な匂いが漂うようになった。

匂いは日を増して濃くなる。父は容態からして勿論のこと、健康な私たちまで、その異臭にはすっかり食欲をなくして、もう一日だって我慢がならない気持になっていた。

たまりかねて、母が思いついたのは、折りから咲き始めた、きんもくせい



花の香りである。近くの家の広い庭に、大きなきんもくせいの木があった。

母はそこを訪れて、胸にあふれるほどのきんもくせいの枝を分けてもらい、家中の花びんや空びんをかき集めて、父の病床を花で埋めた。このオレンジ色の小さな花たちがふりまく、強い芳香は、あの当時の私たちの心をどれほど救ったか知れないが、私たちはその香りでごまかしてはならなかったのだ。「オカミさん、こんなことっては何ですが、旦那さんの匂いは、これは死体と同じ匂いのような気がするんですが……」

軍隊経験のある職人さんが、遠慮がちに母にいった。医者とは毎日往診してくれているのだ。玄関を入っただけでも、ムッと鼻をつくの、老いていたとはいえ軍医上りだというその医者が、何故その匂いに疑問を持たなかったのかは、どう考えても合点のいかない思っている。仮りに嗅覚がマヒした医者

（そんな医者があつていいのだろうか？）であつたとしても、皮フに現われた内出血の状態が、ただごとでない位は、目で見て判らなかつたのだろうか、と不思議に思う。

この匂いの原因を、はつきり突きとめて治療して欲しいと、母にせまられて、医者は家族の見守る中で、父の赤黒く腫れ上つた皮フにメスを入れた。

当然、血が出ると思つたそこから、こぼれ落ちたのは、赤い血ではなく、白い飯粒なのであつた。いや、飯粒と見えたその白いものは、下に敷いた油紙の上でモゾモゾとうごめいているのだ。それが一匹や二匹ではない、バラバラとこぼれ落ちるようにして出て来たのだった。

今の衛生状態からでは到底、考えられないこの不思議を、大学病院の医師は、考えられることとして二つの場合を説明してくれたという。一つには当時の日本人にはまだ寄生虫がいたこと、

そして皮フの中に寄生する小さな虫もいたこと、それが患者の体力の衰えによつて、逆に虫を成長させたかも知れないこと、そして今一つ考えられることは、当時の土地柄、季節柄から蠅が多かつたであろうこと、蠅は、わずかな皮フの破れ目から卵を産みつける可能性もあることなどである。

こうして、すっかり皮フを剥がれた父の足は、それは無残なものであつた。肉の腐つた所は切除したから、凸凹の松の丸太のようで、消毒ガーゼを毎日交換に來ても、一向に新しい皮フが張つて來ないのに、じれつたくなつたのだらう、医者は膝から切断しようといひ出したのだった。

「野戦病院だったら、もうこんな足、とつくに切つてるよ。そうすりゃ、半月もしたら治つて、松葉杖で歩けるよ」それが一番、手取り早い方法だといふのである。

この時になつて、父はやつと医者への不信感を抱いたのである。

「ここは戦場じゃありませんよ。平和の戻つた日本なんです。せっかく骨が無事だつたのに、むざむざ切られちゃたまりません」

父は、平和な時代だから、それを拒むことが出来たけれど、戦場ではまだ使える手や足を、どんなに多くの人々が失つて來たことかと、いや、手や足だけではない、命そのものが、どんなに軽く扱われて來たかが、この医者の実にこともなげに吐いた言葉によつて、実感されたのだった。

この医者とは、これで縁を切つたが、さりとて、近くに他の医者は見当らなかつた。

市内の総合病院まで、片道四十分程の道のりを、兄と職人さん達が交代で毎日リヤカーに乗せて通ふことになつた。

今ならさしずめ、即入院をいい渡さ

れたと思うのに、こちらも又、毎日通いなさいといわれたのだから、ひどい時代である。

が、この病院で父は初めて、最初に受けた治療が誤りであったと聞かされたようである。

こんなにひどい内出血を、そのまま放置したのがいけなかったといわれたそうだが、あの老医者は、内出血は自然に体に吸収されていくからと、ひたすら局部を冷やすばかりであったのだ。そしてもう今となっては周りの肉が自然に盛り上ってくるのを待つより他はないこと、これからの治療は、それを手助けする程度だということであった。

あの怪我の時から、父は丁度十七年生きたことになる。死因は脳血栓であったが、傷口は結局、死ぬまで完全にはふさがらなかった。

火山脈を抱えているように、絶えず

何処かしらが破れて膿のようなものが出ていた。

怪我をしてから、三、四年経ってからだだったろうか、病院で一度植皮という方法があるが、とすすめられて来た。しかし、膝から下の全部に必要とする皮フの量を考えると、父は、『今さら』と思ったのだろうか、植皮の手術も受けなかった。

膝も完全には曲らなくなっていたが、あの時、もし医者のすすめるままに切断していたら、その後の私たちの暮らしは、もっと大きく変っていたに違いない。

父が何としても切断を拒んだのも、一つにはミシンが踏めなくなったら、どうして家族を養おうという思いが働いたからであろうし、いま一つには、体を人工的に傷つけるという行為は、信仰的に許されないことと信じていたからでもある。

尤も、本音のところに、切ることへ

の恐怖心も勿論あったには違いない。しかし、足を切らなかつたという事が、その後の父をどれ程支えたことだろう。

交通事情の発達していない地方都市では、自転車に乗れなければ動きが取れない。何としてでも東京に戻ろうと、どん底に落ちた暮しの中からはい上らせ、スクーターが売り出された時、いち早くそれを持ちこなそうとしたのも、たとえ完全ではないにせよ、自分の足があったからだと思うのである。

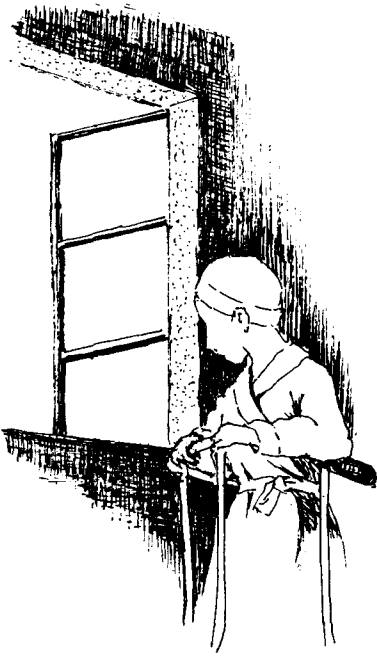


病気がくれた

「弱者」の眼

野村 純子

神奈川県川崎市



足がおかしいと初めて気付いたのは、長男が幼稚園に通いだした年の梅雨時でした。帰宅時間近くになって降りだした雨に、下の子をお昼寝させて、あわてて園へ傘を持って行くところでした。もう園の方からピチピチチャブチャブランランと親子連れが帰ってきます。私は急いで走ろうとして、みごとにズデーンとひっくり返ってしまいました。ころぶなんて思いもしないので子供の頃以来の大すり傷をまともに膝に作ってしまいました。それ以来、私は走れません。

近くの内科医は血圧を測り血液検査をして運動不足と笑いました。ラジオ体操となわとびを一夏しました。一向に良くならないのでおそろおそろ整形外科へ。外科と聞くとすぐ手術やメスを連想して気が重いです。整形外科ではレントゲンをとって腓骨神経マヒと診断、毎日背骨をけん引し、足に電気をかけて腰を暖め、ビタミン剤を服

用しました。

初冬、寒さが身にしむ頃、手に力が入らなくなりました。洗たくバサミが開きません。トンカツの肉はハシから油へすべり落ちます。魚屋の店先ではサイフのパチンが開きません。

整形の先生はここではじめて大学病院に紹介状を書いてくれました。それでもまだそれは筋肉検査依頼という形です。足 手を別々に考えておられ、
「もし同一原因なら大変だ」だって。その大変が大当りだったのに。

病院の整形外科では問診・診察をしながらも依頼にこたえて筋肉検査を優先、あちこち検査で回った後、やっと教授が私の歩き方を見て「小脳（運動を司どる脳）がおかしんじゃないかな」と今度は直ちに脳神経外科の教授に紹介されました。

脳外科の教授はさすが専門です。やはり歩き方を見ただけで脊髄に腫瘍か血管障害があると診断されました。そ

れが原因で腓骨神経がマヒしているのです。秋のはじめに町の整形外科医が原因究明をしてくれていれば……。対症療法で解決する病気ではなかったのです。

即検査のための入院が決まりました。教授の決定は有力です。ベッドがなんとか融通されました。その意味では紹介状を持って病院に行ったのは賢明でしたが、一方病状がそれ程さしせまっていたのかもしれない。

私は足が不自由なものの他に異常がなく元気で、自分が病気という自覚がなくあれよあれよという間に脳外科というおそろしげな科に入院と決まってキョトンとしてしまいました。しかし落ち着いてみると、私は足が悪いのではなく足を動かす中枢の脳、人間の一番大事な脳が悪いのです。

私はもうヨロヨロと物につかまらなければ歩けない、形の上での真正正銘の弱者でした。しかしそれよりなによ

り私の命のロウソクはもう残り少ない。私ははじめて事の重大さに気付いたのです。

検査のための入院といっても、のん気に人間ドックに入っているのとは違い、家から解放されると、みるみる体が弱って病状が進行していくのが素人にもはつきりわかりました。

透明で常に流れているべき髄液が、細胞くずで黄色く濁り淀み、主治医はその状態をおとうふ屋さんに例えて、私の脳がどんな所に浮んでいるか話しました。いつ腐ってもおかしくない、よくそれで先生のお話が理解できているものだと思ふ感心をしたものです。

その頃には普通にハシで食事もあるはず「スプーンで食べるわ」とあくまで楽天家の私も、ペンを持って字を書く事すら無理なまで手の力が抜けてしまつてはボウ然となりました。

後でできるところによると、同じ検査で死んだ人もあるというかなり危険な

検査もあつたようです。入院する前あんなにいやだった手術も、様々の検査後やっと病巣がわかり手術日が決まった時は、再び命の希望が出てむしろ喜んで事を思い出します。

病気が珍しいので手術もほとんど前例のない難しいものでした。しかし私は狙のこいです。何もしないで眠るだけです。むしろ手術をひかえてドキドキ緊張するのは執刀される先生の方でしょう。

当時麻酔の事故などあって、私は手術中に麻酔がきれないか等麻酔に関して最後まで心配でした。脳外科の困難な手術それ自体の不成功で死ぬならまだあきらめがつくけれど、麻酔がきれ「痛い」と動いたために先生の手元がくるったなんて死にきれない……と私の血管は細く検査中もよく注射が抜けはズれる事を知っていたからよいいです。

手術日前に麻酔科を受診し父によく

似た教授から「大変な病気になったねエ」と優しく言われた時は、ジーンと心があつくまりました。手術日の朝早く執刀の主治医が自ら麻酔の点滴の静脈注射をしっかりとしに来られました。先生に私の心の不安が通じたのでしょか。この時私は本当にこの先生に、「命あずけます」と思ったのです。

手術室に入って、もうろうとなりかけた意識の中で、麻酔科の女医さんが「あら、もうちゃんと点滴用の針が入っている」とおっしゃる声を聞きながら満足して、キビキビ立ち働く同性の看護婦さんを美しいなアと思いながら深い眠りに落ちました。今思うと麻酔薬の中にいい気分させる薬も入っていたのかもしれない。ともかく私は大満足で、手術の成功・不成功つまり私の生き死にを、この時思いきりよく主治医の手にゆだねたのです。

手術は成功しましたが、手術で邪魔物をとりのぞけば、また元どおりにな



るとは素人のあさはかき、損傷を受けた神経細胞はもとらず、なえ衰えた筋肉はリハビリを必要としていました。

私は足の力だけで椅子から立ち上る事さえできなく、歩行器につかまって歩く、はっきり弱者の側にいました。

時は師走、朝食がすんで回診までの間、私は自主トレで病棟内を歩行します。脳外科病棟は十階、エレベーター

ホールの窓から最寄の駅が見えます。寒そうにオーバーの背を丸めポケット手に駅へ急ぐ人々、窓のすぐ横で行なわれている病院の増築工事の現場で働く人々も、みんな健康な強者です。

そういうえは病室のそうじに来るおばさんといえ、家で私の帰りを待つ家族さえも、私とは違う側・強者の側の人なのです。私は激しい憤りと孤独を感じました。しかし私は毎朝この窓辺へ来て駅を見ます。どちらかというと苦しい労働者の群れです。私は彼らの健康体をうらやみながら、しかしもう一

方で彼らの労働に深く深く感謝の気持ちで一杯になるのです。それは彼らの日々の労働が社会保障という形で、まわりまわって私の命を助けてくれたからです。

医者は強者の側にいても直接患者に接して手をさしのべてくれる人です。

看護婦・看護人・リハビリ関係者も、患者を助ける意識しているでしょう。しかし弱い患者以外の全ての健康人も、

気付かないかもしれないけれどみんな強者の側にいて、現代の医療を支えているのです。私は社会のみなさんみんなから再び生きる命をもらった。退院する日まで毎朝、私は十階の窓から、やっかみ半分感謝半分で外を駅をみつめていたのです。

病院からシャバに出て五年、私はやっぱり走れません。子供にとっては強くてこわいお母さんですが、強者の強権がまかり通るシャバは時にはこわくて、そんな社会へ子供を飛び立たせる

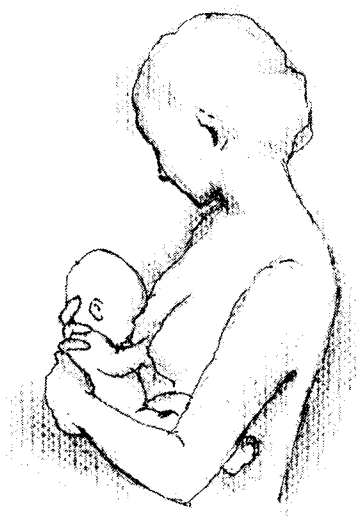
のかと思うと、子供の成長をおそれています。今の教育はみんなに「強者になれ。強者にならんと損するぞ」と教えこんでいる所に問題の根があるように思えます。案外そうじゃなくて弱者の方が助けてもらって得かもしれないし、第一私のように思いがけず一転強者から弱者になる事もあるのだから、いろんな価値観を子供に教えるべきです。

なにはともあれ戦乱の地では弱者は即・死という苛酷な状態です。少くとも世の中が平和で、人々の日々の労働の営みが弱い立場の人を助けるという仕組みが続きますようにと願っています。

私の初産体験

村木 京子

広島県広島市



私が初めてのお産をしたのは、二十三歳の時。早いもので、あれから五年たち、今では二児の母となりました。家から近いこともあって、ある国立大学附属病院での出産でした。一晚陣痛に耐え、翌日の夕方やっと女児が産まれました。分娩室に入ってから、一時間半両足を高く上げて、支柱に固定された姿勢でいたので、足がしびれ、お腹にも力が入りきらず、二人がかりで、お腹を圧迫してもらい、又、微弱陣痛で点滴を受けて、ようやく出産にこぎつけた感じでした。

そして、お定まりの会陰切開の後の縫合です。インターンらしき人と出産担当医と二人で、「こういうやり方もある」と、話しながらの縫合でしたが、私は、まさに、実験用の動物にほかなりません。恥ずかしいどころか、長時間の疲れで、もう、どうにでもして下さいという、ひらき直りの気分で、医師達の会話を、きいていました。

今思い出しても嫌なのは、私が分娩室で、苦しんでいる時、なかなか産まれないので、医師や関係者が、雑談していたことです。正常分娩など、日常茶飯事で、慣れっこの人々にとって、妊婦の苦しみなど、当り前すぎて、今さら思いやることもなくなっているのでしょう。それにしても、大きな病院というのは、とにかく妊婦中心ではないのです。

私の出産当日は、他にも次々と七人くらい赤ちゃんが生まれたそうで、若い助産婦さんはてんてこまいのようでした。他の妊婦さんが陣痛室で、苦しみのあまり、ベルを押そうものなら、だいぶたつてから、やってくるなり「しっかりしなさい。赤ちゃんも苦しいのよ、お母さんが頑張らないで、どうするんですか」と、逆に叱られる有様です。

うす暗い窓のない部屋で四人の女性達が、そばにいて腰などさすって、励

ましてくれる人もなく、「助けてー殺される」と叫ぶ人もあったりして、とにかく、いちばん後から入った私はすぐくショックを受けました。

いくら泣いても、誰もきてはくれないんだとあきらめ、ひたすら痛みに耐えました。

今想っても、母になった感動など一片もない、ただひたすら、『おしん』よろしく、耐えぬいた出産体験でした。女に生まれて損したと心底思ったものです。

大学病院は、出産の曜日により、担当医が変わるため、それまで検診を受けてきた先生に、子供をとり上げてもらえろとは限らず、又、産後の入院中も、教授回診といって、今まで、診てもらったこともない、エライ先生が、産婦の回復状態を診てまわるというところで家来という感じで、神妙な顔付きで、ついてまわるのです。大学病院は、

やはり難病の人々の行く場所であり、たかが出産くらいで、いく所では、なさそうです。何時間も待った毎月の検診、それに比べて、妊婦への思いやりの不足、産ませて頂く、という感のぬぐえない出産法など、私にとっては、予想もしてなかったことばかりでした。

よく、お腹を痛めて産んだからこそ、我が子が、かわいいのだということばを聞きますが、逆に、出産の苦痛が大きすぎても、子供を受け入れにくくなり、二度と、子供を産みたくないということになりかねないのでは、ないでしょうか。

私は、これにこりて、二人めは、こぢんまりとした総合病院で、お産をしました。これが、とても良かったなと、ほのぼのとした気持ちで、今思い起こしています。まず、先生が、女医さんだったので、一瞬、大丈夫かしらと迷いましたが、

「いや、出産は、病気ではないのだから

ら」

という気持で、おまかせしました。

夜間は、ベテランの助産婦さんと、看護婦さんだけと聞いて、昼に、生まれてくれると良いがと思っていましたら、夜の八時頃に、陣痛が起こり、タクシーで、さっそく入院しましたら、病室は、私一人しかいませんでした。痛みで、眠れないだろうと思っていたのに、知らぬまに、眠っているらしく、痛みで目がさめ、痛みが和らぐと、また、ウツラウツラ眠っていたようです。助産婦さんが、腰をさすって下さると、痛みが和らぎ、初産でないこともあってか、実に楽なお産でした。そして、翌朝五時すぎ、三七〇〇グラムもある男児を、無事出産させていただいたのです。

その際、会陰切開をすることなくとり上げて下さったので、出産後がとても楽でした。それに、両足を、支柱に縛ることもなく、楽な体位でした。

産婦が少ない事も、たしかにあったでしょうけれど、体の清拭の回数も、大学病院の時より多かったし、退院時に、洗髪までして下さいました。さらに、余談になりますが、とり上げて下さった助産婦さんに、お礼をしようと思ったのですが、

「仕事ですから」

と言って、どうしても受け取って下さいませんでした。ちなみに、初産をした大学病院では、同室の三人の方と話しあい、お礼をしたのですが、すぐ、受け取られたそうです。一応、公務員の身分のはずですが……。

二度の出産体験を通して、私は、妊娠の経過が順調ならば、むしろ、こぢんまりとした病院をお勧めしたいと思っています。

私の場合、大学附属病院という特殊性が、あった為かもしれませんが、内診の際も、明るい窓に向かって、カーテンも何もない診察台に上がり、前の

二人が終わるまで、スースーする下半身をさらして、待ってはいなくてはいけませんでしたので、もう少し妊婦の身になって下さってもいいのと思ったものです。

病院の内情は、外観からは、うかがい知ることは、できません。ただ、病室がきれいだとか、病院が大きくて立派だというだけで、決めるのは、バカげた事だと思いました。

最近では、会陰切開が、一般的に行なわれているようですが、昔、母の頃は、そうではなかったらしいです。今でも、経験豊かな助産婦さんならば、切開せずに、とり上げて下さると思います。

話が前後しますが、大学病院では、四時間ごとに起こされて、少し離れた授乳室まで行き、消毒液で、手洗いの後、授乳して、あと体重を測り、表にプラスマイナスのグラム数を書くということが日課としてあり、最後まで、母子同室は、ありませんでした。

下の子がお世話になった病院は、三日めから、母子同室で、赤ちゃんの体重を測ることは、助産婦さんが、やって下さいました。どちらが楽かといえば、やはり後者です。ここでも又、大病院と、小病院との差を感じました。病院でも、大規模になればなるほど、管理が強くなるのは、やむをえないことなのでしょう。

女性も、結婚してからも、つつましさや、恥じらいなどを期待されますが、妊娠したとたん、それらの一切を捨てざるを得なくなります。このギャップは、かなりのものがあると思います。母は強しと言われるのも、この出産という一大事をやりとげ、女のもつ、繊細さ、もろさを、脱ぎすてて、「さあ、この世に、恥ずかしい事など何もないわよ」と、ひらきなおれるせいかもしれません。

最近、子供が、かわいくないという

意識で、逆に、悪い母親ののだと、自責の念にかられるという女性に会いました。

私も、上の子の時、まさに、そのとおりだったので、

「若くて、今まで、仕事をがんばっていたのだから、急に、家にいて、ろくにしゃべれない赤ちゃんを相手にしていて、おもしろくないのは、あたり前よ。あなただけじゃないから、あまり自分を責めないでね」と話し合ったことがあります。

今は、結婚前に、たいていの女性が、家の外で、仕事に就いた経験を持つているので、逆に、外の世界の厳しさのみならず、楽しさをも、知っているはずで。

そんな女性が、急に、家の中にこもり、手のかかる赤ん坊の世話と、あまり充実感のない、家事のみをやる生活に、嫌気がさすのもっともだと言えるでしょう。

しかし、そういった状態で、女性が生活するのなら、本人だけでなく、赤ちゃんや、夫など、周囲の人々も、迷惑をこうむることになります。やはり、女性たちが、手をつないで共同保育をするとか、何らかの形で、気分のリフレッシュをはかる以外に、ないと思います。それに、女性は、大多数が、母になるという現実にも、かわらず、私のように、赤ん坊の扱い方を知らないまま、結婚して、母となる女性も、多いのではないかと思います。そこで、学生時代に、何か、ボランティアのような形で、実際の育児に関係した実習の時間を持てたら、よかったです。

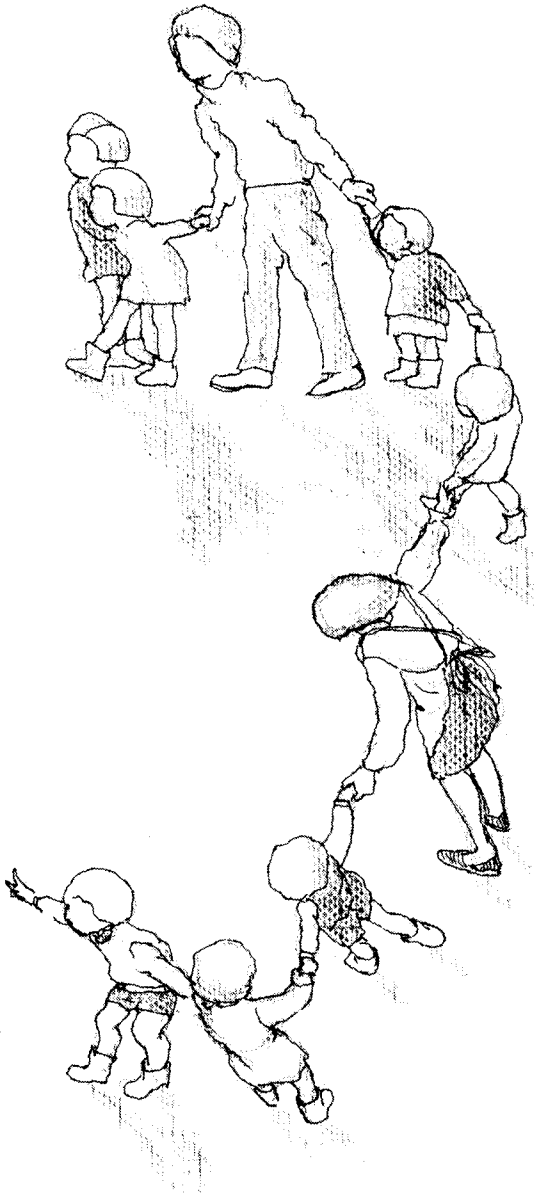
今までに受けてきた教育が、実に知育偏重のものであった事を、結婚七年前にして、身をもって知らされた思いです。

そして、そのような片寄った教育は、知らず知らずのうちに、私自身の母性

の芽を、つま取ってしまい、妊娠イコール不幸。育児イコール欲求不満の私。という悲しい事実をうみ出してしまいました。女性が、もっと自然に妊娠、出産を受け入れられるような教育が

(いいかえれば、母性をめざめさせ育んでいくような、心の豊かさを培うような教育だと思うのですが) なされる必要があると思うのです。今、二児の母となり、やっとこの精神面での壁をこ

えられたように思います。約六年かかって、母であることを、うけ入れられるようになったのかと思うと、喜びが、心の底から、湧いてくるようです。



M 医師とのめぐりあい

中山真紀子

神奈川県川崎市



娘は、人工栄養で育ったせいか、小さい頃から、わりと弱かった。さらに、一人っ子で過保護、おまけに外遊びをあまりさせなかったという悪条件が重なって、幼稚園に入園してからは、それまで以上に、よく風邪をひいては幼稚園を休んだ。

入園するまでは、私のかかりつけの医師に診てもらっていたが、薬が合わなかったのか、ある時、全身に発疹が出た。どうしてでてきたのかといった説明もなく、それを直すために又、薬を買わされるといった事態になって、その医師に診てもらうのは止めた。その病院は、外科や皮膚科の患者を多数かかえていたから、とても、きめこまかな診察など、ではしなないと思った。それ以後、小児科専門の医師を、人づてにきいたりして捜していたが、ある休日診療所に行ったとき、適切な処置をしてくれたS先生が信頼できる先生に思われ、娘のかかりつけの先生に

決めた。

S先生の病室はこじんまりとしていたが、子供の喜びそうなオモチャや、本がたくさん置かれていた。金もうけが嫌いというだけあって、薬代は、今までの病院の半分以下。その上、夜間でも電話をかければ嫌な声もせず応対してくれ、処置の仕方など、アドバイスをしてくれる。ある夜、娘が薬を飲んだ直後ひきつけたことがあったが、タイミングが悪かったと電話で教えてもらい、ホッとしたものである。日曜日の朝、一時間は診療時間にあててくれているのも、子供を持つ親にとって、とてもありがたかった。

S先生は、「薬は毒だから、なるべく飲まない方がいい」と公然と言う先生でもあった。子供はなるべく薄着をさせ、放っておいた方が丈夫になると、それとなく過保護を指摘されもした。私自身、娘をそう育てられたらと思っていたが、娘はそころ、ずっと、せき

の発作に苦しんでいたのである。

「ただの風邪です。心配いりません」とS先生は言われた。風邪薬とせき止めをもらって帰る。夜間になると、温度の変化する時間にせきの発作が始まる。せき止めを飲ませると、おさまるが、薬がきれると、又、せきが續くといった毎日であった。二カ月以上も、薬がなくなるともらいにいくといったことをくり返しても、一向に良くならない。

親子ともども、せきの発作で、睡眠不足の毎日に疲れ果てていた。大学病院で、詳しく見てもらった方がよいと思ったのが、年少の夏休みも終わるという頃であった。

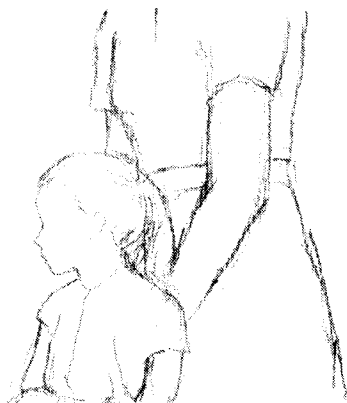
その時、J大で担当になった先生は、H先生であったが、レントゲンと採血の検査の結果、やはり「ただの風邪ではないか」といった診断であった。せき止めの入った風邪ぐすりをもらって帰ったが、私は何となく、納得でき

ない思いがした。ただの風邪なら、もう直ってもいいと思った。

一カ月近く、さほど変化がない状態であった。用事ができて、H先生の担当の日にこれず、初めてお会いしたのがM先生だ。即座に「きわめて微妙な数字なので、見おとしますが、僕は百日ぜきだと思えます」とハッキリと言われた。三カ月近く続いているせき、コンコンというせき、どれを見ても、疑いがないと。そして、百日ぜきの薬をもらって飲ませたら、ウソのように、せきは、おさまったのである。

それ以後、体が衰弱して、風邪を引きおこすことが多いから、気をつけるようにと言われたとおり、娘は、今度は気管支炎に悩まされることになった。しかし、M先生の手にかかると、気管支炎も、三日から四日で直ってしまふのである。

ただJ大が自宅から遠いということに、M先生が同情してくださったのか、



ある時、私の家の近くの先生を紹介してくださった。

その病院は、最近できた病院で、私のまわりでも評判が良かった。M先生の先輩であるR先生は、女医さんで、スラリとした、気性のさっぱりとしたステキな先生であった。

明るい病室、たくさんスタッフ、それに設備はととのっているし、信頼の出来そうな病院のような気がした。

しかし、M先生の病院では、三日から四日で直った気管支炎が、ここでは、一週間以上もかかった。ある月など、十回以上も、この病院を訪れている。そのたびに、レントゲンと採血が待っているのである。

J大のM先生を訪ればよかったのであるが、せっかく紹介して下さったのにと遠慮したことが、後になって、大きな後悔をうむことになるうとは、この時は、まだ思いもよらなかった。

大抵の子供は、R先生のところへ行

けば直ってしまうというのに、ウチの娘だけは、どうして直りが遅いのだろうか。「ウチの子は、よっぽど弱いんだナ」と主人がなげいた。

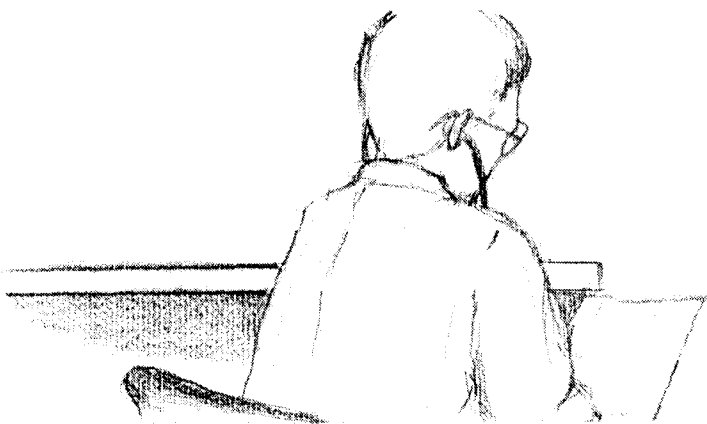
実際、娘の体は、母親の私でなければ、わからないようなところがあった。非常に微妙なのである。人は「神経質すぎるわよ」と批判したりする。でも、それは娘の体を知らないからである。

医師さえ「たいしたことありませんよ」薬も必要ないと暗にはのめかされて、家に帰ったら、夜には、ひどいせき込み、といったことも度々なのである。

R先生が、首をかしげるほど、娘の病状は進んでいってしまうのだった。

そして、とうとう、娘が年長になって、まもない頃、四十度の高熱を出した。せきは、よく出るが、熱はあまり出たことがないので、すぐにR先生のところへとんでいった。

しかし、娘の熱は二日すぎても下がらなかった。四日め（明日は休日とい



う前日であつたが、R先生自身が出した結論は、「入院した方がよいでしょう」ということだつた。熱が下がらないのが気になる。

私達は、再びJ大の門をくぐつた。遠くても、ずっとJ大のM先生をたよつていた方がよかつたのではないかとふと頭をかすめた。

しかし、M先生は外来にいらつしやるので病棟には、これない。それは娘にとっては不運としか言いようがなかつた。むろん、その時は、そんなことは考えも及ばなかつたが。

娘の担当の医師は、Y医師という、まだ学校を出たばかりの経験浅き先生といった感じなのが氣になつた。しかし、一人で診断するわけではなく、何人かの医師と組んでやってくれるだろうから、まあまかせるしかないといった氣持であつた。

検査の結果、娘は、気管支肺炎。それもかなりひどい状態であるときかさ

れた。人みしりで、神経質な娘が、毎日、採血や、痰の検査にベソをかくのを見るのは、何ともやりきれない思いがした。そして熱が下がった三日目をすぎると、完全看護ということで、親の付添いを断わられた。面会は週に三回、それも数時間だけ。そういったことが、病状にプラスに作用するはずもなく、娘の入院は十日位というのが十四日に延ばされた。

そして、何と、このことは声を大にしてい言いたいのであるが、退院してきただその夜に、娘が、又、せきの発作に苦しめられることになるうとは。もう外来のM先生だけをたよるしかないのだとかたく心に決めていた。

どの先生も、こちらが聞きたいことを、明確に説明してくれはしないということは、入院した際、痛いほど、よくわかつた。

外来で、退院したその夜に、ひどいせきが出たことを告げると、M先生の

せいではないのに、大変恐縮して下さった。退院する直前にした検査のデータを見ながら、先生は、「パラインフルエンザのところの数字が高いですね」とおっしゃった。病棟で、うつったのにちがいがなかった。こうしたデータをなぜ、退院の前に察知できなかったのだろうかと思う。M先生は、さかのぼって細かくデータを調べて下さるので、正確な診断が下せるのである。

そして、その後、採血によって、娘の病気に対する抵抗力は、ふつうの子供の四分の一しかないことがわかったのである。

「お母さんが、神経質になられるのも無理ないと思われませんか。他の人には、この方の体はわからないでしょう」と最初から言ってくれたM先生であったが、そうした裏付けはあったのだった。「もう入院はよろしいですね。今、弱いのも一過性のものだと思います。」

必ず、丈夫になられると思いますよ」
医者は、よき心理学者であつてもよいはずだと日頃思っていたが、まさにM先生は、その方も勉強しておられるように思われてくる。そんな励ましが、どんなに救いとなることか。

日頃、どんな食べ物を食べたなら抵抗力がつくかといったこと、そして娘の体質改善のためにと漢方薬を処方して下さった。又、薬の説明も、これがせき止め、これが痰をとる薬と細かく、説明して下さいるのである。

入院という娘にとって辛い経験をへて、七カ月がすぎた。一時は、やせ細った体が、漢方薬のおかげか、何でもよく食べるようになって、随分、大きく、たくましくなった。むろん、精神的にも。

あい変わらず、風邪はひくけれど、すぐにM先生のところへとんでいくから、長引かない。診断して、薬をくださった後でも、必ずその後の経過を電

話できて下さるM先生なのである。

(え・早乙女光子)



情報 コーナー

●「円テーブルの家族」 読んでみませんか

ニコニコ離婚講座の主催者として、すでに三千人もの受講者を受け入れた円（まどか）より子さんが、その経験の中からまとめた最新の本が、「円テーブルの家族」です。子供が求める親の愛とは何なのでしょう。

円さんは、一〇〇組の離婚家庭を取材して、この問題に新しい光を投げかけています。従来の家族の枠をこえた新しい家族のかたち。

円さんがおどろいたのは、子供たちの明るさでした。それほどこらくるのか、この一冊が知らせてくれます。（文化出版局九五〇円）



●「水とりぞうさん」を 三十名にプレゼント!!

家庭用湿気とり、「水とりぞうさん」は押入れ、水まわりの戸棚、下駄箱、洋服ダンスなどの除湿に最適です。

梅雨時期はもちろん、冬の暖房による湿気にも効果があり、従来品に比べ、除湿機能が抜群に優れています。また吸収した湿気は液体に変わるので、除湿状態がひとめでわかります。容器が倒れても、特殊シートの使用によって、中の液体はもれません。（定価八百円）



◆応募の方法

はがきでつぎの点にお答えください。
①湿気でお困りの場所は？
②冬の間、今まで除湿剤を使われたことは？（その銘柄は）
③おところ、電話番号④お名前、年齢

◆申込み先 〒745山口県徳山市御影町一の一 徳山曹達株（水とりぞうさんプレゼントわいふ係宛）

◆応募者多数の場合は抽選になります。

◆締切日 二月末日

情報 コーナー

●記入式

「自分史の本」

頭のなかの記憶は、次第に亡却の彼方に消えていってしまします。

昔の日記帳や手紙類な

どを整理して「自

分史の本」に

移しかえて

おくと、

自分の

人生の

流れがド

ラマティッ

クに浮かびあ

がってきます。自

分が経験したさまざ

まのことを、子供たちに知っても

らいたいのと思いませんか？ この

本は、世代をつなぐ鎖の役割を果

たします。

親しい方へのプレゼントにも最

適です。

◆定価千八百円・全国有名書店で

発売中

◆問い合わせ先 新宿区三栄町一〇

日鉄四谷コーポ フィルムアート

社 Ⅷ〇三—三三七—〇二八三



●成長グループへの

お誘い

なにかしたいのにぐずぐず迷ってしまう、
「母親」とか、「妻」とか
「仕事」に夢中になってしまいうちに
自分がわからなくなってしまいうちに

そんなことよくあることですね。

自分のために時間をつくって仲間

と話し合ってみて、そこからもう

一度自分がスタートできたら、す

てきなことだと思いませんか。

◆期間 四月十六日〜七月九日毎

月曜 午後の部

午前の部 各二時間

◆参加費 全12回一五、〇〇〇円

◆申込み問い合わせは3/16〜4/9の月

水金AM10時30〜PM3時30に

左記事務局へどうぞ

◆朝日カウンセリング研究会事務

局 渋谷区代々木一の五十四の五

の三〇一 Ⅷ〇三—(三七〇)二三

七〇

●ベビシッター(訪問

保育)をしませんか

当所はオープンして九年、五十五年六月にわいふ編集部刊行の手探り「女の自立」中に掲載していた

いただきました。

お互い主婦、母親として共感をわかち合いながらの、さわやかな人間関係のお仕事です。

・子供が好きで健康な方

・お子様の手の離れた方

(小三年以上)

・ご自分のスケジュールを大切にしたい方

千葉・船橋・柏方面の方を求めています。

お問い合わせをお待ちしております。

◆問い合わせ先 (有)ベビシッター

サービス 伊藤巳代

Ⅷ〇四七一—六七—七八五三



(え・松本をきえ)

投稿ホットライン——精神一到何事か成る？

ナウい熟年

孫の自立

東京都三鷹市 阿部 小枝

それは、彼が休暇を終えて赴任先の中米に帰る日のことである。

訳あって、幼児期から手塩にかけて祖父母に育てられた彼は、「空港まで送らせておくれよ」と懇願する祖母に、何と言って断わろうかと思案していた。

「○村○郎万歳!!」と彼が中米に赴任する日、空港のロビーで祖父母から叫ばれた時の恥ずかしさは、未だ記憶に新しい。

「僕はね、家を一步出たら仕事のことだけ考えたいのです。荷物が重たかろうと僕一人で

運ぶのは当り前です。もう僕は二十五になりましたから」

素直に育ってきたと思われる孫から、思いもよらない言葉が飛び出し、何やら立派なことを言われて見ると、おばあさんにはごもつともと思えて、「では充分に気をつけてね」と玄関先で見送った。

やがて、おばあさんは、気を取り直して、孫の部屋を片づけだし、おや?と思った。脱ぎ捨てられた紺のスーツの、上着とズボンが別物なのである。二着あった紺のスーツの一

着は、今しがた孫が着用して家を出たばかりだ。

おばあさんは、早速、空港へ向かったのはいうまでもありません。(え・松本圭以子)



投稿ホットライン——ずっとこけた・ぶつたまげた・頭にきた・ジーンときた

エッセイスト・クラブ

あの日のこと、この日のこと、つれづれなるままに……書いてみよう。
読んで面白い、読ませて喜ばれる、大傑作集

小さな駅のいくつかを過ぎて

徳島県徳島市

泉 響子

もうどれだけの時間を、あたしはこ
うして列車の揺れに任せていること
でしょう。

あんなに明るかった窓の外の風景が、
ほんの少しずつ少しずつ暮れていって、

いつの間にか西空がほんのりと夕焼け
ています。

その夕焼け雲が、一瞬赤くやけただ
れ、山の頂に淡いひかりを残すまでの
しばらくを、あたしはじっと眺めてお

りました。

窓はしまっていたのですが、ほんの
わずかの隙間から、冷たい風が流れ込
んできます。座席にふかぶかと腰をお
ろしました。ころよい疲れです。少

しねむくなりました。しばらくをゆったりとねむりましょう。

突然がたんと横ゆれし、列車はトンネルにはいつてゆきました。ゴォー、ゴォー、それは慟哭に似ています。生きものの悲鳴に似ています。列車は速度を増し、あたしは束の間を、深いねむりに入ってゆきました。

あたしは、いつの間にかジェットコースターに乗っているのです。ふり落とされまいと、必死に座席ベルトにしがみついていた。音よりも速く、雲よりも高く高く、ジェットコースターは夕焼空に向かいます。

もし、どうかありませんでしたか。気がつくと、隣席の女の人が、いぶかしそうにあたしを覗き込んでおりました。あたしはぐったりとして声も出ず、膝の上のナップサックを握りしめておりました。

列車は、トンネルの外に出ていました。おだやかに夜が訪れておりました。



この沿線のどこにおりたち、冷えたからだをやすめよう。小さな駅をいくつか過ぎてゆきました。またひとつトンネルを越えました。

どこへゆくという、確かなあてのある旅ではない。ナップサックの中にい

くばくのお金のあることが、この不たしかさの中の安堵です。

灯のともった列車の中に、さっきから、そんなあたしをじっとみつめてい

る人がいます。とても疲れた風な女の人でした。手を差しのべたくなる親しさです。声をかけようとためらい、よく見ると、それは窓に映し出されたあたしだったのです。

窓にいろんな人達が映し出されています。大きなリュックを枕にしてねむっている人。肩をよせ合ってねむっている若いカップル。窓によりかかっていなりずしを食べている女の人。

頬杖突いて窓の風景を見えています。

目をこらしたあたりに、どっしりと巨大な山々。重なり合った家々の軒、遠のいてゆく電柱が、影絵となって見えるだけでした。

窓に額をくっつけて、そう、ひとつ、ふたつ、みつつ目の駅で、あたしはお

りることにいたします。

へびよ

大阪府豊中市

高宮 みか

家の近くに、坂をのぼりつめたところがカーブになり、曲りながら下りはじめ、というところがある。

道幅は広くないし、見通しが悪いうえに、ちょうどそこは高等学校の正門にわたる横断歩道の白いシマ模様があるので、車を走らせるときは、いつもスピードをおとして通る。

その時は、高等学校は授業中だったし、向い側は広い分譲地で、まだ雑草のしげった空地になっていたので、人気もなく、前後に車の姿もみえなかった。

いつものように私は車を運転し、坂をのぼりつめ、さて下りはじめようとしたとき、突然、眼の前の路上をうね

うねとすべるようにわたるへびを発見した。

上手くタイヤの間をすりぬけて通ってくれ、と願う気持があった。

ブレーキを踏んで、かえって轢きつぶしてしまうのは可哀想、と思う気持もあった。

そのへびが車の下にみえなくなってしまうとき、私の上半身にカッと血がのぼった。そしてそれは下半身の力、ブレーキを踏み込むはずの力がいかに弱かったことと対比されて、否も応もなく、自分がブレーキを踏もうと努力するどころか、心もち足をもちあげたのだと気づいたのである。

その途端、幼い頃、自転車車輪で

へびを轢いたときのことがよみがえった。

まだ大人の自転車には足が届かなかった頃のことである。お百姓の引くりヤカーや、当時は牛にひかせている方が多かった馬力車^{ばりき}などが、やっとすれ違えるほどしかない農道を、坂の上から勢いよく走りおりてきた私は、まさに、道幅いっぱい、大きな青大将がゆうゆうと道を横切っているところに出くわした。

へびをさけようもなく、私は何か叫んで両足を開いたまま高く上へあげた。腹部のちょうど真ん中を踏まれたへびが、驚いて頭と尾を同時にもちあげる

だろうと想像したのである。

子供のころは、どこそこの家ということもなく、農家の庭先から庭先をかけずりまわって遊んだ。大人たちも農作業の一段落したあとには、井戸につるして冷したスイカを割って、子供た



ちにふるまってくれる。家の子も隣りの子もないのである。腰を縁先にあずけた大人たちに並んで、縁側から両足をぶらぶらさせ、寄ってくるニワトリに向けて、ひらいた膝頭のあいだへスイカの種をプツと勢いよく吹きだしながら、ちようちん袖のブラウスの肩の

ところで口のまわりをふいていたりしていると、仏壇のある奥座敷で、ドタリともの落ちる音がする。

すると大人たちは、奥をうかがうように首だけふりむけて、

「家の主だんべよう」

などといったきり、誰もそれ以上詮索しない。大方、天井のはりをわたっていた青大將が、わたりそこねて落ちたのだろう。よくあることなのである。そういえば、屋根裏がまるみえの土間のはりを、二メートルもありそうな青大將がわたるのもみたことがある。

私の自転車は、前輪と後輪がコトン・コトン、と固くはずみ、青大將は驚き騒ぐこともなく、するすると道を半分空け、そして消えていった。

その後の何年か、子供時代の私はへビは冷静、沈着なもの、あわてず騒がずゆうゆうとしたもの、と信じていたので、よくへビをつかまえて遊んだ。

へびを眠らせるのである。

へびは、のどのところから下あごあたりを左手で軽くにぎって持つ。にぎったまま手首をかえして、顔を下に、下あごが上になるように、腹を上に向けて、平らなものの上に延ばす。最も都合の良いのは土間の敷居の上である。延ばす、というのは軽くしごく、という意味で、首から尾にむけて、右手の親指と人差し指の間に軽く押えこんだへびを、身体にそってしごくようにするのである。

その時は必ず、へびさん、へびさん、ね・む・れ、とふしをつけていうことになっている。そして静かに静かに左手をはなす。するとへびはピクリとも動かず、そのままじっと目を閉じている。二、三十秒するとまぶたを開ける。くるんとした可愛い目を開ける。この時、もう一度同じように、そっと頭部を押え、尾の先まで身体をしごくよ

うにすれば、何度でも眠ったふりをしてくれた。

これはとかげもかえるも同じである。かえるの場合は、両の手のひらの間に軽くはさみこみ、やはり、かえるさん、かえるさん、ね・む・れ、とふしをつけて言い、かえるの腹が上になるように手をかえし、そっと上の手を離せばよい。

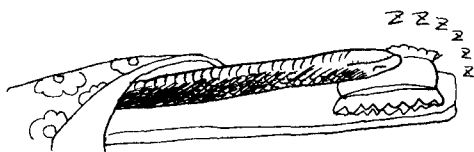
百パーセント成功である。

私が車で轢いたへびは、身を縮めていてくれば、タイヤとタイヤの間で無事だったかもしれない。都会に生れ育っていたから、少しせかせか急ぎすぎていたようでもある。

片方のタイヤの下で、固くコトン、とした手ごたえとは違うなにかがあって、おそろおそろのぞいたバックミラーの中に、方向を失って、二重三重の輪になった黒いものが、七転八倒している様が見えた。

へびよ、私を恨まないで。あれは不運な交通事故だった、といわせて欲しい。

今は、私もへびが怖い。
幼いころのように、へびを眠らせる
勇氣は、もう、私にはない。



晩秋

東京都町田市

宮前和

バスの発車を待つあいだ、昨夜みた「青森県のせむし男」のパンフレットをひらいた。拾い読みしながらめくると、せむし男の台詞がみつかった。

たとえばおれは鬼ごっここの鬼だ
おれが追いかけると 笑いながら皆
は逃げてゆく 子供の頃 あかい
夕焼けの路地を追いかけてこしてい

てそのまま一生追いかけてこの鬼で
通した男 それがおれですよ

まだ九月だというのに外は冷たい雨
が降りそぼって、ガラス窓を濡らして
いる。私のほかに車内に客はいなかつ
た。目に焼きつくせむし男の独白は、
二十年以上も昔の小学校の運動場を思

い出させる。

晩秋は、やわらかい陽射と落葉樹の
色に埋もれていた。大地はかすかに温
もりを伝え、うすまぶたにふれる黄金
色は、もう忘れ去ってしまったような
仄かな記憶だ。

広い校庭に、ふなめ色の口唇をした
少年が立っている。雪のちらつく十二

月になっても、少年は薄墨色のセーターと足首のでたズボン、素足に運動靴をはいていた。

身を切る木枯らしに体をゆすりながら、彼は白い歯を見せる。私は、彼がよく動く瞳と快活な声を追って校庭にいた。目の前をちらつく白い破片にさえぎられながら私たちは遊びほうけた。

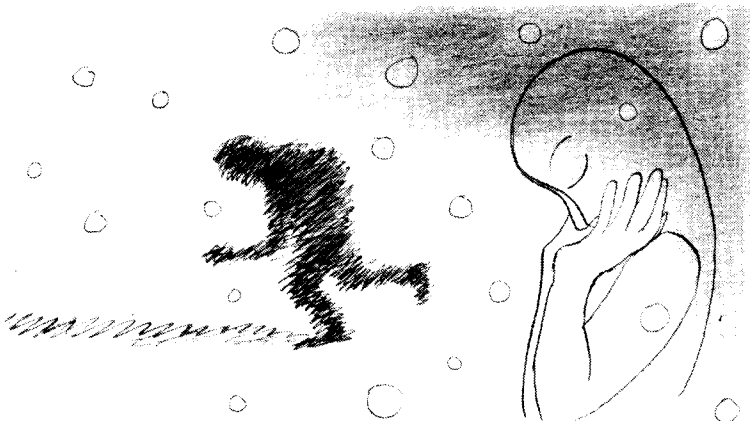
小学校のとき私は病弱だった。よく学校を休んでいた。すぐ下の妹が強度の弱視で父母がかかりきりだったせい。妹は生後三・四カ月の頃から手術のために入院をくり返していた。学齢期までにおこなった手術は十回をくだらない。それでも本を読むのに、牛乳瓶の底のようなレンズの眼鏡と拡大鏡が手放せなかった。紙面にピッタリ顔をつけ、上から下へなめるように一字ずつ読んでいく。ずいぶん時間がかった。

極端に視野が狭いため妹の運動神経

は鈍かった。水たまりや小川が飛びこせない。平衡感覚が育っていないのだ。つまずいてよく転んだ。走るのが苦手でゆっくりゆっくり地面をたしかめるように歩いていた。叱られたときや気が落ち着かない時、妹は軽度の脳性麻痺のような仕草をした。じいっとみつめながら、鼻をならして手首をくねくね回すのである。私はそれが不思議でたまらなかった。

妹とは二歳はなれている。私はよく妹を背負って予守りをした。末の妹は母に背負われている。一度妹に怪我をさせたことがあった。土間へおりる時、妹が重くて立ちあがれず、前につんのめってしまったのだ。妹は肩をくじいて、しばらく母は私に背負わせなかった。

母は妹を溺愛していた。愛情をそそぎこむことで、少しでも身の不幸を埋めようとしていたのだろう。何かあると、私と末の妹に言い聞かせたものだ



った。姉妹仲良うして泉ちゃんをかばうてやってな……、酔った父と喧嘩するたびに母はそう言った。

十六歳で妹が死んだ時母は半狂乱になった。原因ははつきりしなかった。国立病院からの解剖申し込みも断固としてはねつけた。埋葬のとき、習慣であつた座棺をやめて体が案なように寝棺にした。

妹が死んで私が感じたのは、もうとり返しのつかない、一生返せない借金を背負った気持だった。通夜に酔いつぶれて翌日の葬式にはでられなかった。棺に釘がうたれたのも、墓場で土中に沈められたのも私は知らない。私の中で妹の死は、袖とおすことのなかった晴着をきて、「でい」とよばれる客間に横たわっているきりである。

静寂な夜更け、ほとほと身を髪をひかれるような気がするところがある。妹の生きた年数をはるかにこえて、今年私は三十一歳になった。

人はみな何かを背負って生きている。さながら、せむし男のこぶのように。

大正マツは「あたしの思い出を全部かためて出来たこぶ」として我が子に肉の墓をたてた。せむし男のマツ吉はその墓の下で一生を終える。

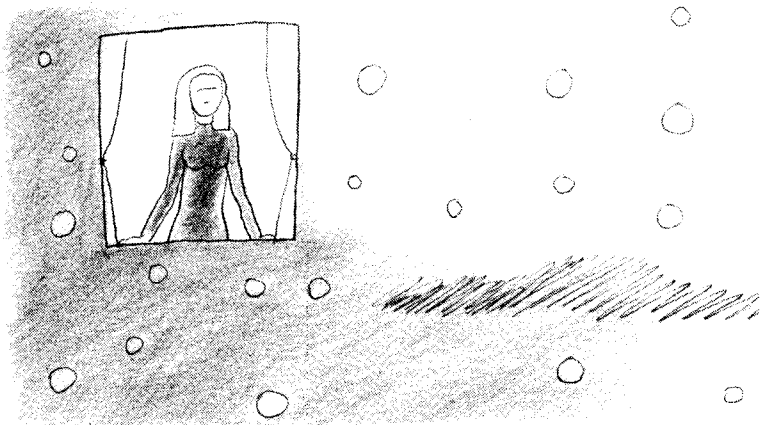
だけど一体 おれは誰を追いかけているのだろう 何をつかまえるために

三十歳にもなって 子供みたいに「鬼ごっこ」に熱中してるのだろう？

舌切り雀の見た夢か？ 暮れやすい冬の日ざしの中で じぶんの影を追いかけてつづけているこの味気ない役まわり

記憶の底に埋没していた情景が、懐かしい色彩と落葉の匂いをとまなびあがってくる。

追いかけてつづけている「鬼ごっこ」の鬼は、永遠につかまらない自分自身かも知れぬ。



故郷の昔語り

千葉県千葉市

関根 洋子

私が幼い頃すごした村は、新潟県の新潟原郡という所にある。新潟平野の中で、信濃川とその分流、中之口川とに囲まれた地域で、日本中で最も肥沃な土地だという。その中の茨曽根村という名の村、茨はのばらのこと、曽根はアイヌ語で沼という意味であると聞いている。

のぼらの咲く沼地を開拓したのが、関根村（どこにある村か知らないが、とにかく、そういう名の村があるという）出身の関根一族だった。開拓にはそれなりの苦労があったろうが、もともと豊かな肥えた土地だったから、関根家はすぐに大地主になれた。江戸時代には、藩の郷士にとりたてられ、苗

字帯刀を許された。

関根家が横暴な権力者であったかどうかは、分からない。江戸時代末期にこの家の当主となった関根壮太郎がどういう人物であったか、わがままな庄制者だったのか、ほんとうは心のやさ



しい、人を愛することを知った若者だったか、確証はないが、私は後者であると考えたい。

関根家は、村の禅寺・永安寺の檀家だった。永安寺は決して大きくはないが、きちんとした寺で、禅宗のため住職は代々、妻帯していなかった。この当時の住職は、中年の欲深な男だったのだろう。寺の門前に茶屋があり、るいという美しい娘が人々に茶を供していた。

関根壮太郎は心秘かに、るいに思いをかけていた。身分の違いゆえに添いとげられる恋ではなかったが、心の思いは誰にも妨げられない。ただ壮太郎は、それを、るいにうちあけられずに

いた。

その、大切に大切に思っているのが、あろうことか、身ごもったという。

壮太郎は激しい衝撃を受けた。恋しているが、誰かにおもちゃにされたのだ。あるいは、誰かと合意の上で契ったのだろうか。いずれにしろ、事の真相を知らねばならない。その上で、るいにとって最善の策をとってやろう、るいを不幸にはできない、なんとか幸せにしてやろう、と悩みに悩んだ末、壮太郎はるいのもとへ行った。

壮太郎は、やさしくるいに問いかけた。お腹の子の父親は一体誰なのか、決して悪いようにはしないから、その名を明かすように、そう泣いてばかりいては、何も分らないではないか。るいは身を切られるほど辛かった。心やさしい若様に愛されたら、どんなに幸せなことだろう、と、それはるいの夢でもあったのだ。

泣きじゃくるだけで、るいは相手の



名を言おうとしなかった。が、壮太郎のねばり強さに負けて、とうとうるいは言ってしまった。「あの……お寺和尚様です……」

「むむっ、このなまぐさ坊主めっ！」と怒りくった壮太郎は、「成敗してくれろ！」と住職を一刀のもとに切りすてた。

この後、関根家には、ライ病患者が出、自殺者が出、不吉なことばかりが

続いた。子供達が次々と病死した。当の壮太郎は村を出奔し、行方知れずとなった。るいは子を死産し、失意のまま、嫁すこともなく、その生涯を終えた。

あまりの不幸続きにうちひしがれた関根家の人々が、祈禱師に依頼して祈禱してもらったところ、「永安寺の住職のたたり、男系の子孫三代に渡って続く」という。以後、関根家は代々女系の子孫を当主としていくことになる。男系の子孫三代は、私の父の代で終わる。祖父も父も不運にみまわれることなく生きてきたが、父も、父の兄弟たちも、なぜか男児を持っていない。少女の頃、関根家の墓地で、母と私たち姉妹は関根本家の当主と会った。「女の子三人で良かったですね」と、その方はやさしい笑顔で私たちをつつみこんでくれた。

今は古い話である。

(元・松本をきえ)

ゆずの太木

神奈川県平塚市

岡 富実子（絵も）

祖父の生まれた家に、大きなゆずの木がありました。冬になると、見上げるほど大きな木に、みかんくらいの大きさの黄色い実が、枝を埋めるほどに実ったそうです。

ある年の暮、久しぶりでふるさとを旅した祖父は、町に住んでいる孫たち

のために、このゆずの実を小包にして送ってくれました。

箱の中からころころ出てきたゆずは、樽に聞いたとおりの、表面のごつごつした、野球のボールのような実でした。横一直線に割ると、すがすがしい香りを放つすき透った黄色の中に、大小

の種がぎゅうぎゅうにおしくらまんじゅうしながら詰まっていました。種はそろって象牙色で、シワだらけです。おそろく何代も前から、私たちの先祖の暮らしを見つめていたに違いはない大木が実らせたこの実が、とても懐かしく、また、そのとてつもない大きさが

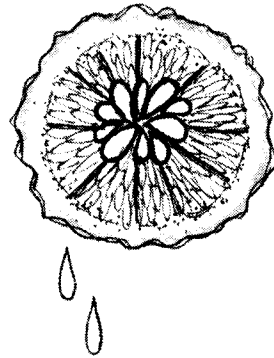
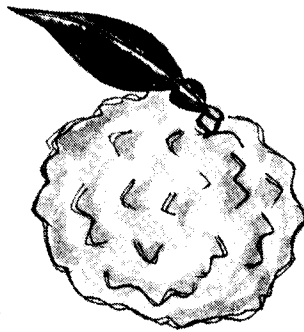
魅力的だったので、庭にシワだらけの種を蒔きました。

まもなく深緑色の太いトゲのある木が三本伸びました。三本はしばらく同じように育ったのですが、少々窮屈そうなので途中で一本植えかえました。すると、この一本だけをとり残して二本はすくすくと伸び繁り、夏には小さな木陰ができるほどになりました。

ところがこの木、五年たっても六年たってもいっこうに実がなりません。

誰かから、「桃・栗三年、柿八年、柚子の大馬鹿六十年」などという悪い予感のする言葉を聞きました。この頃から、皆なんとなくゆずのことが、気になりはじめていました。

人が来ると、庭のまん中にあるゆずのことが、話題にのぼりました。田舎から尋ねて来た人が、「柚子というのは、種を蒔いた人は実を見ることができなくて、幸運な子孫がそれを見つかるそうだ」と言ったこともありました。



柚子

東京のどこかの歯医者さんのところでは、昭和の初めに蒔いた柚子が、最近とうとう実をつけたという話も聞きました。なんと五十年越しです。いつもお経を読んで下さる御住職が、あるとき家の中からこの大きな木に目をとめられました。お歳の多い御住職は「これは実生の柚子といって、たいそういい実がなりますよ」と話してお帰りになりました。野菜を売りにくるおじいさんは、「こりゃ繁りすぎだよ。風通し、風通し」と、ずいぶんかんたんに言いました。

家から国鉄の駅まで歩いていく途中の空地に、濃い緑のトゲトゲの枝が、糸くずのように、絡まれるだけ絡まった複雑な木がありました。まだ小学校に通っていた頃、この木はうっかりそばを通りすぎると、すぐとげにひっかかる意地悪の木でした。その後駅へ行く道をかえたのでここも通らなくなり、



からたちの木

木のことも忘れていました。

ところがある日、偶然同じ場所を通りすぎたとき、相変わらずもつれた濃い緑の中に、黄色のピンポンの球のような実を鈴なりにした木が、ちらりと見えました。いつの間にか大きくなっていたこの木は、からたちだったのです。それ以来、秋になって無数の黄色い実をトゲでかばうようにかかえこんだ姿を見るたびに、同じみかんの親戚で、実無しのゆずとひき比べてはうらやまがっていました。

ある年、二本の大きな木は片方が養分を摂りすぎるのではないかということになり、思いきって切りました。残った小さい切り株からは、春になると深緑色の小さな芽がでています。一大決心をして一本を切った年、もう一本の方も大はばに途中の枝を落としてみました。草とりをするときひっかかる、太い幹から直接出ているはしの先のような太いトゲも一本ずつのこざりで、

空にそびえる先端は、はしごをかけて背伸びして切り落としました。気づかない間に例のからたちにも負けず劣らず枝が絡まっているところもあったので、ずい分風通しがよくなったはずなのに、ゆずの花はいつこうに咲きません。

それが、二年ほど前の秋、庭に出て何げなくこの大木を見上げると、繁りに繁った深緑のつやの中に、何か乱反射するものがあるのです。つやが鈍く、ざらついているのです。

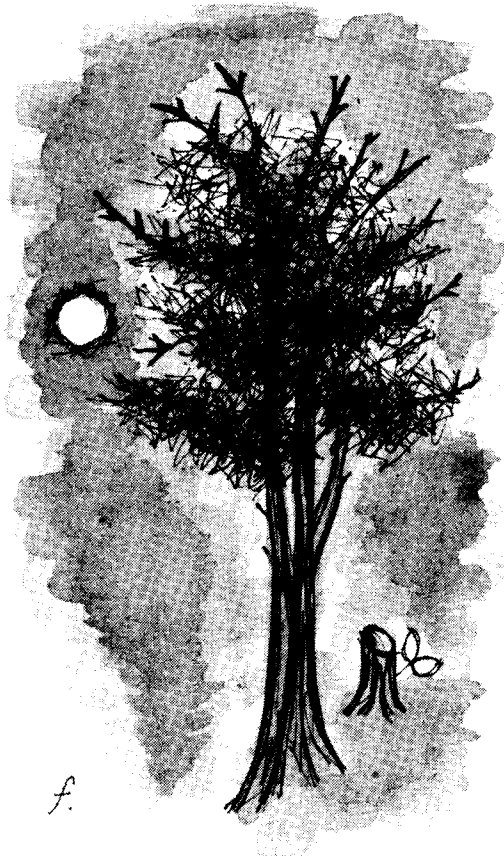
まさか、と目をうたがいました。三歳の息子にも、しっかり見とどけさせました。生きのいい、清々しい、若い実でした。その年の、一粒の大切な収穫でした。植えてから十年はとくに越えていました。

一度実をつければもう大丈夫と、世間では言い伝えられているのですが、家のゆずは沈黙です。その後、広島の方でお抜いをして実のなった話を聞き

ました。何でもトゲに他の柚子の実を
さしてお祈りをしたそうです。

関東地方でも他の柚子をトゲにさす
という話がありましたから、案外この
木は形而上的な植物なのかもしれませ
ん。今年は、いい柚子を見つけたら、
絞るのはやめにして、百舌になろうと
話しています。豊作をお願いしながら
柚子を早にえにするのです。

今日、一月、新年を迎えて間もない、
濃い藍色に冴えた空をバックに、ゆず
の木は黒い影絵になり、そのちょうど
中ほど、枝分かれしているあたりのほ
るか彼方に、冬の大きな満月が凍てつ
くほどこうこうと白金の光をたたえて
います。



投稿ホットライン——楊枝で重箱の隅をほじくろう！

マスコミむしる

これでいいのが、よってたかつてフリルとお星さま

新聞の投書欄から

東京都練馬区 友松 悦子

「女の子は幼年期を過ぎると、女性として望ましくない行為、言葉遣いがあることを、次第におとなの世界から学ばれます。その点おとな達には大いに責任があると思います。しかし、清潔感、潔白感、道徳心などを学んでいく基礎となる時期に、女性が男性の言葉を使うのは好ましくないとするのは偏見のような気がします。」

東北のある地方では、女が自分のことを「あたし」ではなく「オレ」と言っています。

私が育った関東のある地域でも、女言葉と男言葉には、東京ほど厳密な区別はありません。けれども彼女らに清潔感や潔白感が欠けているとは決して言えず、田畑に出て男たちと一緒に汗を流し、あるいは養蚕の重要な働き手として、男たちと労働を共にしたという輝かしい生活の歴史がそこにはあります。東京でも、女生徒の中に自分のことを「ボク」と言う人がいるとて話題になったことがあります。た。「……だよ」「……よ」はよく耳にします。

私の娘も（実は私も）使います。

言い訳がましいかも知れませんが、娘らがおとなのまねをした女言葉を使うより、このほうがずっと新鮮でいいと思われる場面が沢山ありますし、むしろその生き生きとした場面を、女の子だからと言って摘みとらないようにしたいと私は考えています。男と女とで成り立っているこの社会で、女だけが不必要に丁寧語を使ったり、やたら名詞に「お」をついたり、また、へりくだる言葉を強要されたりするのは、どうも不自然だと思っているからです」

これは三年前、私が朝日新聞の「声」欄に投稿した文です。「この頃女生徒の言葉遣いが気になる」という投稿に反論して書いたものです。この投稿が載った時、原稿はほんのわずかに縮小されていました。それはよくあることなので気にもとめなかったのですが、文中の男・女がすべて男性・女性という言葉に直されていました。男・女という語には、働く、愛する、生む、育てることを含めて、す

すべての思いを込めたニュアンスが感じられ、ここでは男性・女性よりふさわしいと思っていたのに……。」「男性たちと一緒に汗を流した……。」「では、どうもあのどろどろとした男と女の関係は言い表せないような気がするのです。」

でも、朝日新聞社の編集子は、男・女という語には、一種のなまめかしさのようなものがたまたまと感じられたのでしょうか。だから男性・女性という言葉に直さなければ、天下の朝日新聞の品位が落ちると思ったのでしよう。

これと同じようなことは、他の場面でも経験したことがあります。杉並区の婦人のつとめの準備委員として、討論に参加した時のことでした。集会のタイトルを何にするかで、さんざんもめたのです。区側は絶対、婦人の……、を使いたい様子。婦人の……、がダメなら、せいぜい、女性の……、という言葉が妥当という意見です。

あしたの女たち、
生き生き女性、

「婦人が働き続けるために」……etc.

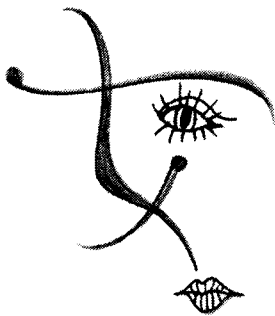
私は婦人や女性ではなく、「女」にこだわったのですが、行政の側が企画するつとめのこと、やはりすっきり「婦人」か「女性」かでなければならぬようでした。結局タイトルは、「語り合おう、女性のあした」に落ちつきました。

ところが最近、くだんの朝日新聞に少し変化が見えて来ました。やはり時代の趨勢なのか、女の生き方をテーマにした記事がこの頃盛んに見られるようになりましたが、気をつけてみると、ところどころ「女性」ではなく、「女」という言葉が使われるようになっていきます。八三年四月二十七日の社説では、見出しに、「女の自立へ息長い取り組み」とありました。三年前、一読者の投書文の中の女という言葉で、わざわざ女性に直して印刷した同じ新聞紙上で、この見出しを見つけた時は、やはり驚きました。

また、最近、投書の職業欄に「無職」という表現も見られるようになりました。職業欄に「無職」として投書したのに、新聞に載る

時には「主婦」と直される経験をもつ私にとって、これもおもしろい発見でした。先日、清水ひろ子さん（わいふ会員）が「ひととき」に、「子育て賛美、そろそろ卒業しては……」の文を書かれていました。私はその文の内容に深く同感したと共に、多分彼女の原稿どおり、職業を「無職」として載せた編集子にも拍手を送りたい気持でした。

女、無職——いずれも大した問題ではないかも知れません。でも、わざわざ女性や主婦に訂正しなくなったという事実には、私はやはりある意味を感じます。



（え・万谷陽子）

サークル だより

横浜サークル便り

十二月九日(金)・定例会。話題の中心は、十一月二十一日付朝日新聞誌上に掲載されたわいふの記事のこと。ネクラを自認する私達が少数派であることは認めるとしても

『よほど不運な主婦でない限り、ネクラになりようがないではないか』と言いつつ

てしまっている現状分

析に憤慨した人、今までのわいふの歴史からみて不思議に思った人、そしてさすが田中さん、一段上から見下ろしていられしやると、変に感心した人などなど、とらえ方は様々。

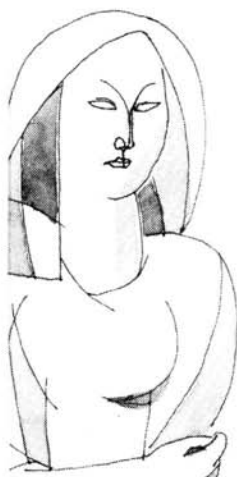
彼女たちの、『ルン・ルン』で『ラク』な『ネアカ』生活は、いったい何によって成り立っているのだろうか、そのことと社会の中

に起っている問題とは、何も関連がないのだろうか……。こんな疑問を投げかけ、掘り下げていくことのできる場こそが、『べき』論の固さをひとつのカラーとしていたわいふの使命であると期待しているのですが。

女の自立を言う時も、嫁ぐことがその手段となる人もいれば、あともかわらず主婦感覚の人達も多数です。絡み合う人間関係の中で自らの生を生き切ることへの喜びとしんどさに対する自覚から、責任が生まれ、他からは自由になれ

るのではないのでしょうか。そしてこの解放された自由こそが、自立への歩みなのではないのでしょうか。では具体的に、各自それぞれの自立とは、真に生きるとは、と『ネクラ』に考えてみる時、ワンバタインではくり切れぬそれぞれの状況の下での出会いが、ひとつの道標となっています。お互いがより深く支え合い育ち合える関係ができてきつつあると感ずる今日、このごろです。(福田久美子記)

(え・松本をきえ)



びのガイド



羽根木公園「プレイパーク」探訪

三崎成美

寒さに慣れたとはいえ、そろそろ春が恋しくなってきた。そんなある日、子連れで羽根木公園に足を運んでみた。

毎年、六五〇本の梅を賞して「梅まつり」が催される。区内外の梅愛好家が大勢集まる、かの有名な公園で、ご存知の方も多いと思う。この園内にプレイパークと呼ばれる広場がある。区の助成をうけながら、地域の人々と学生ボランティアが中心になって、子ども達と一緒に運営にあたっている。

今日訪れたのはこのプレイパークだ。直径

が一メートル以上もありそうな大きな酒だるが歓迎してくれる。その側に「自分の責任で自由に遊ぶ」と題する、大きな立札が掲げられている。その中で、特に注目して、読んだのは「子どもが公園で自由に遊ぶためには、事故は自分の責任という考えが根本です。そうしないと、禁止事項ばかり多くなり、楽しい遊びができなくなります。このプレイパークのモットーは、自分の責任で自由に遊ぶです。みんなの協力で楽しい遊び場を作りましょう」という個所だった。





子連れ遊

十分、安全には配慮していても起こりうる

事故。それを恐れて何にも手出しをしない最近の風潮に、敢然と挑戦していると感心。次に目にとまったのは、大きな椎の木。そこに、こんどは木札がかかって、「五年間、ごくろうさま」この、しいの木は五年間、ターザン小屋と、たくさん子ども達をささえてきました。でも……少しつかれました。しばらくの間、おやすみします。」とある。やさしさを見つけた。連れて来た子ども達は？ と見ると、もう遊びに興じている。

さして広いとは言えない広場に、がらくた遊具が、散在する。ターザンごっここのロープ遊び。椎の木の上には、鳥の巣のような小屋。小びとの家を思わせる、手作りの家が何軒も。丸太が無造作に重ねられている。大きな酒だるが置かれている。事務所まで、手作りされた木小屋だ。

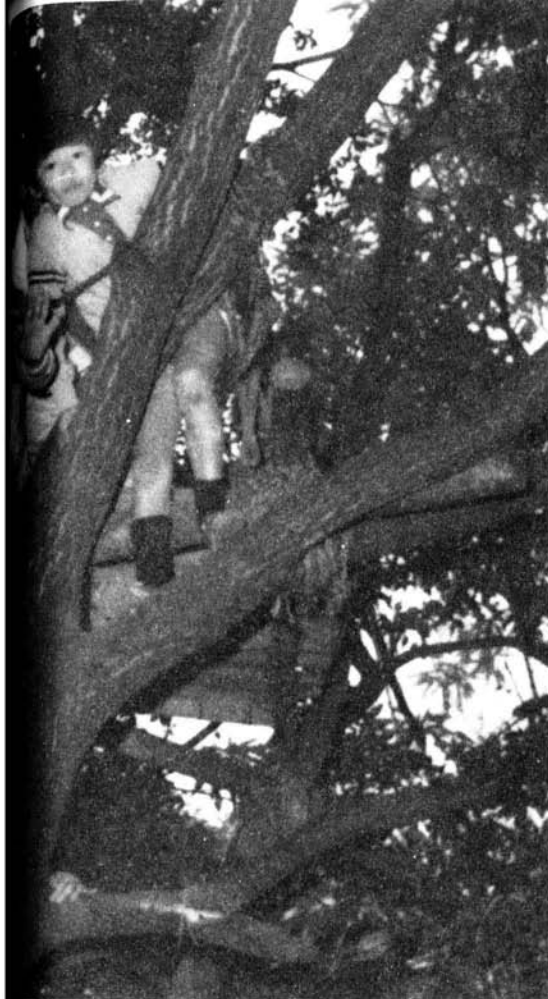
ノコギリ、カナヅチ、まき、鍋、鉄板、などと置かれている物置き小屋ももちろん手作り、ペンキべたべたで、サイケデリック。そんな中で、おとも子ども、思い思いに、

何かをしている。

レンガを上手に組み立て、まきで火をおこし（火のおこし方が悪いと、ブレイリーダーが助言していた）焼きいもを焼いている子。鉄板を置いて、焼きそばを作るグループ。持ってきたおにぎりに、みそ汁を作って食べている親子。おいしそうな香りに、おなかグー。ふと横を見ると、ブレイリーダーのミーティングが行われている。

ここに来ると、子どもはもちろん、親の方まで童心にもどり、一緒にターザンごっこに興じたくなる。まき割りもしたくなり、焼きいもなどはおばれたら最高の気分になれそう。セーターを着ていた子ども達が、いつの間にかシャツ一枚になっている。ターザンごっこは、最高潮に達していた。もうすぐ梅まつり（二月十六日～三月九日まで）ほんのりと品の良い香りに満ちるころ、このブレイパークも、又一段と活気づくはずだ。

なお、この羽根木公園には、プール、野球場、子ども広場、テニス場と、施設が揃っている。一年を通して、親と子が遊べる絶好の場所だ。



●羽根木公園プレーパー クの案内

所在地 世田谷区代田四一三八一五二

羽根木公園内

電話 〇三(三二四)九二八四

交通 新宿から小田急線「梅ヶ丘」

下車 北口より徒歩二分

渋谷より京王井の頭線「東松原」下車 西口より徒歩三分

入園料 無料

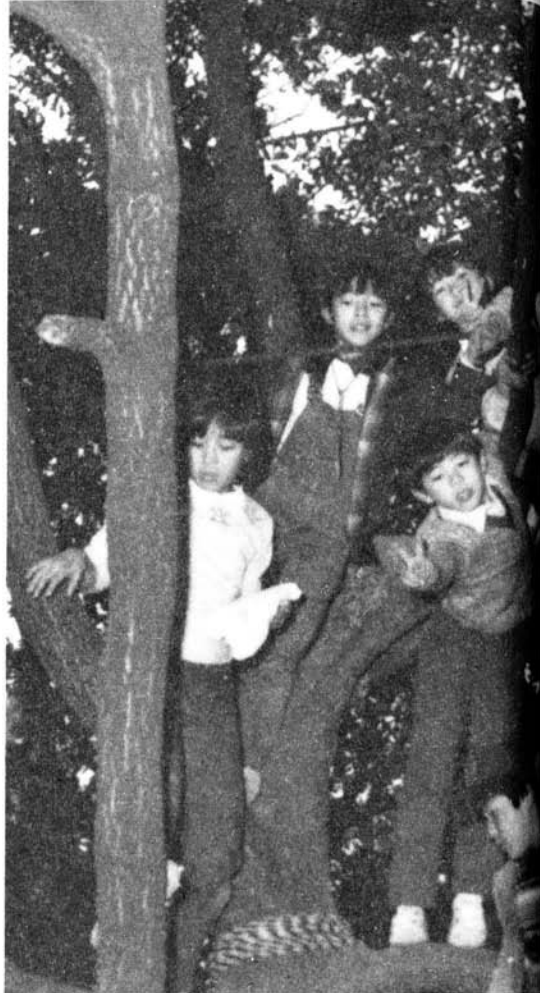
休園日 毎週火曜日と雨の日

活動時間 十時から五時まで

親の楽しみ 子どもの気持にもどれること

と。二月十六日～三月九日まで梅まつり、四月にはお花見もできる。

子の楽しみ 出来ないと思っていたことが、出来ることに気づくこと。



施設

流し台、材木、鍋、鉄板、レンガ。ミニキャンプが出来る材料がある。

季節

四季を通して。夏はプールが開かれるので、特に楽しいかも。

売店

飲みもの、菓子、インスタントのめん類（お湯あり）を売る店は一軒あるが、お弁当持参か、あるいは、鍋、鉄板をかりて現地で作るのが楽しい。園外には食事処多数あり。

かまどの利用法
利用したい場合、区内の人は十五日前から受けつける。電話可。

トイレ

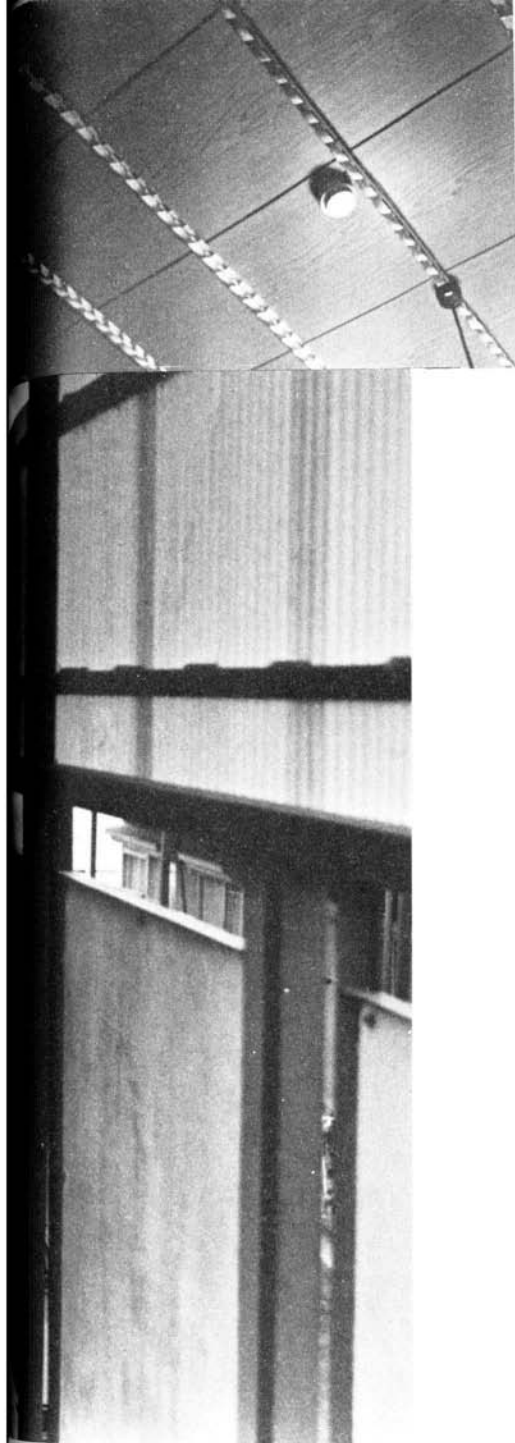
貸し出してくれるものは、まき、鉄板、ブロック、スコップ等。
プレーパークの入口横。管理事務所の裏側。その他にもある。

連載第一回

きのえね

甲子ハイツ一〇二号室

文●柳原 和子





「Kの都心暮しか場末の「振り分け」か

甲子^{きのえね}とは一九八四年、今年の干支である。私はその甲子ハイツという名のアパートに住んでいる。

△甲子ハイツ△と書いた名刺を見て、素直に△キ・エ・ネ・ハイツ△と読める人は、少ない。それが、昔懐かしい醬油の商標であることは、ある年齢以上の人は、誰でも気付くのだが。

しかし、ハイツ[△]という、何とも近代的な文字に接続すると、何かイメージが合わないらしく、大抵の人が△カッシハイツ？△などと聞き返す。

ハイツという文字にこだわった人からは、「マンション買ったの？」という反応が続いた。

△マンション△ではない。絶対、ないのだ。

純然たる、ごく並の鉄骨モルタル造

りの木質アパート二階建てである。どこにでもある一DKと二DKがそれぞれ八軒ずつ二棟並ぶアパートである。

私が、東京都練馬区大泉学園にある父の家から、この甲子ハイツに引越してきたのは、今から丁度、一年四カ月前のことであった。

去年の八月から九月の間、私はご多分に漏れず、実に様々な夢を描いて東京中の不動産屋を訪ね歩いた。

はじめの条件は、「一カ月六万円以内、風呂付き」という、極めて単純なものだった。

仕事の都合もある。多少情緒不安定な、俗に言えばハイミスの年齢もある。酒飲み交遊付きの打ち合わせで帰宅は深夜……その他の諸条件を考えて、まずは都心に近い所から探しはじめた。

多少高くても、タクシー深夜料金を考えれば——というのが理由の第一だった。

新宿では、六万円では一K。六畳に三畳から広くて四畳半のDK（一畳の広さは昔の畳の四分の三程度しかないけれど……）そしてふとめの人なら扉を閉め切らなければ方向転換不可、というプラスチック製バックのバス、トレイ。

「いいのがありますよ」

不動産屋の甘い誘い、熱心な電話攻勢についつられ、面白半分も加わって歩きまわった。

しかし、帯に短し、褌に何とやら、どうにも決断がつかない。

「困るなあ、優柔不断、だから女は困るんだ」と不動産屋のオニイサンの声。

それに、日々の仕事も不安定なのだ。六万円を払い続けるということは、水道光熱費、そして、異常なまでに高い

電話代を加えると、それまでの私には至難の技に近いのである。

五万円台なら——と、視線は中央線沿線から京王線、西武新宿線へと広がった。

どうやら国鉄に近づきたかったふしがある。

つまり、私の生れた小田急線千歳船橋から西武線大泉学園へと引越した、そのときの感覚がどこかに、ひっかかっていたのだ。

この引越しのとき、癌で療養中だった母は、「二十三区内がいい」といつていた。ふとんにくるまり、電話線を枕元に置いて、当時は新聞の不動産情報片手に、母は家を探した。

家の造りももちろんだが、地名にこだわった母の姿があった。二十三区外に出て住むことが、母にとって「落ちぶれる」という感覚にも近かったのだろうか。

「広けりゃいいじゃない」という、

私たち家族の意見を聞き流し、彼女は「自分の家」を探し歩いた。古い家を売って新しい家を買う。差額は、当時余命三カ月といわれた彼女の治療費になるはずだった。彼女のメモ帳には何百、何千という数字、計算のメモが並んだ。家計簿には、闘病日記が記された。

生命を买えるものなら——という必死の家探しにもかかわらず、どういうわけか母は二十三区内の家にこだわったのである。

結局、決まった家は、建て売り五十坪、十三年前の値段で千三百万円。ローンを組み、古い家の借地を地主から買って差額はほんの少ししか残らなかった。生命を买えるほどではない。

八畳の広さを基本にした四LDK庭付き、五十坪の土地——当時の建て売りの中でも広い方であった。

どうやら、そんな母の感覚が私の中にくすぶっていたらしい。生れた地域、

つまり、世田谷、新宿、渋谷が私のパート探しの舞台だったのである。

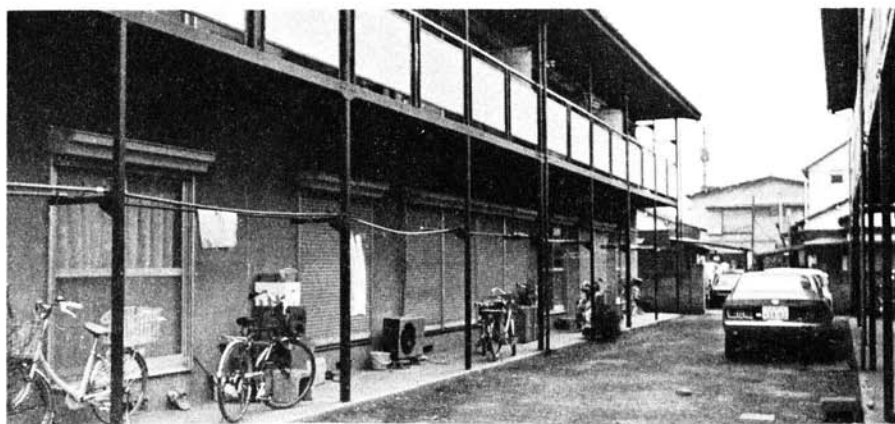
しかし、いざ探し始めると、あるようでない。鉄筋コンクリート造りの家に住みたい、という私の「夢」は難しさを倍加した。

多少「露悪趣味」と友人から評される私なのに、近所の視線からは自由でいたい、という願望。ガシヤンと鉄の扉を閉めれば、誰の眼からも自由、音も聞えない——という基準が私の「夢」だった。

当時、進行中だったエキセントリックな恋愛劇も「プライバシー」に過剰な配慮をする理由の一つだった。

何枚もの名刺の束が今も残っている。親しくなった不動産屋の数は二桁を超えただろう。「女性が一人暮らしを始めるときには、必ず裏に男がいるんですよ」

彼自身も離婚騒動の最中だというY君。



「失恋の痛手か、それとも新しい男との生活の場か……」

一日に三部屋を見て回る、高級車の中での会話である。

「契約になると、話がはっきりするんです。男が金をだす、不倫の関係なんかだと、必ず最後に二度も三度も電話をかけて、男の決断を待つ。男に決断を委ねるから、そこから先の話ができない。」

いざとなると、——主人が……となる。それでいて、男が部屋を見るわけでもない」

同じ会話は、どんな不動産屋の口からも聞かされた。町の不動産屋だと、話は露骨だ。

「あのね、金を出すのは誰なの？ ご主人なら、アンタに部屋見せても無駄だからネ」


と、こうなる。

探すのは女、決断は男——だから、男が来ないと部屋は見せない。


さて、国鉄になるべく近い所、中央集権を目指す私の願いも、五〇六万円の壁を突破できない。この値段では、せいぜいが一DK。二DKになると、陽当り、または部屋の作りに難ありということだ。

そうこうしているうちに『住宅情報』『アパート・マンション情報』『読売住宅案内』といった本を毎週買うことになる。一冊二百円也の住宅情報誌である。

見せ金の多いこの手の情報誌。

笹塚 6・4.5DK・・水洗 六万

円。

中野 6・5DK・・水洗 六・

五万円。

「これだ、これ！」

電話器抱えて、ダイヤル回せば、何のことはない、今出版されたばかりの情報誌なのに「すでに決まっています、別件では？」という答が親切な声で繰り返されることになる。

やはり足だ。足で歩くしかないのだ。

そこで再び条件の検討。六万円といえませんがフリーライター稼業には、何ともはや厳しい値段だ。どうもカタカナの職業には見かけほどの中味が無い。売れっ子には程遠い私には、六万円の家賃を払うためには、リライト百枚、一枚三千円の原稿で二十枚。三千円の原稿を書くには、少なくとも一週間から十日間の取材が必要。——となれば、コマーシャルからリライト、そして編集という何でも屋稼業が果てしなく続く。

やはり無理。無理だ、駄目だという結論がでてからは早かった。

「まあ、仮の宿と思って——心を決める。仕事も仮の状態、少しの間侘しければ二DKの夢、コンクリートの夢、都心の夢を葬り去り、ウン、四畳半、共同トイレ、二万円の部屋でいい。しかし、私の決意を聞いた親友のKは猛反対である。

「昔サ、神田川」って歌が流行ったじゃない。あのとき、和子『イヤダ！ イヤダ！』っていつていたでしょう。四畳半ソングなんて、ミジメタワーって」

二万円なら、予定より四万円も安い。その分、本を買ったり、旅をしたり、精神がリッチになればそれで……これが私。なのにK嬢だけでない。家族、恋人こそって猛反対。

「あのネ、狭い所にいると貧しくなるの。天下国家を論じてても貧しくなる。

広い家を維持しようと思っって一生懸命に働くのが人間てものなんだから——。

あなたはただでさえ生活感が希薄なんだから、もっと、ここが私の生活ッ！、という部屋を探した方がいいッ！」

ミジメかな。やっぱりミジメかな。それなら、変わりばえしない大泉学園。父や姉一家の住居近く、何かと便利かもしれない。またしても振り出し

に戻って歩き始めた。

いくつも見て回った。自転車で走り

回った。

えいっと決めてしまったあの雨の日

しかし、悩んだわりには、コンクリート、都心、二DK……と夢みたわりには、決断は一瞬のことだった。

まずは、親切すぎる不動産屋の夫婦が、私を限りなく疲れさせた。偏見ではなく、いかにも「不動産屋」という感じの夫婦がガラス戸の奥に座っている。ご多分に漏れずビニール製の応接セットに事務机。雨の日だった。

貼り紙にはハ格安!! 四・七万円!! 6・4・5DK・ゆ・水洗別室✓とある。広告につられてガラス戸を開ける。待ち構えていた夫君がとめどもなく喋り始める。

「部屋ですか? いいのがあるよ! でもねアンタ独身でしょ。独身のとき

には少しでも節約して金ためなさい。

四畳半から始めたらいい。ウン? あっ、そうか。家にいることが多い。文章書いてるって? 部屋代は大丈夫だろうね。店の裏にとっても広い六畳がある。風呂はすぐ近くだし、バス停に近いし。二万七千円。見てみる?」

誘いにのって見に行った。そのとき、わが友人K嬢の声が心に響く。

「フリーなんてお客様商売なのよ。水商売と同じ、小ざっぱりしてなければミジメよ!」……。

「あの、——やっぱり、お風呂が……」再び店内。ひとしきり節約の講義、しかし、ガラス戸の貼り紙が気にかか

「それならもう一軒、その貼り紙だ。これはイイヨ! 広いし、振り分けだし」

「振り分け」とはアパート生活者のこれまた夢なり。夢の乱発。レベルも下がる。でも、夢なのだ。

一直線に三部屋が並んで、玄関開ければまる見えの鰻の寝床は一DKと同じ。振り分けとは、つまり各室が独立した空間になっている。見えない空間がどこかにあるということ。

疲れていた私は、雨の中、トボトボと奥さんについて部屋を見せてもらった。少々、部屋探しに疲れていたともいえる。

「大屋さんが儲ける気がないのね。だから格安なの。駐車料金もとらないのよ」

襖を開閉しながら奥さんの声を聞いている私の夢は、どう錯覚したのか再びふくらみ始めた。

雨の日だった。これが鍵である。部

屋を見た。少し暗いが晴れていれば……。とそのとき思った。広い。少し憧れの二DK、振り分け、風呂付きだ。おまけに瞬間湯沸器、ガスコンロ台、換気扇が付いている。

「前に住んでいた人が、家を建てて引越したから残っていたの」

落ちついてみたら壁がみどり色

マスコミという世界、いや広告、いや業界誌、いや、いやテープ起こし——私がこの虚業産業の端くれに末席を得て以来、どうも友だちの質に変化が起きた。

「金はないけど、力なら」というのがそれまでの友だち。「金はないけど、力もないけど口だけなら」というのが虚業産業に従事している労働者諸氏。

おまけに「時間があれば思索にふける」と称して、映画を観る、読書する、

決めた。決めた。甲子ハイツ一〇二号室。雨の日に、私は即断即決、決めました。何しろ広い二DK。友だちもきつと拍手喝采のハズデスから。それに、先住者が「家を建てた」とは、運が良さそうな「気」がします。

のかと思えば呑み屋で友だちと「何かネタはないか」の探り合い。「書を捨てよ、街に出よう」と寺山修司を逆手にとったわが友人たちの日課。

「引越す」の宣言も空しく、誰一人、肉体労働を買ってでてくれる人は、いない。たしかに、私も友人諸氏の氣勢をそぐようなことを、いったかもしれぬ。

「引越すのよ。二DKよ。実家から三分位の所なの。うん、運ぶものなんて

何もないの、自転車とリヤカーで十分よ」

わが友人に謙遜が通じないとは——。誰も「手伝おうか」とはいつてくれない。

奇妙な恋愛劇に憂き身をやつして、その果ての引越し騒ぎ。誰の視線も冷たいのである。

そこで、女の意地が出た。近所から大きなダンボール箱を譲り受け、まずは本を詰めこんだ。商売柄「積ん読」なりとも本は多い。以前の一人暮らしの名残りか、見えない家財道具がやたらにある。

最初は、宣言通り自転車で運んだ。

三分が五分、五分が十分の長距離に感じてくる。二日目——やはり車が必要だ。一転トラックを借りることにした。造園業を営む加藤さん。彼を紹介してくれた不動産屋も加藤さん。甲子ハイツの大家さんも加藤さんなら、ダンボールを譲ってくれたのは倉庫業の加藤

さん。リヤカー貸してくれたのも加藤さん。酒屋も加藤さん……。

加藤さんだらけの町に移住したのが、私たち建て売り住宅民だったというわけだ。

建て売り住宅民たちの町は、一見豪華。まさに、甲子ハイツである。一見新しく、どこかペラペラの安っぽさ。しかし古さも捨て難い——甲子ハイツという名は建て売り住宅の町そのものだ。

とにかく私は、インテリ友人たちが酒を飲んでいる間に、三日間をかけて引越したのである。

引越し騒ぎも一段落して、憧れの風呂に入り、まずは一休み……と周囲を見回して驚いた。

壁が、壁が、壁が緑色なのである。民宿の壁といえば誰もがわかるだろう。いろいろの色が混ざって、中にはピカピカ光る繊維も混じっているが、いつてみればあの壁が緑色なのである。不

動産屋の奥さんと一緒に訪れたときには、台所の白壁だけが美しく、明るく——。印象に残っているのは、あの白壁と、湯沸器とガス台だけ。そして、もちろん二DK。しかし、ふーっと息をついて、たった一人、ボツンと二DKに座してみると、壁の緑が気になり始めた。そして、ピカピカも——。電気がつく時間になると、ますますピカピカ、何やら、居心地の悪い気分になってきた。こうなると、広さも気になりだす。

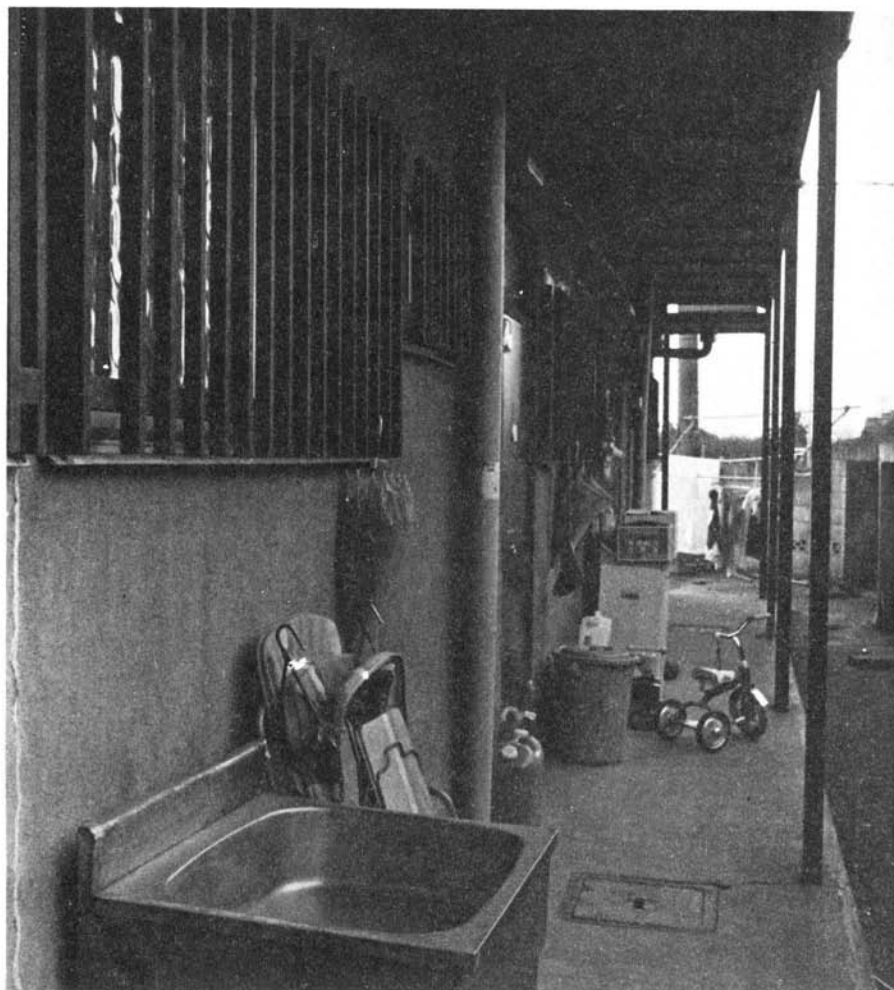
時は夕刻、幸いにも友人の中ではとびきり親切な独身カメラマン氏が手伝いに来てくれた。本棚を設置し、さて夕食でも、と外に食事に出た。しかし、間がもたない。時刻は八時をまわっていた。カメラマンM君も、据えつけ途中の本棚が気になり、二日間はずっと手伝いつぶせないから、と緑壁の部屋に戻り、今夜中に設置しよう、と作業に懸命となる。

そこに、姉が駆けつけてきた。私が「家を出る！」と宣言して以来、我が家には「ようやく和子も結婚する気になったか」の噂がしきりだった。それを横目に、見果てぬ恋に焦がれていた私である。姉が、必死に緑壁に棚を設置している一人の男性を、本命！と錯覚したのはやむをえない。一〇二号室に緊張の空気がみなぎった。誰も一言もいおうとしない。

そこに、かの見果てぬ夢の恋人候補が戸をたたく。雑巾を持つ姉が扉を開けた。

「あの——。手伝いでもと思って……」
「……あ、どうも……」

再び緊張。誰も何も語らない。姉の視線が二人の男性を往来する。M君は、やたらに壁の釘をトントんとたたき始めた。——と。扉をドンドンと打つ音。立っているのはもの凄いの形相の角刈りのオ兄サンである。しかも、ステテコ一枚である。



「チョットネ、アンタ、もう九時過ぎだよ。世の中には常識ってもんがあるんだ。ウチには赤ん坊もいるしヨ、泣いて困るじゃないか。」

「ス・ミ・マ・セ・ン」——と姉。

緊張は破られた。まずM君が帰り、憧れの恋人候補が帰り、最後に姉と私再び緊張。

予想通りだった。長女の本質がこんなとき末っ子に向かって出ないはずはない。

「あのね、今までは何もいわなかったけれど、一人暮らしというのは大変なのヨ。近所との問題もあるし、家賃だって、これまでみたいに『お姉ちゃん、今月コラエテ!』ってなわけにはいかないんだから。あんなに怖い小父さんが住んでいるんじゃない、ゴミ一つだって文句いわれる世の中なのヨ。大体、アンタは世間の怖さを知らなすぎるんだから——。今まで、私がどんなにかばってきたと思う? そりゃネ、

アンタも大変だったと思うけど、三十にもなって『アタシは恋愛至上主義』なんて、夢みたいなことって。これがいい機会だから、少し冷や飯でも食ってごらん……」

とまあ、かなりの時間をしばられた。そして、ご帰宅。

「ふるさと」の自然は影もかたちもなくなつて

二十三区内とは名ばかりで、練馬区は田舎である。『ダサイ埼玉』に近い農村だ。仕事を休み続けた農家が、農地を壊して芝生を植えている。そして、高度成長時代の波にのつて、農地は次々と建て売り住宅地に売られていった。私の家族は、今から十三年前、建て売り前史の時代に、世田谷区桜丘からこの練馬に移住している。

不動産屋情報によると、『学園』とか『丘』、『台』などという文字が付いた

ただ一人、甲子ハイツ一〇二号室、二DKに残された私にはすることもない。

しかし、その日はまだ、身体が疲れていた。だから、甲子ハイツ一〇二号室の恐ろしい現実について、まだ気づかずにいたのである。

地名は、俗にいう高級住宅地だそうだが、だから、住宅地として開拓された東京近郊の新興住宅地には、『丘』、『台』、『学園』という名のつく所が多い、と聞く。山手地区の老舗の重厚さと違って、そういった新興建て売り住宅地は、とかく不動産屋のイメージする『明るい町』の軽さが漂う。とすると、わが家族は、老舗の町から『明るい町』を目標した開拓民ということになる。

甲子ハイツに引越した直後、生れた

世田谷区桜丘の家を、十三年ぶりに訪れた。戦後、それこそリヤカーに家財を載せて、両親は世田谷に土地を借りた。文字通り、掘立て小屋を建てた。今でいうなら二DKである。そこに、私を除く家族四人が暮らし、後に私が生れ、五人家族となった。

庭には、様々な果樹が植えられ、ニワトリが飼育された。戦時中、職業軍人であった父は、戦後の町に放り出され、闇商売にまで手を出した、と聞く。しかし、生粋の軍人教育を受けた彼が、商売などできるはずもない。ことごとく、うまくいかなかった。そして、自衛隊が結成され、彼も古巣にもどった。家は貧しかった。庭には食料となる果樹が植えられ、栄養となる卵を産むニワトリが飼育された。庭の木は、クルミ、イチジク、柿、ミョウガなどが何本も並んでいた。そして、家を覆うような大きな桜の木があった。

毛虫のつく木ばかりで、幼い私はそ

んな木が嫌いだった。しかし、桜の季節は、近所中の人が観賞するほどの大木だった。美しかった。柿には父が人糞をやった。臭かった。汚ない、と逃げた。でも、美味しかった。クルミの青虫は野太かった。地面へ地面へと降りてくる青虫の習性を利用して、母はとりつかれたように、割箸で直径一センチ余りもある青虫をつまんで、バケツの石油の中に捨てていた。もだえ苦しむ青虫を私はじっと見ていた。クルミは、近所中に配られ、蒸しパンの味を複雑なものにした。

四年間ほど、母は結核で寝たり、療養所に入ったりしていた。その間、私は親戚に預けられたり、姉の背におぶわれ姉の教室の後ろのゴザに座り、学校の兎と遊んでいた。父に連れられて保育園で一日を過したりしていた。その頃の庭は、まだ増築されていなかったから、坂あり、凹地ありの、起伏に富んでいた。坂に洗面器を置いて、

その中に座って転がる無限の繰り返しで楽しかった。

母が元氣になった頃、受験の波が我が家を襲った。兄と姉の高校受験が始まったのだ。家に、三畳と四・五畳の部屋が増築された。三畳には二段ベッドが造りつけられた。

私はいつも、早くから二段ベッドの二階に寝かされ、兄姉の受験勉強を邪魔しないように、いいわたされていた。十時頃になると、特製のプリンやお好み焼、ちよっとした茶菓子が、兄姉の部屋に届けられた。そのときが、母と兄姉の語らいの時間だった。いつも、そんな光景を眺めながら、菓子目当てに、その時間に私は眼を覚ますふりをして、叱られた。大人になると、夜食が食べられる——それがささやかな私の夢だった。

冬には、近所の農家から杵を借りてきて餅をついた。木々の葉は地の土と化していたけれど、なぜか、庭が楽し

かった。

大きいものがない、と、母は外国製の大きなストーブと、米軍払い下げのデスクを買った。両方とも中古だが、たしかに、その大きな机は、兄、姉、私と受け継がれて使われた。ストーブは、いつも焼き芋や煮物の鍋の香りで、皆が集まる場所であった。

庭でたき火をして、転んだ私は足に大火傷をした。牛乳運びの途中で姉は交通事故に会った。外傷の絶えない一家であった。そして兄姉喧嘩の絶えない一家であった。

そんな家を囲む、老舗の丘である桜丘も当時は農村の一角だったのである。麦畑の麦で笛を作り、サツマ芋の葉で首飾りを作り、トウモロコシの毛を人形の髪とした。兄と姉は自慢気にトウモロコシ泥棒の話をする。近くの馬事公苑で馬にのった。緑地でボールを投げた。

家は再度改築され、わが家に洋間が

誕生した。ステレオセットが置かれ、ビニールレザー張りの家具が置かれた。

子どもが大きくなる度に、増築を繰り返したが、いつでも桜の太木やいちじくの木は生き残ってきた。父が、遠すぎる通勤のため、環七を使えば楽になる、と買った軽四輪の自動車の駐車小屋も、木張りのものであり、いちじくの木をよけて父が自ら作りあげた。

果樹はあいもかわらず、私たちの庭の中心だったのである。台風の度に、雨漏りを気にし、窓に板を張るとき、一家は結束した。私は喧嘩の種であった。家中をひきずりまわされるほど怒られもし、裸のまま外に放り出され、部屋が汚ない、と部屋中のもが庭に投げ出され、泣きながら拾ったことが何度もあった。

しかし、十三年目の訪問は、無惨だった。

表畑はどこにもなくなっている。

私の家は、隣近所の家々の表札を見

て初めて場所を納得するほどに、影一つ残っていないかった。大きな桜の木も鬱蒼と茂っていた果樹たちも、一本残らず消えていた。坂あり、凹地ありの八十坪には、土が盛られ、平地になられ、左右の家よりもひときわ高く盛土されて、二軒のブロック塀囲いの家になっていた。かつて、お隣さんだった人の庭から、その二軒をのぞいてみると、庭は小さく、小さな庭木がほんの少し植えられ、きれいすぎる芝生が小さな空間を埋めていた。玄関にはお定りの松。

老舗であるはずの桜丘の生家は、新興住宅地の大泉学園町の、建て売りのわが家と、まるで同じ造りの二軒の家になっていた。地価の高い桜丘の八十坪を売るより、四十坪二軒にして売った方が儲かるのは当然である。

癌の治療費を、と願ってやむなく売った母が、生命を削りながら育てた桜やクルミ、いちじくは、静岡あたりで

植林されている松に変わって、その生命を共に終えてしまった。

建て売り住宅は、一見豪華である。

何度も増築したバラックとは比べものにならない。しかし、無駄な空間だらけのあのバラックを、合理的に、無駄なく配図された建て売りに移り住んだとき、どれほど懐しく思ったことか。

けれども、大泉の家に引越したとき、母はポツンとつぶやいた。

「床の間や、長押のある家にあたしが住めるなんて——」

その四カ月後に、彼女が生命を落とすとは、誰も予感してはいなかった。

あのとき、庭の世界、家の世界は、私の中でガラガラと崩れ、私の居場所はどこにもなくなってしまったのではないだろうか。その後十三年間、建て売りの家に住んで、とうとう、私の家、という実感をもてずに、私はこの甲子ハイツに移ったのである。

(つづく)

オットどいっい

粗大ゴミ予備軍の生態記録をとろう！

夫婦ゲンカ

我が家の場合

愛知県知多郡 伊藤 智子

私「やっぱり山口百恵の方がよかったわヨ」
夫「絶対、天地真理の方がアイドル性があった」

事の起こりはテレビの歌謡番組だ。聖子も明菜もパツとしない、今ひとつひかれる箇所がないと感じている私は言った「やっぱり百

恵が最高だった」 百恵嫌いの夫がすぐさま

言い返す。「なんだあんなブスノ 彼女は朝友和の部屋から出てくるのをマスコミに見つかって結婚したんだぞ。あのまま芸能界に残っていたら、すぐボシヤってしまっただ。それを格好つけて引退しちゃって」

「仮にそうだとしてもいいじゃないの、自分の意志を貫いたのは立派だわ。それに比べて天地真理の品の無さは何よ。低く上向きの鼻唄の下手さ、カムバックしても全然売れないカッコ悪さ、みっともないいったらありゃしない」

「言ってくれたな、アイドルのキャラクター

商品として、学用品や自転車を買ったのはピンクレディーが最初じゃなくて、真理ちゃんが一番号なんだぞ」

この調子でけんかはえんえんと続いたのである。その夜から三日間、夫は私と話をしなかった。「おはよう」といってもツーンと横を向いたまま、私も意地になり話しかけるのをやめた。四日目、子どものことでどうしても話をせねばならぬやと元通りに。

普段はごく普通の夫婦なのである。だが、こと芸能界に関することになると衝突する。小川知子が別れたのは仕事をやめなかったせいだ、いえ林与一がマメすぎるのヨ、愛染恭子ってすごいわア、美人なのに惜しげもなく脱いでかせいで家を建てたんだって、アホか、所詮ストリッパーじゃないか、いいじゃないのストリッパーだって……。こんな類のけんかはしょっちゅうだ。その度に間にはさまった子どもは右往左往している。暇なのか、詮索好きなのか、その方面の興味の示し具合はかの林真理子をしのぐと自分では思っている。夫三十四歳、私二十九歳である。

わいわいガヤガヤ

新潟でガンバっていますノ

新潟県新津市 柳本 綸子

災害特集の一八四号、新潟の原稿が載って
いなくてドッキリノ ガックリノ

全然投稿が集まらなかったのでしょうか。
私が最後まで責任をもってやれば良かった
と後悔しております。

私は今、親子劇場にかかわっていて、良き
友が得られそうです。市民がお金を出し合っ
て運営している病院の先生方の奥様たちが中
心になって、やっている活動ですが、新津市
に文化会館がないので、何とか作ろうとが

ばっています。地道な活動ですが、何とかが
んばるつもり。

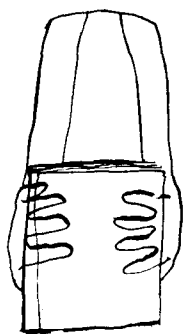
栄養士の仕事もポツポツはじめました。同
年齢の同じ立場で、考えていることが同じよ
うなので、その人とがんばろうとしています。
今年の市の健康展も二人でがんばりました。

文化の日ということで、新潟の文化という
ことを考えました。文化程度の高い知識人は
皆中央へ行ってしまうので、ひっぱってくれ
る人がいない。だから、文化程度を考え、憂
い、がんばってくれるリーダーがいらないから、
健康センターも文化会館も後まわしで、武道
館みたいなものはすぐ建つけれど、「音楽み
てエーなんもイラネエー。演劇？ テレビが
あるがネ。本物の良さ？ あげんもんはアカ

がやるもんだがネー」とくる。

でも誰もがやらなかったら、いつまでたっ
てもできない。一人で怒り狂ったって仕方
がない。浮き上がるだけ。すぐくすぐく地味な
やり方しかないこの歯がゆさ。わいふパー
ティーがあるとか、皆と会って活を入れてもら
いたい。楽しみにしています。

話は連うけれど、「わいふ」の表紙（はば）
全員の意見？ モダンといえはモダンなので
しょうけれど、どうもなじめない。ナウイ感
じはするけれど、「わいふ」の中味があの表
紙のイメージに向かっていくのではないか……
……と思ったとき、アーもう少して私も落ちこ
ぼれていくのでは——という懸念がしてくる
のです。全く落ちこぼれ専業主婦だった私を
すくい上げてくれた「わいふ」が、どこかへ



行ってしまうのではないか……私なんてもう書けないと思ってしまった日がないように。

グチばかりでも困るけれど、平凡な悩み苦しみの中で、私にもできることがあるのかもしれない、とちよっぴり考えることができる舞台の本であってほしい、と切に思うのです。

ひさしぶりに軽しい気持で原稿書いてみました。またお会いできる日を楽しみに。

夫婦のかお

神奈川県小田原市 鈴木 啓

私、最近自分の顔がとても良い顔になったと思います。

といっても美人じゃないし、お金のかかった顔じゃありません。

パーマをかけないストレート髪には白髪もまじり、化粧品もほとんど安物ばかりです。でも精神的な満足感があると、女はいい女に

なれるのかと自分では思っています。

しかし結婚当時は毎日が喧嘩の連続でした。気が強く自己主張の強い私は姑の意見もすなおにきけず反発する。

それに義姉がからんで、主人にとっては家庭はいこいの場ではなかったのです。

今、考えると、姑にも悪い嫁だったと反省しています。もう少しいたわってやればよかったのです。

酒をのみ毎晩おそく帰ってくる主人をせめる私は、主人になぐられ、けられたことも何度かあったし、別れ話も毎度のことでした。

それに長男を急性自家中毒で死なせた時、「お前が殺したんだ」とも言われました。

しかし姑が長わすらいの末、死んでからは、つきものが落ちたようにわが家は平和になったのです。

あらそいの多い家には人は寄りつきません。陰気な家にだんだんと明るい太陽があつてきたのです。

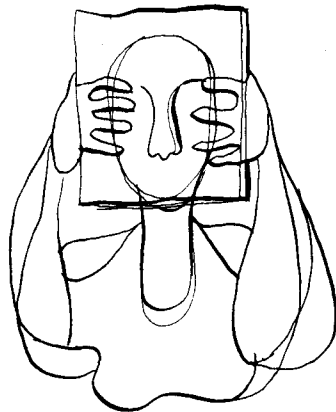
もともと姑にやさしかった主人が、その分を私にやさしくしてくれるようになったので

す。

はやい主人の帰宅には家族の対話があり、息子二人は何でも主人に話すし、私は高・中学生の息子を持っても手をやいたことはありません。

あの当時、ごたごたのつづいた時からみれば、今は夢のような気がします。

不思議なことに、私は細面で主人は丸い顔なのにとてもよく似ていると人に言われます。そして白髪まじりの、中年の主人の顔も近頃、とてもいい顔になったと私は思っています。



関西時代からの読者です

兵庫県姫路市 遠藤 敏子

はじめてお便りいたします。

私が「わいふ」とはじめて出合ったのは、まだ編集部が関西にあり、誌面も素人ぼさいっばいで、表紙に季節の花が描かれた白・黒の小冊子でした。

それは確か昭和四十年代のはじめで、水仙の花の号からのおつきあいです。one-way communication と言え、今では私にとって、「わいふ」&「WIFE」は、私自身の一部のように思えて愛しさを感じます。

当時の編集長は高木由利子さんでした。お



世話下さった方々、現在どうしていらっしゃるでしょうか。私も当時は子育て最中、閉鎖しがちな生活に風穴を開けてくださいまして毎号手元に届くのを楽しみにしていました。温故知新という言葉もあります。当時の方々、もう一度誌面でもお目にかかりたいと存じます。

長時間スーパーは 住宅地に必要か？

神奈川県藤沢市 萩原 幹子

私の家の隣の八百屋が、AM七時～PM十一時までの長時間スーパーに店替えをした。朝七時に店を開くために、五時より仕入れの車が入りし、夜十一時に営業をやめると、十二時半頃までかたづけたり人や車の出入りでざわめいている。敷地一杯に建てられた壁の薄いその建物は私の家と文字通り軒を接し、中の様子は雨戸を締めても手に取るように分かり、また、境界ギリギリに置かれた空調のコンプレッサーは止む時がない。付近には建

物は少なく、直接の被害は我が家のみだが、このような状況を私共は無条件で受け入れなければならぬのだろうか。先輩諸姉の御判断を仰ぎたい。

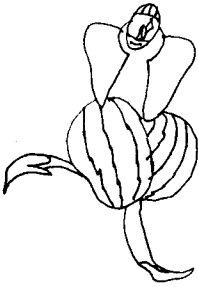
本誌の「ロックよ静かに流れよ」はとても読みごたえのあるものだが、主人公達がアルバイトしているお弁当屋のことが、私には少し気になる。朝六時前より夜十時までの営業もしくは作業時間は、私共の隣のスーパーよりはまだまだしだけれど、近隣に民家などないのだろうか。

時間を区切って自分の都合のよい時に働けるというのは、働く者にとっては良いかもしれないが、四六時中それに付き合わされるはたの者はたまらない。日が落ちたら休み、日が上ったら働くという、人間の生理に反して



まで営まなければならない仕事だろうか？
また十年前の石油ショック当時、街路灯までも節約し、有限の資源を無駄に使わないようにと努めた日々が、嘘のように思える資源の無駄使いではないだろうか。

長時間営業スーパーは全国どこにでもあり、増えつつあるようだが、全くの住宅地にこのようなお店が必要とは、私にはどうしても思えない。お金も上げのためだけに、多くの犠牲を周りの者に強いていると思えない。それとも騒音で睡眠を害されたり、家族との団らんを阻害されたと思ったり、たいした意味もないのに、深夜までお金のために働く人間を不健康に思ったりする私のような人間は、時代遅れなのだろうか？



クリスマスリースを飾りながら……

神奈川県横浜 市 酒井智恵子(53歳)

クリスマスも近づき、恒例の玄関に飾るクリスマスリースを作り出した。庭のひばの葉をドーナツ型に整え、上部に赤いリボン結び、松かさをつけながら、私はふと少女時代を思い出した。

あれは確か昭和十四、五年の戦争中とはいえ比較的内地はのどかだった頃、冬になると近くの松林へ松かさ拾いに行った。勿論、逼迫して来た燃料の足しにする為で、かまどでそれを燃やすと、脂分の多いせいか、シューと炎が出て良い燃料になった。籠にいっぱいに入れた松かさを持って帰ると、母はあか切れの手を拭き拭きのぞきこんでは、うれしそうに「ありがとね」と笑ってくれた。そんな母の笑顔をみたさに、よく家の手伝いをしたものだ。

先日、市の公報で子供の小遣いの特集があ

った。お手伝い、テストの成績、忘れものカード、読んだ本のページ数に応じてと、親もいろいろ工夫している様だが、何かをすれば、代償に小遣いというのはどういふものだろうか。私などちょっと考えこんでしまう。家の手伝いをすることや、忘れ物をしないこと等、至極、当然のことであるし、読んだ本のページ数でその額が増えるのであったら、子供は金目当てに勉強したりすることになりはしないか。当り前のことが当り前でなくなってしまう。

子供の要求は成長に比例して大きく、かけひきも上手になるのだから、その内、親は応じられなくなるのが落で、手伝いでも良い成績でも、親に報告に来た時、心から喜んで、笑顔とほめ言葉を与えればよいと思う。いろいろ現代は子育てが難しい時代ではあるらしいが、昔も今も根本的には変わってはいまい。どういう形で与えるにせよ小遣いは少なめにと忠告したい。

子育てもとくに卒業した自分だが、クリスマス作りは、私を遠い昔に誘いこみ、

今はもうこの世にいない母のやさしい笑顔を思い出させてくれた。と同時に、小遣いの与え方を考えるよい機会でもあった。

私の劇的体験

埼玉県所沢市 柏木 輝子

ラジオの聴取者参加番組で、出演の主婦がよくやっていますよね。

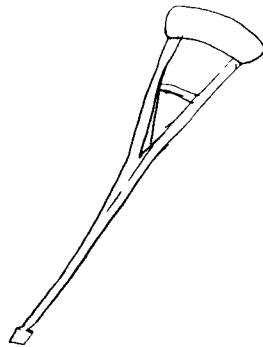
「○○ちゃん、おみやげ買って帰るからね」

「××さん、聴いてるわ、私よオ」

あのスタイルで私も一席。

「日本校正者クラブの皆さん、お元気ですか。幹事の柏木です。たまにはゼミや会場に出て来て下さいねエ」

わいふにクラブのメンバーの名前を発見するたびに、私もいつか投稿をと思いながら、仕事、家事、子育て、もろもろの雑用、間隙をぬって必死で遊ぶ——というパターンのみまずと読み手専門できてしまいました。二



百人程度の親睦団体ではありますが幹事役もけっこう忙しく（『中年主婦層を代表してさっそう登場オパンの星』などと自己宣伝はなばなくデビューした手前、当分やめられないのです）、いつになったら原稿を書く余裕が、と嘆きつつ——なにせ、ゆくゆくは投稿の常連になり、用もないのに編集部にいりびたって鼻つまみになるのが夢でして——いつまでもこの生活が続くものと信じて疑いませんでした。

ところが人生一寸先は闇、昭和五十八年十二月十七日午後二時五分、バイクに乗っている交通事故に遭い、救急車で病院へ運ばれるというドラマチックな経験をしたのでした。営業用ワゴン車が無理な追い越しをかけてきてバイクに接触し、歩道との沿石に挟まれて転倒したものです。十センチ近く横に裂けて中のカネの部分のぞいているヘルメットをあとで見た時は、心底ゾッとしました。右鎖骨骨折、全治二、三カ月かかりそうという診断です。

相手は、会社の配送員をして女手ひとつで子供を育てる中年婦人、現場検証や事情聴取などで警察からこっぴどくしばられたらしく、疲れきった風情で詫言われると「いいえ、わざとやった訳ではなし」という言葉がすんなり出ましたが、とはいえ、固定帯を上半身にガッチリはめられ、ことに最初の一週間は、身体の自由がきかないのが情けないし、じくじくと痛むので、つらくて泣けてきました。しかし、人間万事塞翁が馬。思いがけなく与えられた長い休暇を有効に過ごさなくては

と氣をとり直すのが私のけなげな、かつセコイところ。

丸五週間たった今日（二十二日）現在の現実的な成果は、吉川英治文庫の『三国志』（全八巻）を読破したこと。仕事仲間のMさんがお見舞にくださったもので、クリスチャンの彼女らしく、「神が、より大きな禍をくだし給ふために、このたびのことをお計らいになったのでしょ」と書き添えてあり、不思議に心にしみました。

思想、宗教には無色透明な私ですが、日常生活を突然断ち切られてみると、運が悪かった、だけではかたづけられず、人智を超えた存在の力が働いたからではないか、という考えに傾くのです。仕事で承らくキリスト教の著作集や仏教誌にかかわっているせいかもしれません。考える時間をたくさん与えられて来し方行く末に充分想いを馳せ、これからの人生如何に生くべきかという命題とじっくり取り組むと、来るものは拒まず式で取りこんできた種々雑多な人間関係（仕事先も含めて）を見すえて、大切にしていきたい、それなり

につきあいたい、切り捨て、と振り分ける作業まで出来てしまいました。見ないようにしてきた部分まで見えてくるのです。

元来、頭の回転がゆっくりしたタチですの
で、心にじんわりと発酵しつつあるものをまとめて結論に導くまでには時間がかかりそうですが、このたびの事故はいろいろな意味で例えば就職、結婚、出産と同格の、自分史に残る画期的な出来事ではありません。

それにしても、長年の共働きで、夫や子供達と上手に家事分担してやってきたつもりでしたが、まだまだ「自分がやらなくては」の思いこみが強かったようで、「よく協力してもらって頭があがらないわ」と口では言いながら、怪我が治っても彼らの役目として残しておきたいアレコレをすっかり心にメモして
いる小賢しい私です。

突然話題は変わりますが――。

田中喜美子様。

一年前にお目にかかった折、草柳大蔵氏の
一連の女性論について感想を書きたいとおっ

しゃったのを記憶しているのですが、いまだ
誌上に載りません。実は私め、その内容にと
ころどころ反発しながらも愛読している屈折
した、かくれ草柳”でして、ウーマンリブの
最右翼のお立場からの田中さんの草柳論を案
しみに待っているのです。時間のとれた時で
けっこうですから、なにとぞよろしく。

質問・冷凍野菜のビタミン は？

東京都武蔵野市 山本 真理

当方共働き、二歳の娘一人。従って夕方の
一時間は戦争並の忙しさ。いかに手抜きする
か、ということで、まず野菜の下ごしらえカ
ットの為、冷凍野菜を愛用しています。調理
済みの冷凍食品は添加物が不安なので、避け
ていますが、素材ものならと思い冷凍カボチ
ャ、インゲン etc を使っています。そこで心
配なのは、肝心のビタミンは冷凍加工によっ
てこわされていないかです。味はともかく、
幼児をかかえる身では栄養が気になります。
どなたか、教えて下されば幸いです。

（元・松本をきえ）

観たり聴いたり

おいしいとは限らなくとも何でも食べてみよう
各種イベント・感動と失望の記録

「ドリスとジョージ」を観て

神奈川県川崎市 吉村きよみ

とうとう念願の芝居を観ることができました。このドリスとジョージの二人芝居のことは、二年前に、偶然ある雑誌で、著名な占星術師がエッセイに、「ただお互いに家庭があるというだけで他のひとを愛してはいけないというのは、

どこか不合理のような気がする」「人間は男も女も年と共に成長するのだ」「『浮気』だの『不倫』だのという言葉は基本的に変化する性質を持っている愛の形態を、はめようもない法律の枠におし込めようとするところから生まれて

くる」等、書いてあるのを見て、そのころ進行していたみずからの恋と重ねあわせ、大いに共感を感じたものでした。

ストーリーは、レストランではからずも意気投合した二人が、一年に一度、同じホテルで会いつづけるというもので、なんと、それを、二十五年間も続けたという物語です。

お芝居の中で、二人は、共々の

家庭のこと、それぞれのつれあいの良いところ悪いところを、きわめて、あっけらかんと、率直に話すのです。二人は、男と女でありながら、互いを一人の人間として認めていたのです。一年に一回の逢瀬でも、お互いのことを、信じ折り、心の支えとなるような関係、こういう関係こそ、おそらくは、ニンゲンの男と女の理想でしょう。私は、芝居の終わった瞬間に、ふとこの二人には、嫉妬というものがないのだろうかと、思いました。それぞれに幸福な家庭を営みながら、生身の男と女は、もう一方の手を求めずにはいられない欲ばりな生きものなのでは、ないでしょうか。とにかく二時間半、充実した素晴らしい時間を過ごしてしました。

マジの発言

黄色い声、赤い声——五色の声でも申そう！

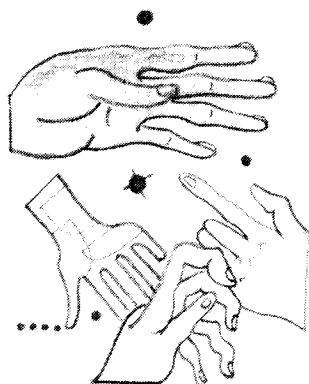
私観風体抄

白い杖の人

東京都稲城市 久米 昭江

こんな時刻に都心にいるのは何年ぶりだろうか、と昔へもどったような気分になるのも、家で待つ二人の子供の事が頭にチラつき出したら、粉みじんに流れ去ってしまう。誰よりも早く電車を飛び降り、誰よりも早くエスカレーターに飛び乗り、そうして仕事を届けた帰り道のこと。

「新宿 新宿」電車のアナウンスと同時にドアが開き、またもや一番で飛び出した私の背の方から、キャーッと女性の悲鳴が聞こえた。もう酔っ払いの出る時間か、と振り向くと、数人の若い女性が開いた電車のドアから、素早く遠ざかってゆくところが見える。皆が一斉に遠のいてしまったその中央に、



白い杖を持った男の人が立っていた。「お願いします。西口会館に行きたいのです」皆遠ざかってしまったのが分かったのだろうかトントンと白い杖で床をつつ突きながら繰り返している。「ウー」「イヤ」身を翻して去って行く若い女性達の姿が映る。私は、全身の血が一・二・三で頭に上ったような気がした。何という態度、何という心。私の足は、白い杖の方へ向かった。「どちらまでですか？」固い左手が、私の右肘を掴む。「西口会館へ行きます。京王モールを

抜けて、地下鉄の入口までで結構です」
と言われて初めて、私とは逆の方向だったことに気付いた。またもや子供の姿が浮かぶ。ごめんね、ちよっぴり遅くなりそう。つないだ腕も、ちよっぴり恨めしい。

「左へ行って下さい。京王モールへ入ります」そんな気持を押しつけるように、改札口を出るとすぐに、右側から聞こえてきた。

あたりの空間をくまなく照らす光のために、一瞬時間の感覚を失ってしま

う。間もなく午後七時。新宿は、誰もが足早に通り過ぎる。いつもは、私もその早さの一部となってゆくのに、今は違っていた。前から来る人にも、後から追い越して行く人にもどう体かわしていいのかわからなかった。

「人が多いですね。この時期はいつもこうなんです」

と歩にくそうにしている私を氣遣う声。

「そろそろ正面に駐車場が見えて来ませんか」狭い通路を抜ければ歩きやす

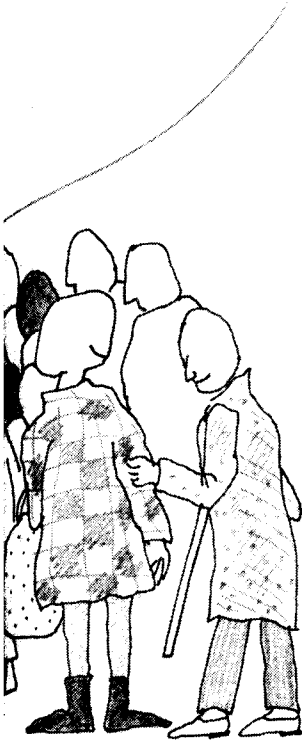
くなるだろうと思ったが、この中も人でいっぱいだった。人の流れをはずれて歩き出した時、

「交番が見えてきませんか。——そうですね、ちよっと左側に寄り過ぎていきます。もっと右側です」

「そう、この位。交番の右側奥の七八段の階段のところで結構です」

私は、白い杖の人と歩くのは初めてで、勿論この独特の手のつなぎ方も、いつかテレビで見たのを覚えていただけのもの。もしあの時の悲鳴が聞こえなかったら、後ろを振り向かなかったら、私はこの人を知らなかったし、一緒に歩かなかった。そして腕をつないだ時、してあげるんだという氣持だった。ちよっぴり遠回りになるけれど、西口から小田急線に乗ればいいんだから、と思っていた。

けれど、一緒に歩いているうちに、私は大変なことに気が付いた。何故こんなによく、周りが分かるのだろう。



『京王モールに入る』『駐車場が見える』『左側に寄り過ぎる』といわれるたびに、私は思わず声をあげそうになった。どうして見えているように、周りが分かるのだろうか。五感のひとつが失われた時、他の感覚は、それを補うべく発達するらしいが、その素晴らしい感覚に、ただ驚くばかりだった。全く新宿を知らない人でも、間違いない案内できるだろう。連れて行ってあげ



ると思った自分の思いあがり情けなく恥ずかしい。

「ここでもいいです。どうもありがとう」

七・八段の階段を降りた時、あつさりとその人は、私の肘を離れた。あまりのあつけないしぐさに、西口会館まで一緒に歩こうと思っていた私の、言葉をはさむ余地もなかった。階段を登りながら後ろを振り返ると、四十代ほどの婦人がどちらまで、と声をかけ、す

ぐに腕を組んで歩き出した。

私は、新しい靴を履いた時のようにうれしい気持ちになった。家へ帰って、このことを主人や子供に話そう。きっと私と同じ気持ちになってくれるだろう。

ママよかったね、と子供はいう。できるだけ早く、子供にもこんな体験をさせたい。学校に、いろんな子供がいたらいい。体の不自由な子も、元氣のない子も、地域に住んでいる子供達が、何の制限も受けることなく通える学校だったらいいのに。子供達は、その中で、何か大切なものを知り、一緒に成長してゆくことができる、と私は思う。

目を閉じてきれいに家の掃除ができますか。毎日のお使いができますか。一人で外出できますか。白い杖の人を見かけたら、一緒に歩いてみてください。い。

「習熟度別クラス編成」に思う

愛知県名古屋市長 岩田 和子

数年前、日本語以外何も話せないのに、一人でヨーロッパへ行き、二カ月近く旅をして帰ってきた。様々な経験をし、たくさんの人に助けられた、それはよい旅だった。

その中で学んだことの一つが、外国語を知ることの大切さである。

それまで私は外国語の授業を受けながら、それが外国では日本語のように日常話されているのだ、と感じたことは一度もなかった。けれどそのように生きた言語に接することによって、何か外国語を理解できるということがどれほど人間を豊かにし、つまりは自分にも社会にも役立つことかということとを、初めて知ることができたのである。この経験をもとに、今私は英語の勉強をしていて、心からそれが好きな

のだが、一つ悔まれるのはなぜもっと早く始めようとしなかったか、ということである。

私はその原因は高校時代の英語の授業にあると思っている。

受験校といわれていた私の出身高校では英語・数学の時間に限っては上・下クラスに成績別にわけられるのであった。たとえばA組とB組が対になると、それら約百人のうち平均より点のいい人が「上」クラスに、悪い人が「下」クラスに移動して授業を受けなくてはならない。この成員は一年間ほとんど変えられない。英語や数学は最も時間数の多い教科だから、これらの時間にクラスが分解してしまうと、クラス全員の和もそこなわれがちだった。それにこのような露骨な優劣の公表は、

友人同士わけへだてなくつきあう気持ちにわだかまりを持たせるものでもあった。学校側はこの能力別クラス編成については次のように説明していた。すなわちこうすることによって指導がゆき届き、全員の理解度が高まると。

この目的は「上」クラスに対してだけは達成できたようだった。それはそうだろう、誰だって落ちたくない一心で必死に勉強するに決まっているのだから。それに反して「下」クラスの人たちはもう半ばあきらめの境地で、やる気をなくしていた。英・数のどちらかが上のクラスならまだいいが、確実にに四分の一は英語も数学も「下」のクラスなのだ。そして実は私自身も下・下だった。

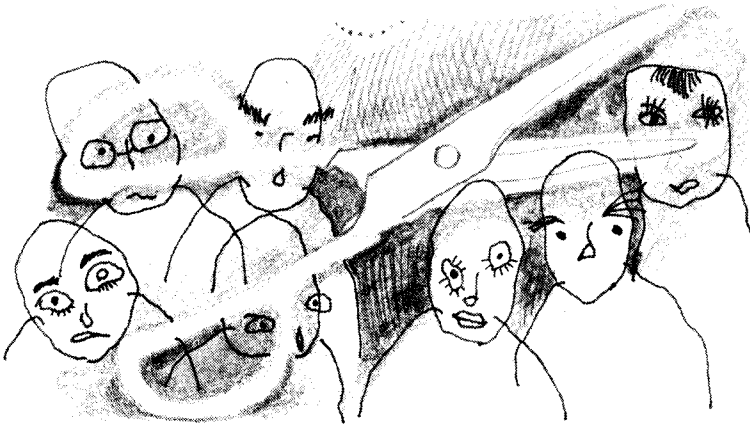
中学校までは数学はともかく英語はわりあい好きだったのに、高校に入ったらこのでいたらくで、半ば公然と劣等生のレッテルをはられているような毎日がみじめでやり切れなく、またダ

メな時は何をやってもダメなもので成績は全般に低下し、学校も勉強も嫌いになってしまった。

そしてこの時以来、ヨーロッパを旅した時まで、英語には恨みこそあれ、一かけらの愛着も感じなかった。それは今の私にとっては、時間と能力の莫大な空費であったのだ。何ともったいない！

先生の中には、「試練」という言葉をもってクラス分けを正当化する人もいるかも知れない。つまり劣等生になるとか、とにかく何事にせよマイナーな体験こそが人間を成長させるのだ、とか何とか。しかしそれは人間が人間に言いうる範囲を超えた暴言だ。キリストの逸話の中で、民衆が悪事をなした女に石を投げつけているのを見て、彼は「汝らのうち罪なきもの石もてこの女を打て」と言われたと伝えられる。

法律でもないのに人が人を裁くことはできないし、ましてや人が人に試練



を.....与えてやる権利などありはしない。私は自分の高校時代を私の内なる試練として止揚してはいるが、それは私が受けた側だからいうのであって、試練を与えてくれた学校に対してはその行為を断じて否定するものである。そしてその最大の理由は個人的なウラミツラミなどではなく、その教育的な無意味性にある。

ところで私は大学卒業後、小学校の教師になった。そして子供たちの能力差の幅たるや、試験を受けて入学してきた高校生の英・数の能力など比較にならないということを知った。だから教師がその教える対象を能力やタイプ別に分けて授業を行うことができた、どんなに能率的であろう、と考えるのもある程度はわかるつもりである。

しかしこの考え方に根本的に欠けているのはいかに子供とはいえ、それは心、とりわけ自尊心を持った一人の人間なのであって、決して機能性で評価

される機械ではないということだ。それを理解せずに習熟度の向上をはかるやり方を考えるなら、どんな方法であれ失敗するに決まっている。

私は人間は屈辱によって伸びないと思う。もちろん稀有な精神力のつよさを持つ人は「おしん」のように成功するのだろう。

けれど教育を最も必要としているのは、屈辱を受けて伸び悩むようなタイプの大方の人間なのではなからうか。教えたことがすぐにのみこめるような人間ばかりなら学校で勉強する必要などないはずである。

またもう一步この考えを進めて、学習能率だけが学校の最大目的となり、しかも差別的な学習方法を避けるとなると、最良の方法はパソコンによる生徒各自の自宅での個別学習であろう。そうなったあかつきには学校は集中的なプログラミングの場だけが必要となり、校舎も校庭も必要なくなる……。

いったいこんなことが信じられるだろうか、いや、これが理想的な学校なのだろうか。

悲しいかな、人間には全てにわたって能力の差というものがある。だからその一生を通じて他者と争いながら生きて行くのは、人間というより生き物の宿命のような気がする。階級闘争を克服したはずの共産主義国ですらエリートと非エリートという階層差がある、と聞く。

けれど競争に勝つこと、あるいは有利な武器を得ること（現在その最強の武器は東大を頂点とする学歴とされていて、他のものはほとんど評価されていないようだ）を人生の最大の目的として、馬車馬のように他のこと一切に目をつぶってひたすら走りつづける、そんな生き方を子供たちに強いることが理想的な教育であってよいはずがない。

むしろ大人になればいや応なくそん

な競争に終始しなければならぬ人生であればこそ、少なくとも学校だけはそれ以外の、人生にとって大切なことを教える場なくてはならないと思うのだ。

学校でなければ教わることでできない、人生を豊かに彩る諸要素はそれこそ限らない。友情、無償の行為、喜びや悲しみ、共感、年齢をこえた人間的な交わり……。これらのことを知る喜びがあればこそ、学校の存在理由もあるのではなからうか。逆にいえば、機械にまかせておいても達成できる学習効果の向上ばかりを問題にしてこれらを与えることのできない学校など、ないほうがましなのではあるまいか。

人間は一つの美しい思い出のために、人生の苦しい時期を何度か乗り越えることができる。学校とはそんな思い出を作りうる最大のものである。希うのである。

送りつづけたい、ささやかな連帯を！

神奈川県川崎市 田中 恵子

一九八三年は本当に選挙の年であった。四月の統一地方選挙にはじまり、初の政党名を記す六月の参議員選挙、

これに続く年末の衆議員選挙と、市民が手軽に政治に参加できるあらゆる選挙があったことになる。ひょっとしたら私の三十代最後の政治闘争になったかもしれないこれらの選挙に多くの仲間と、様々な経験をし、笑いながら、時にはちょっぴりがらにもなく涙をこぼしながら、新しい自分自身と日本の明るい未来と出会うために参加し、闘った。

そもそも私の政治活動への参加は二十年近くになり、この間には、寄せたり引いたりする波の様に当然強弱はあったが、ともかくも波ではあったのだ。清純無垢の乙女から今のオバサンにな

る迄、乙女には乙女の行動へとかりたてる思いがあり、オバサンにはオバサンの思想がある。

四十歳を前に、会った瞬間「これはイーズー」と思った男性から運よくすぐプロポーズされ、結婚へ。その男性との間に降ってわいた様なたった一人の男の子との平穩無事な生活がある。

私はこの二人の男性との生活が大好きだ。元氣な間外で働いて、彼らとの生活を大切にしたいと心から思っている。でもこの家族との愉快な生活は私の人生の目的だなんていうのは御免である。

一人の成人に達した女として、この安保条約下の日本のこと、多くの働く人々（勿論私も含む）の生活のこと、将来あるべき社会体制等々、バッチリ目を見開いて、行動したいと思ってい

る。そう遠くない昔、中近東のどこかの国の花嫁達は、結婚式の当日口の両はじに入れずみを入れるというしきたりがあったという。女だけにあるそのしきたりをやめさせるため、若い花嫁達は入れずみを拒否し、純白のウェディングドレスを自分の親の手によって血に染めた。それ以後このしきたりは徐々になくなりつつあるという。

今の私にこの娘達の様な勇氣があるか全く疑わしいが、名も知らぬ幾世代にわたる男と女達のこのような血と涙があって、二十世紀に生きる、私や私の仲間や家族があるということだけは忘れないでおこうと思っている。そしてできうるならば生涯を通じて、美しい人間達に対してささやかな連帯を送り続けたいと思っている。

（え・万谷陽子）

投稿ホットライン——笑う門には福来たる

ファミリー・イン・ブルー

知に働けば角が立つ。情に棹させば——ああしんど！

結婚に憧れる

二十一歳の従弟

M・N



ああ、世の中って、どうしてこう矛盾に満ちているのかしら。三十八歳の義兄がしっかり売れ残っているというのに、二十一歳、大学二年の私の従弟が結婚したいと言いつ出したのである。

主人の兄とは大違い（？）の、私の従弟は、沖田浩之君に似たハンサムな男の子。そのせいか、女の子がついてくる。実家が青森の彼、都内の大学に入ったのだけれど、相手の女の子も同時に都内の大学に入学して上京。彼の母親から、「同棲だけは、しないで！」ときつく言われ、二人は別々にアパートを借りてはいるのだけれど……。

年が近い私のことは、姉のように思えるのか、彼は安心して、遊びに来るとよくしゃべっていく。もちろん、話題は彼女のことはかり。「できたら、結婚したいんだ。子供は多い方がいいな。日曜日には子供と遊んでやるんだ。ポメラニヤンを飼ってね……」などと夢みこちで話す彼、まるで二十歳ぐらいの女の子が結婚に憧れているという感じなのである。

彼女の手のあみのセーターをしっかり着て、
て、尽くすタイプの人だと聞けば、いい娘な
んだと思うけれど、結婚生活の現実を知らな
さすぎる彼が不安だ。「結婚なんて、そんなお
もしろいもんじゃないわよ。束縛されるし、
これから、もっといい娘が出てくるかもしれ
ないじゃない」と私が言っていると、「どう
せ女子大生は主婦の敵だからね、Mちゃんに
は、わからないんだ。主婦になると、ずい分
さめちゃうんだね」とムキになる。

恋は盲目、何を言ってもムダだけど、二十
一歳の大学生が結婚ばかりに憧れていて、い
いのかな。他に目標ないのかしら。といっ
ても、義兄のように四十年近く生きていて、
恋もできないのも困るのよね。

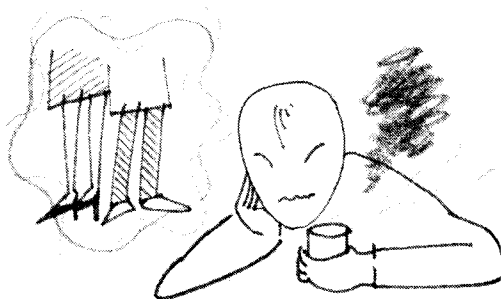
どうしてこう、私の身内は、ろくなのがい
ないのかと、なげきたくなるけれど、これが
現代社会の歪み、偽らざる男の結婚に関する
縮図なのかもね。私の手には、もう負えそう
にない。

親の心・子知らず

H・S

子どもの人生は子ども自身のもので親のも
のではないことはわかっているつもり。まし
て子どもの上前をはねるつもりはサラサラな
いし、二十七歳で外科医ともなればいつ結婚
したい彼女が現われても動じない覚悟はでき
ていたつもり。

大分前に、医師の仕事は責任が重いし多忙
で時間も不規則だから医師同士の結婚は難し
いようだといわれた時も、同条件で働いた上
での家庭責任を女に押しつけてはダメだ、二



人で分担しなけりゃそりゃ無理だと話し合っ
たこともあり、私が主婦問題や性差別に関心
を寄せて、社会を変えていかなけりゃ、と口
癖のようにいっているのを聞いていたはずな
のに、インスピレーションを感じちゃっ
たと紹介された彼女に、私は複雑な思いをい
だいています。

どう見ても、あなた稼ぐ人、わたし使う人
のタイプ。美人でしっかし者らしい様子だが、
そのしっかしは家の中をしっかし守りますの

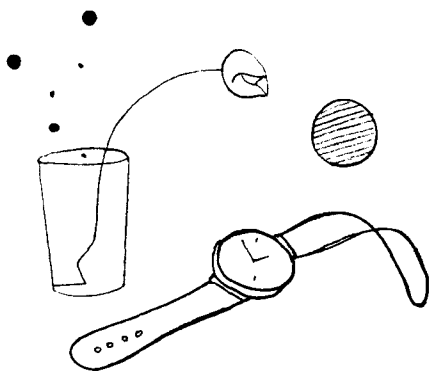
しつかり。趣味はと問えば、お茶を十年以上、あとは映画をみたり、大好きなのはショッピング、そういわれてウカツな母はよくよく見たら二万円もしそうな流行のブラウス、玄関の靴はと見れば、メイドインイタリー、これも万札二、三枚の品物と見えた。住んでる場所とは友人の父が所有の六本木のマンション、知り合った場所はデイスコ……。ネクラの母は一言もなし。——二千九百円のブラウスを着て、区消費生活展の百円の靴を喜んでる私と何と違う世界。

まだ結婚したいと息子の口から聞いていないけど、電話が連夜の定期便ともなれば、別に盗み聞きしているわけではないけど心穏かならざる日々です。

これでも、もしも、もしも、もしも、いざ結婚となったら「○○さん、我儘な息子ですがよろしく願います」なんて殊勝なこというのでしょうか。ア、古い女にはなりたくないもの。（女へんに古いは？）

幸か不幸か 子無しの身です

宮城県仙台市 本川もと子



僕の子なら東大ぐらい行くだろうけど（一生言うとなれ）、君の子でもあるんだからまず、アホやろなと憎まれ口をたたかれて五年、幸か不幸か未だ子供は授からない。

思えば、不妊クラブのメンバーから歓呼の声に送られて、大阪よりこの地仙台に越してきたのが昨年の五月。かの有名な東北大学病院の近くに居を構え、メンバーの期待を一身に受けて婦人科の門をたたく。月二回は大阪へ手紙でこちらの様子を伝える。ほぼ一年おきの転勤のため、各地の病院で同じような検査を一通り受けさせられる。（中には同じ検査を七回も）。

東北大では初日に鈴木教授による問診、「前の病院で一通り検査しましたか」「はい」「原因はわかりましたか」「いいえ」思ったより優しい声で笑いながら「じゃ全検査やり直し」これだけのやりとりをするためにえんえん四時間待ったことになる。周りは何組ものカップル、しまった、体外受精の相談日であったのか。と気がついてもう遅い。その日はそれで一日が終わってしまった。

以後、月曜日は避けて通うこと半年、結果は予想通り全検査異常なし。夫も然り。

私の周りにはこういう人が比較的多い。原因が発見できなければ治療方針も決まらないのであるから、単にどこも悪くないんだと、喜んではいられない。周りもどこか悪いのだろうと思って同情してくれるから始末が悪い。

「排卵誘発剤でもダメなの？」

「体外受精もあることだし……」

前者は、排卵が正常な人には、あの薬は必要ないことがわかっていない。後者は、まず卵管の詰まっていらない人は対象外であることがわかっていない。難なく子に恵まれたが故に、妊娠のしくみに無知であるこうした人々の慰めは、えてしていいかげんで、我々子なしのブライドを深く傷つける。

暮れに大阪で例のメンバーで例会を開いた。あの体外受精で一躍有名になって以来、熱狂的に東北大学にさえ行けばなんとなかなる、といちるの望みを託す人が全国にも多かろうと思うが、我々のようにどこも異常がない夫婦（医師によれば不妊者の二割）にとっては、

何の得もない。（もちろん該当する方々には朗報）むしろこちらのそれ以外の人々は、慶応大病院の話でもちきりである。

メンバーにもこんな話を話し、阪大は、京大は、と情報交換に余念がない。まさに同類あい憐れむの感ではあるが、一年で一番心なごむ楽しいひとときであった。

一九八四年はどんな年になるのか。マル高（三十以上高齢出産として母子手帳に押される）突入の年を思えば、東北の風雪が一層身にしみる。嗚呼、今年もまた、バカだのアホだの言われながらも、優しい義父母に支えられ、飼われる身分に甘んじる一主婦である。

（え・万谷陽子）



母親から見た山村留学の記録

文・こくぶんひろこ

智^{とも}よ、自然に学べ



都市化社会の中で

「きのうは吹雪いていたんですって。晴れてよかったわねえ」

同行の稲葉敬子さんがはずんだ声でいう。

振返ると、朝日をあびた白銀の北アルプスが、まばゆいばかりの麗姿を連ねていた。十一月半ばというのにこの山道は、雪で囲まれ、ガチガチのアイスバーン。運転している稲葉氏が、山並の美しさにおもわず車をとめたところ、スリッパして動けなくなったほどだ。

私たちはいま、四月からこの八坂村に山村留学をしている息子たちに会いに行くところである。八坂村は、大糸線、信濃大町から車で十五分ほど、長野県の北アルプス山麓にある、標高六五十メートル、人口千六百人の過疎村

である。ここに財団法人「育てる会」が「育てる村学園」を開設して八年目。現在三十九人の留学生在がいる。ここで子どもたちは、一カ月のうち三週間を農家の里子として暮らし、一週間を会が運営する野外活動センターで共同生活をしながら、村の学校に通うのである。

さて、私たちが手にするバッグには、それぞれ、息子たちからきた招待状が納まっている。私の息子、智（とも）からとどいたそれには、「収穫祭 日十一月十九〜二十日 場所 やまなみ山そう もう初雪がふりました」とあり、別に「収穫サービス 果実酒交かんけん」と書かれた厚紙の切れはしが添えられている。

収穫祭は、山菜やきのこを集め、果実酒を漬けこみ、子どもたちが春から準備してきた留学生生活最大のイベントだ。きょうはその第一日。村人も招いて、親子ドッチボール大会や親睦会が

ある。そして明日は、子どもたちがつくった稲を親子で脱穀し、研究発表や劇を見、夜は子どもたちの屋台も出る会食会……と盛りだくさんの一日だ。

つづれ折の山道を登って野外活動センター「やまなみ山荘」につくと、すでに到着していた親たちのにぎやかな声で迎えられた。入口には、ガリ版刷りのプログラムが積まれ、テーブルには、子どもの学年と名前、漬けた木の実の名を記した果実酒のビンやみそ、じゃがいもなどがズラリとならび、みごとに実った黄金いろの稲穂とともに「米のつくり方」「野菜のつくり方」など、子どもたちの研究発表が壁に貼られている。二階から三階までの階段や廊下の壁にも、小学二年生から中学三年まで、ひとりひとり個性あふれる研究発表がビッシリと貼りめぐらされていた。

あった！ 二年生の我が息子のは、「十月のきのこと木の実」と題された

大きな一枚のほかに、「八坂のしぜん」

「八坂の学校と都会の学校のちがい」と、三枚もある。前々日、かぜをひいて学校を休んだので、寝床の中で一気にこの二枚を書きあげたのだそうだ。

荷物を置いて食堂に入ると、「育てる会」理事長の青木先生が、満面、これ笑み、という感じで迎えてくださった。

「お母さん、研究発表を見ましたか。

どの子のでもいいでしょう？ あれは全部体験なんです。体験から出たナマの言葉なんです。智なんか、キラッと光るものがありますねえ」

思わず、目の奥が熱くなる。二学期からは、運動会その他、ほぼひと月おきに出かけてきたが、そのたびに、びっくりするほど大人びて、たくましくなっている息子。小学校まで往復八キロも歩く山道。四人のきょうだいたちと暮らす農家での生活。みそをつくり、田植えをし、畑をたがやし、電気がガ

スもない廃屋生活も経験した。わずか七カ月の間に、彼はどんな大きなものを得たのだろうか。

子どもたちはいま、ドッチボール大会の会場となる村の体育館で、親たちの来るのを待っているという。早く会いたい！ 少しはに cand ああの顔に、今度はどんな変化があらわれているのだろうか。

雑誌「ファミリー」の記事 との出会いから

智が三歳半ばをすぎた頃だったと思う。友人の家で目にとめた「ファミリー」の記事が、いまの私たちの暮らしを決めた。

「殺伐とした東京に住んでいて、ホッとするようなちょっといい話を聞いた。それは、長野県八坂（やさか）村に、都会の子供たちが住み、豊かな自然にかこまれて暮らしている山村留学

生の話だった。『山村留学』と、八坂村。それは初めて耳にしたことばと地名でもあった。

子供たちだけが田舎に移り住む、という話を聞いて、戦争中小学生だったひとにとっては、学童疎開というにがい思いを思い出すかもしれないが、まったくちがうものだ」

こんな書きだしで始まるその記事は、親元を離れて農家で暮らす留学生たちの一日をイキイキとレポートしていた。息もつかず読み切った私は、「決めたわ！ 私、智をここにやるわ」と興奮して叫んでいた。

なにごとか、とあわてて読み出した同年の子を持つ友人はいう。

「なにも一年なんてやることないじゃないの。もう少し大きくなったら、夏休みにうちの親戚の牧場へふたりをやりましょよ」

いいえ、だめ。少なくとも一年は田舎に住んで、自然の四季を知らなくて



はだめ。

目の前に、私が五歳から一年半を過ごした山奥の風景が浮かんだ。かやぶきの家。十メートルはあろうかという杉の木。馬小屋に、夜は暗くてこわい風呂場や便所。母から無理やり引き離され、何日も夜昼泣き通した私だった。飲み水は下の井戸から桶をかついで汲み上げ、雨水をためてお風呂をたく暮らしは、都会育ちの私にはつらかった。それでもいまのいまにいたるまで、私のイメージの源泉はあの山奥に暮らした歳月にあるような気がしてならない。黄色い春の花々、あけび、くわの実、野いちご、ぐみ、ぜんまいの綿毛をためてつくったマリ、脱穀のあとのわたばを家にして遊んだままごと……。そして凍った急坂を泣きながら這いのぼった冬の厳しさも忘れがたい。

子どもはできるなら、自然の中で育てたい。思いきり山野を駆けめぐらせ、自然の素晴らしさも、厳しさも教えて



やりたい。そんな思いが私を、だれも知らない田舎でたったひとりで出産という、いま思えば無謀ともいえる行為に駆りたてたのではなかったか。

小学生になったら、山村留学にきつと出そう。たとえ一年、このいとしい笑顔が見られなくても、あの美しい山なみを眺めて暮らす日々を与えてやろう。

それが、秩父の田舎で悶々とした末に、都会暮らしを選んでしまった私の新しい決意だった。

秩父のアパートで考えたこと

昭和五十年。私は、初めて得た我が子を抱いて、埼玉県秩父の小さなアパートにいた。農家の庭に建てられた二DK。コピーライターとしての仕事もやめ、母子ふたり、蜜月のような日々を過ごしていた。父となる人は、生活

とともに出来る状況ではなかったのだ、あらゆる決断をひとりでしてここに来た。その時点では、ふたりの間で、結婚のことも、養育費のことも話題にのぼらなかった。明治生まれの父、学者として堅実な家庭を築いているきょうだいたちに迷惑をかけたくなかったし、大きなおなかをさらして仕事をしたくはなかったので、出産はだれも知らないところでひそかにしたかった。そしてそれ以上に、三十五歳にして初めて宿った小さな命を、都会の喧騒を離れた澄んだ空気の中で育てたかったのだ。けれど実際は、出産もひとりではなかった。東京の友人たちや福島姉が駆けつけてくれたし、大家さんの一家や、アパートを世話してくれた不動産屋のご夫婦が親身な世話をしてくれた。五月三日、三日間の遅々とした陣痛に耐えて戻った病室で、窓から見た新緑の美しさをいまも忘れることができない。

子どもはまるまるとしたおしりを日にさらし、ほほは赤く、私の望み通り田舎の子らしく育って行った。アメリカ行きの費用になるはずだったお金と、ここに来るまでの数カ月必死に働いて得た報酬と、月に一度郵送でする仕事とで経済状態もまず安定していたから、私はのびのびと子育てに専心した。窓から見える武甲山のおだやかな山なみ。近くには巡礼がまわるしっとりとした小さなお寺がいくつもあり、乳母車を押してどこまでも散歩する毎日だった。

そして一年。東京から仕事の依頼がくるし、私は大いに悩んだ。東京へ帰れば、スモッグに汚れた空気とコンクリートと、仕事に追われてあわただしく人に預ける暮らしが待っている。この子のために、どこか空気のいい地方に新しい職をみつけ、ふたりで静かに暮らすべきではないのか。

以前、仕事をしたある地方の保育施設のことが頭に浮かんた。緑がいっぱ

いのひろびろした敷地。病院の院長婦人がゆめを実現したというあの育児センターで、子どもとともに住込みで仕事ができないものだろうか。

しかし、結局のところ、実績のある仕事への選択が勝ちをしめた。しかも、ひよんなことから友だちの世話で決まった住まいは、六本木駅から七分。都会の下真中といえるところだ。自然の豊かさのある暮らしをどうしたら与えてやれるだろうか。

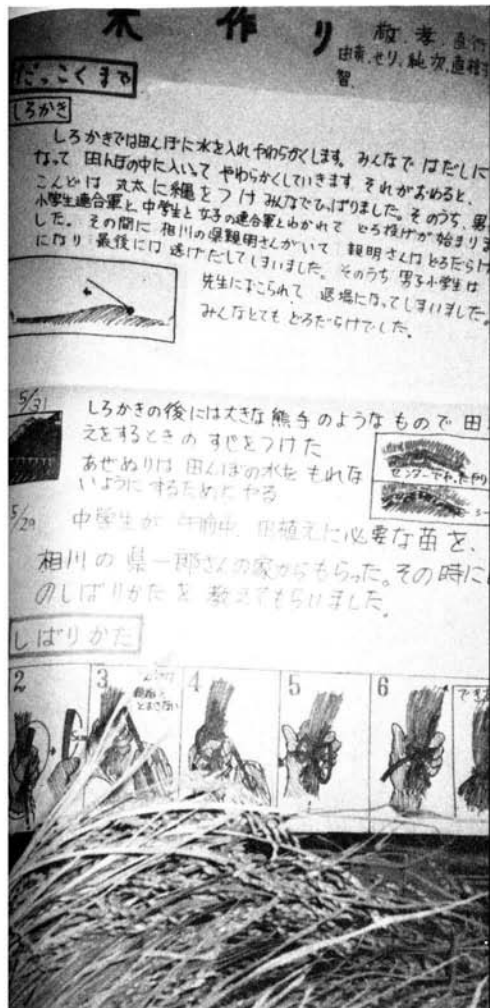
六本木の子

私たちがいまも住んでいる麻布台のアパートは、都心にはめずらしく、樹齢をつんだ木と四季の花のある場所だ。地下道をくぐって、そのまま上がらずに道に出ると、不思議な風景があらわれる。袋小路の奥にならぶ四棟の古い洋館。ここは昭和の初めに建てられた

そうで、そのいわゆるアンティークなたたずまいから、スペイン村などと呼ばれていた。我が家はそのいちばん奥の二階。玄関までの路地にはしっとりとした土があり、常緑樹が並び、雪の下が白い花を咲かせる。ここから保育園と会社を往復し、そのうえ子どもが寝てからも仕事をするというあわただしい生活が始まった。それでも、よちよち歩きの子どもを追いかけて、私はこまごまと話しかけた。

「ホラ、お花がさいてる」「新しいはっぱがでたでしょ」「鳥さんがきた」親が気をつけてやらなければ、四季の変化など素通りしてしまいそうなのが都会の暮らしなのだ。

安心して放っておける原っぱなどはないし、都市化社会は容赦なく子どもに迫ってくる。比較的自立心のある子だったから、小さいうちから、よくひとりで公園に出かけたけれど、この袋小路にさえ車はひっきりなしにはいっ



てくるし、自転車に乗れるようになってからなどは、帰ってくるまでハラハラしてはならない。保育園での一日も、子どもたちが「たんぼ広場」と呼んでいた空地が使えなくなつてからは、運動不足で、ありあまる体力をもてあましている。

保育園も終わりに近づいた頃、山村留学を主催する「育てる会」をさがし出し、入学前の春休みに会の行事に参加させた。(この会では、山村留学のほか、春、夏、冬、幼児から参加できる様々な行事を行なっている)山村留学は二年生からと決めていた。一年生からでは、親子とも、あまりにきつい体験ではないかと思つたからだ。それに、安心して帰ってくる場をつくっておくためにも、地元の小学校で一年を経験させておく必要があるのではないかと……。

智は五日間の「幼児・低学年スキー班」に参加し、ふきのとうを手に意気

揚々と帰ってきた。

四月、麻布小学校に入学。放課後はバスに乗って児童館の学童保育に通う毎日が始まった。小学校での生活は、私たちの子ども時代とは、あまりに違うのにおどろかされた。特に麻布小学校は、交通戦争の真ただ中にある学校だから、高学年までは、保護者の同伴なしに自転車に乗るのは禁止。子どもどうしのあの楽しい道草も許されない。いまはもうどこでもそうなのだろうが、ここは特にマンション暮らしの子どもが多く、子どもたちは電話をかけあつて、それぞれのスケジュールを確かめてから遊びに行く。たまり場になるような広場もないから、子どもたちは部屋の中で三人、五人、と限られた仲間と、それも玩具と遊ぶだけ。特にひとりっ子の智には、大きい子と遊ぶ機会のないのが気になった。

六本木という町がら、誘惑も多い。最新のテレビゲームがズラリとならぶ

ショールーム、マンガの専門店、ゲームの専門店……。保育園の送り迎えから開放されて、私の帰宅時間はついつい遅れ、母がいけない寂しさからか、ときどきこうした場所に寄り道するようになった。児童館の帰り、ランドセルをしまったままなのだから、PTAのお母さんたちの目にもとまる。私の知らないうちに、なんども連絡電話が回ったそう。児童館は四時四十五分までだから、まっすぐ帰っても五時帰宅の規則は守れない。

「ぼくはちゃんと帰ってきたのに、知らないお母さんから注意された」と、抗議されたこともある。

そのうえ、消費文明は、いやおうなしに子どもの生活にのしかかる。私は極力、インスタントものを使わないようにしていたし、お菓子もおもちゃも制限していたけれど、締切りの迫ったときなど、なによりもおとなしくしてはしくて、ついお菓子を買いにやらせ

ることもあった。留守番をしてほしいときなど、ついついおもちゃで釣ってしまうこともないではない。現代の暮らしでは、親がよほど確たる信念を持たなければ、与えることの安易さに負けてしまう。モノの大切さを教えるべく、私自身が消費文明にドップリつかっているのだから、子どもに対する説得力もないのである。

山村留学への思いが、日に日にのびてくる。子どもを環境から守ってやる力がないならば、環境を変えてしまふほかはない。自分の非力を知ったなら、たとえ他人の手にゆだねても、子どもによりよい道を歩ませてやるべきではないのだろうか。

ぼくもつかえりたいです

夏休み、「育てる会」には多彩な行事がある。幼児・低学年自然体験班、

自然研究班、北海道酪農体験班、座禪班、そして、十八日間（前期、後期を通せば三十日間）の長期山村生活……。

私は、泣いていやがる子を無理に留学させるようなことはしたくなかったので、この長期班に入れて、まず田舎の素晴らしさを自分でわからせようと思った。

八月六日。親と子の初めての長い別れ。春のスキー班で先生たちとも親しくなっていたから、智は楽しみに出発して行った。新宿駅で、大きなリュックを背に改札口に消えて行く後ろ姿に、胸をふるわせたのは私の方だ。

一日、二日は、ガランとした部屋が耐えがたくさびしかったけれど、日がたつうちに解放感も大きくなる。夜遅くまで会社で仕事をして、仲間と飲みにも行った。久しく会わなかった友人の家も泊りがけで訪問できた。

気になるのはポストの中だけなのに、一週間たっても空っぽだ。やっときた

封書を、胸をときめかせて開けてみれば、「おかあさん、ぼくもうかえりたいです。だってみんなが、ぼくのこと、じんましんっていうんだもん。でもこのことはみんなにいわないでね」

かわいそうに！ あの子は、行く前から虫さされのあとが手足にいっぱいだった。そのことがあだ名にきれいじめられている！

虫がいっぱいいて、たのしいです、などという言葉を期待していただけに衝撃は大きかった。楽しい時は手紙など書きはしない。いやなことがあって親に甘えたくなったからこそ、書いたのではないか……。そう思っても気落ちする自分をおさえられない。これで自然がきれいになってしまったら、どうしよう。初めての体験の記憶は一生残る。山村留学の計画も土台から崩れてしまうことになりはしないだろうか……。

いま思えば赤面のいたりだが、夢中

でセンターに電話をし、理事長の青木先生を呼びだした。話を聞いた先生は、「そうですね。夜もみんなと一緒に寝ているし、ちゃんとやっているようですけどね。明日、子どもたちと話してみしよう」

私は狼狽してしまった。子どもは、皆にいわないでね、とこっそり打ちあけてきたのに、なんとという母親だろう。そのことを念をおして電話を切ってから、無性に恥ずかしかった。決して苛められることを気にしているのではない。このことで来年の山村留学が実現しなかったらどうしよう、と思ったのだ。そのことをわかってもらえたのだろうか。

二度目の手紙は、帰京の三日前、今度こそ八坂に慣れて、楽しい手紙であるはずと思ったに、またしても！ である。

「おかあさん。あと六日でかえれます。ぼくはなかされてばかりいました」



私は、もう親バカになりきってしま
った。またしてもセンターに電話して
訴え、仕事仲間にも、八坂行きは失敗
だった、山村留学はだめかもしれない
と泣きごとをいった。みんな、「あの
人もやっぱりふつうの母親だったんだ
ね」と笑っていたそうだ。

実際、その三日間、私は食事ものど
を通らずに過ごした。私の顔を見たら、
ワッと泣きだすのではないか。八坂な
ど二度と行きたくない、というのでは
ないか。先生はなぜもっとよく見てく
れなかったのだろう……。

しかし新宿駅で迎えた智は、第一声、
「おもしろかったよう。もっといた
かったよう」

しかも、食事をしながら八坂の生活
をしゃべりまくり、私を小踊りさせる
ようなことをいうのだ。

「ぼく、この次はなににしようかな
あ。いろいろ班にしようか……。山村留
学に挑戦してみようかなあ」

先生からの報告にはこう書かれていた。

「よく体を動かしてエネルギーに活
動しましたが、たびたびトラブル
も起こしました。感情をおさえきれず、
自分から手を出したことも多かったよ
うです」

ひとりっ子のうえに、智は、クラス
でいちばん体も大きく、大人びている。
小さいときから、あちこちの家に預け
られ、ひとりで放っておかれたから、
お坊ちゃん育ちの他の子より、はる
かに生活の知恵を身につけているのだ
ろう。だから、つねに他の子をおさえ、
自分の意のままにしてしまう生活だっ
たのだ。そんな子が、初めて自分より
強い子との生活に直面して、トラブル
を起こすのも当然だったのだろう。そ
んなことを考えもせず、ただ心配して
いた自分を、またしても恥じずにはい
られない。

これは、親として、我が子を見直す
貴重な体験であった。いまの小学校で



は上級学年の子と接する機会がほとんどない。近所には、この子をやっつけてしまうガキ大将もいない。このままいったら、鼻もちならないごくまんな子になってしまうかもしれないではないか……。

どうしても来年は、山村留学に出さ

なくてはならない、と私は思った。

一日体験入学

二学期になると、智は友だちとの遊びに熱中しはじめ、私が、「ねえ、来年、山村留学にいかない？」などといってみると、

「うん、さらい年か、四年生になってからにするよ」

というようになった。とにかく、友だちが大事で、いまの友だちと別れることなど考えられないらしい。

来年までにこの気持ちを变えられるだろうか……。

十月になって、青木先生に相談に行った。先生はこともなげにいう。

「大丈夫でしょう。十二月に留学したい子のための特別合宿がありますから、それに参加した子は、みんな行く気になるようですよ」

そして親子で八坂の生活を見に行く日を決めてくださった。

十一月のある土曜日、私たちは特急「あずさ」に乗った。松本で乗り換え、信濃大町駅からタクシーで八坂村に向かう。道すがら、運転手さんが村の話をしてくれた。

まず、小学校の校長先生が素晴らしい。長野県でも知られた人格者で、このあたりの人はみんな尊敬しているという。

「それに八坂の人は、しっかりしてるからねえ。うちの息子にも嫁は八坂からもらいたいと思っているんですよ」私はうれしくなってしまう。智とい

えば、窓から見える風景に興奮し、

「あそこがグランド」「あっちにぼくたちが大根を植えた畑がある」などと得意げに説明してくれる。

センターに着いたのは、ちょうど夕食の始まる時間だった。トレーナーを着たり、はんでんをひっかけたり、まさ

に田舎の子といった風情の留學生たち。智は、子どもたちと並んでさっさと自分でかわりに立ち、後かたづけを手伝っていた。

食後は収穫祭のためのミーティングがあった。先生が簡単な説明をすると、あとは、中学三年の子が議長に立ち、テキパキとことを決めていく。これだけの年齢差のある子どもたちの間で合議制がうまくすすめられていくのに感心してしまった。研究テーマのグループわけをする時も、小さい子ですらちゃんと自分の意志を表明し、大きい子はリーダーに推されると、サッと立ち上がって必要な指示をする。智がその中にすまして入りこんでいるのがおかしかった。

翌朝、まだ暗いうちに、智がなにかゴソゴソやっている。どうやら着替えをしているらしく、終わるとそっと出ていった。私がウトウトしていると、起床の音楽とともに、「着替えをして

外に出ましよう」と放送があった。六時三十分。あわてて外に出てみると、智は、もう子どもたちといっしょに並んでいる。

眼下に朝もやにけぶった山野が見える。ラジオ体操を終えた子どもたちは、そこに向かって、「おはようございます」と、八坂村へのあいさつをするのだ。

朝食のとき、ひとりの男の子が私にささやいた。

「あの子、めずらしいね。いままで見学に来た子はみんな親にくっついてたのに、朝、将棋を持っておれたちの部屋にきたんだよ」

ところで、子どもたちの中で、私もっとも印象深かったのは、せりちゃんという当時二年生の女の子だった。彼女は雑誌「クロワッサン」に紹介されていたので、会ったときすぐにわかった。明るく、人なつこく、おてんば少女の典型のような子で、その朝、私

たちを小学校まで案内してくれるという。

ひとりっ子で、両親や祖父母に溺愛されていたにもかかわらず、一年生からここに来たという彼女は、もののみごとに八坂の自然を自分のものにしていた（後で聞いたところでは、一年目の彼女は、反抗し、家出までしたというけれど）。

細い山道を、彼女は素晴らしいなやかさで下って行く。湧き水の流れがあると、落葉を一枚サッと落とし、

「せりちゃん号発進！」

と叫ぶ。吹きだまった細かな落葉を丸い形にしてケークをつくり、美しい葉を見つけると、「おぼちゃん、目をつぶって！」といって私の胸につけてくれる。きれいな小枝をとってかんざしにもしてくれた。この遊びが気に入ったのか、私は何度、目をつぶらせられたことだろう。

次から次へなにかを見つけたしては

遊びに熱中しているせりちゃんを見て、私が求めていたのはまさしくこれだ、と思った。一枚の葉が船になり、宝石になる……。この想像力こそ子ども時代しか持ち得ないものであり、都市化社会が奪ってしまったものではないか。午後、留学生たちに送られて乗った車の中で、智はいった。

「お母さん、中学生のおねえちゃんか、ぼくにいったんだよ。『らいねんきいや』って。ぼく、らいねん、ぜったいくる！ よしかずおにいちちゃんが、らいねんもいるといいなあ」

さようなら六本木

山村留学への申し込み書を送り、十二月二十六日、智は、留学希望者のための行事である特別班に参加した。五日間、留学生たちとともに農家に泊まり、留学生生活の映画を見、小学校に

も一日入学してくるのである。この時の先生の報告にはこう書かれている。

「体験内容・はし作り、新聞づくり、村の探検、映画会、学校見学、農家めぐり、もちつき、うさぎ追い、農家生活、竹細工、わら細工、留学生とのおはなし。」

活動状況・夏の長期班の頃から比べると、ずいぶんまわりの子との対立が少なくなり、泣いたりすることがなくなりました。荷物もきちんとリュックにまとめることができるようになりました。夏休みからみると、随分進歩のあとがみられます。生野菜がたくさん食べられるようになると思います」

泊まった農家では、ふだんはもう使っていないいろりに火をたいて、お父さんが昔の話をしてくれたそうで、感激していた。帰ってきて智がいう。

「喜六さんは、おやつがすごいんだよ。おもちもあるし、お菓子もあるし……。ぼく、らいねん、喜六さんち

の子になりたいなあ」

冬休みがあけてからの智は、学校へ行っても、もうところは八坂に向いていたようだ。友だちにも八坂の話ばかりするらしく、家でも、何を持っていたか、などと考えている。

二月、面接と親子関係テストがあった。このテストはなかなかおもしろく、子どもがした同じテストに、親がもう一度、子どもがこう答えたであろうと考えて答えるのである。我が家の親子関係はどうか、結果を知りたいが、会では教えてはくれない。

そのほか、「私はお母さんを……」などと書かれたあとの空白を、好きな文章で埋めていくという、二年生には少しむずかしそうなテストもあったが、智はさっさと終えて、特別班で仲よかった子どもたちとふざけまわっていた。

面接では、「君のような子には、先生も留学をすすめるなあ」などといわ

れ、私はすっかり安心したものだ。

ところがいつまでたっても、入園決定の通知がこない。希望者が多いのだろうが、もし選にもれてしまったら、子どもの気持ちはどうなるのだろう。

子どもは、「駄目なら来年にするからいいさ」などと、親以上の落ちつきを見せていたけれど、それでも決定通知が来たときは、満面笑みをかくさなかった。

入学許可書が送られてきたのは、三月をかなり過ぎてからである。それから入園式までの、あわただしかったこと！

誓約書や移動証明書、成績証明書を送り、入学金を払い込み、現地に送る布団も買わねばならなかった。指示された衣類や持ちものを仕事の合間に買いととのえ、宅急便で送る。なるべくあるもの、と思っても、そこが親バカ。これから一年、目が届かないと思えば、つい多めに、と考えてしまう。

しかし、私がいまもじくじたる思いなのは、忙しさを理由に、こうした作業を子どもとともにしなかったことだ。そして、夏の行事のときから、整理整頓の悪さを指摘され、留学までにはしつけてください、とあれほどこいわれたのにもかかわらず、なんにもせずここまで来てしまったことである。実際、子どもは、センターにいつてから、自分の持ちものがわからず、荷物もひとりではまとめられなかったそう。行事のたびに先生は、荷物は自分でつめさせる。帰ったら自分で出させる、といっていたにもかかわらず、私はいちばん大事なときに、それを怠ってしまった。

った。

さて、出発をひかえた一週間は、送別会に忙しかった。保育園の同級生、小学校のクラスメート、いとこや近所の人たち……。とりわけ、小学校の男の子たちは、別れを惜しんで夕飯時になっても帰ろうとはせず、二年後に戻ってくる良き場があることを、心強く思ったものである。

そして、昭和五十八年三月三十一日、入園式に出席すべく、智は東京をあとにした。

さよなら、麻布小学校。さよなら、六本木。



投稿ホットライン——三度のメシより本が好き

生きてます 活字人間

——目の鱗、落としてますか？

「笹っば優勝旗」

積惟勝・十七潮
会 著

虚弱児学園から育ち合って半世紀

東京都世田谷区 桜井じゅんこ

昭和十年代、日本が戦争の泥沼につき進んでいくころ、スバルタ教育が全国の小学校に国策として普及した。ブルサイドに全員が並べられ、教師の笛の音と同時にブルに飛びこむ。もたもたしてしていると、教師の持っている物干竿のような青竹が飛んでくる。溺れて死にそうになると、やっと救いの青竹が目の前に差出される。行進はすさまじかった。倒れると除外されていく。まさに落ちこぼれは捨てられるのであった。そんな

時代に虚弱児童達の存在は辛いものだった。

そのころ、一人の教育者が、虚弱児童の教育に情熱をこめて専念したのである。東京中から集められた子供達が沼津の養護学園に一学期ずつ学んだ。当時としては、思い切った自由な教育方針でのびのびと勉強にあそびに時を費したのである。一人一人の児童の個性を尊重し、集団生活の秩序と、他人への思いやりを子供達が身につけるように教育したのであった。

学園生活は、昭和十三年九月から昭和十九年三月まで、十七期継続した。卒園生が十七潮会という同窓会を作り現在に至っている。当時の虚弱児童達は、今、中年になり、それぞれの分野で活躍している。

この本は、教育者、故積惟勝先生と、その人格を慕う教え子達の

記録を集めたものである。

現在の成績さえ良ければ良い子、どんなに性格が良く秀れた面を持っていても、テストの結果が悪ければ悪い子と判断される教育や、かつての軍国主義の学校教育にもなかった人間教育が行われたのである。

筆者も十七潮会の一人として幼き日の一学期間を積先生の下で学んだ。私の人間形成の上に、そこでの教育は大なるものがあつたと



信じる。

すばらしい人間学の本である。

洋々社 一四〇〇円

「プロの主婦・プロの母親」

ボランティア労力銀行の十年

水島照子 著

東京都新宿区 田中喜美子

最近、社会保険に加入するより、その分給料でもらった方がいい、という若い人がふえているという。あと二十年、三十年たったら年金

がどうなるかわかったものではない、という不信感がひろがっているらしいのだ。ある銀行の試算では、二千万円たればまずまずの

老後が送れるというのが、一億たなければダメ、という専門家もいるのである。

「ボランティア労力銀行」の水島さんは、一人が一時間ボランティアをすれば一点、と数えて、二千点の持ち点になればまず老後は安泰という。労力の預金にはインフレもなければ目回りもない。銀行がつぶれさえしなければ、確実に自分の預金は返ってくるわけである。

ボランティアで支えあうよりお金で解決した方がよほどすっきりするんじゃない、と思う人は、一度この本を読んでみたほうがいい。ボランティアを通じて作る人と人とのつながりが、個人個人がバラバラにならかけている現代に、大きな役割をはたすことが見えてくる。

創始者の水島さんは、すばらし

いバイタリテイの持主だ。がむしやらとも思えるその実行力が、ボランティア労力銀行を生んだのである。その彼女の性格が、どんな家庭と環境で作られたかを伝えてくれる「私の育った家庭」は、現代の、タコソボ的な核家族が、子供にとって、どれほど非教育的な環境かを対照的に私たちにつきつける。

何より嬉しいのは、彼女が労力銀行をはじめたのは五十歳をこえてからという事実だ。人生は長いのだ。もっとも忘れてはならないのは、その年になるまで、持ち前のバイタリテイで、彼女がさまざまな仕事をこなしていたということである。「プロの主婦・プロの母親」という題とはうらはらに、この本は、いわゆる「良妻賢母」の枠には入りきらない女性の手で書かれているのだ。

ミネルヴァ書房 一二〇〇円

「講座主婦3 動きだした主婦たち」

田中喜美子 武田京子 木村 栄 編

神奈川県横浜市 里 憲子

昨年十一月、朝日新聞の田中喜美子さんの記事には、大いに違和感を覚えた。△わいふ▽の読者を十把一からげにネアカと言われちゃたまらないという思いと、（自分は典型的なネクラと信じている）どうしてネアカが△わいふ▽を読むんですかという思いと……etc 複雑な心境だった。

二、三日過ぎて冷静になってから「一体何が私を不愉快にさせたのだろう」と自問してみる……。半分はホンネをつかまれたという思いが込み上げてくる……。一体田中さんは何を言わんとしているのだろう……。早速横浜の有隣堂に

て、出版されたばかりの△講座主婦3 動き出した主婦たち▽を購入する。

一昨年の私は、末っ子が二歳になったのを機に、自ら「講演会荒らし」と称して丸一年子連れで好ちこちの講演会に顔を出した。好奇心丸出し、まるでカラカラに乾いた土壌に水が染み込むように、その内容は新鮮で刺激的だった。その結果、自分の興味や問題意識が一つの方向に絞られて来て、昨年夏には結婚以来初めて、二泊三日のA研修会に参加した。夏期休暇を夫に取ってもらい、息子達を託すことは、私にとって一つの決

断であった。そして現在、その延長線上にいる。遅まきながら、やっと自己主張を始めた私である。が同時に、専業主婦という立場の中で行動には限界があることも見えて来た。

私は家庭という名の回転木馬にしがみついている。来る日も来る日も同じ土俵の上を回るばかりだ。時々木馬を止めて外の世界を覗いて見る。降りようかな。降りたいな。でもやっぱり怖い。再び回る。木馬は回る。誰かが背中をどんと押してくれるといいな、そして踏み切りがつく。でもやっぱり自分で降りなきゃならないのだ。それも解っている。『ボランティアにせよ、市民運動にせよ、家庭の主婦としての自分をまず優先させ、余暇の利用としてそれを行なうという姿勢は、自分の能力を真に伸ばす機会を確実に

に彼女たちから奪う。金を稼ぐ必要性にもとづいて行なう仕事の要求するきびしさ、そこにはないからだ』田中さんの文章が胸に迫る。

自分の問題意識や主張がそのまま経済的自立と結びつくなんて夢のまた夢と思っていたが、実際に実現している人達がいる。その意味で、△二章自立への模策・藤原房子さん▽の文章は興味深く読んだ。これからの自分の生き方を模策する私に勇氣と希望を与えてくれる。

日々、自己実現に向かって前進している人達の文章は、説得力があって本当に力強い。私のように回転木馬に乗っかっている主婦には、ずしんと重い一冊だが、必読の書だと思います。

汐文社 一〇〇〇円

テーマ原稿募集

一八七号のテーマ原稿は「十年前のわたし」に決まりました。

いま、あなたは何歳？ もちろん十年前は十年若かった、これはたしか。

その時のあなたは、何をしていますか？ 今より楽しかったか、苦しかったか、ヒマだったか、忙しかったか。

この十年で、あなたはどんなに変わったでしょうか。

十年。短いようですが、やっぱり長いんですよ、これが。

その十年をいかに生きたかを振り返ることは、これからの十年を考える上に、とっても役に立つ、とも思うのです。

枚数、五枚から十枚まで。（四〇〇字づめ原稿用紙） 締切りは二月末日です。

お友達に（わいふ）を

おすすめ下さい

新しい読者をご紹介下さった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

●定期購読者をお一人ご紹介下さるごとに、誌代プラス送料とも一回延長。

（六人ご紹介下されば、翌年の誌代・送料とも無料になります）

△わいふ▽年間分をプレゼントに

お使い下さい

●ご結婚のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。

お申込みいただければ、まず新読者にきれいなプレゼント・カードをお送りしてお知らせし、以後毎回送本いたします。

●その場合も定期購読者のご紹介と同様に、お一人につき一冊分延長させていただきます。

わいふバックナンバー

- 171号 ただの女の防衛論議 四五〇円
- 172号 夫の成功は妻次第？ 以下同じ
- 173号 女とお金
- 174号 主婦の再就職
- 175号 子どもたちの心がこわれて行く
- 176号 わたしの恋愛体験
- 177号 肉親の老いを見つめる
- 178号 女・からの履歴書
- 179号 成功したしつけ・失敗したしつけ
- 180号 父親はほんとうに必要なか
- 181号 PTA・その苦しみと楽しみ
- 182号 家においてできる仕事
- 183号 女の言いたい放題

送料は一冊二〇〇円、二冊〜三冊二五〇円、四冊〜六冊三〇〇円、七冊〜九冊まで三五〇円です。十冊以上は編集部で負担致します。ご注文は編集部へどうぞ

（〇三）二六〇一四七七

編集だより

●「お医者さんを診断する」にたくさんの投稿を有難うございました。この問題の根の深さを思わせられる切実なものばかりでした。はつきり分かったことは、私たちは医師のかかり方について、もっと主体的に研究しなくては、ということですね。このテーマを、色々な角度から深めてみたいとお思ひの方は、どうぞ編集部までお声をかけてください。

●年一回の読者・投稿者親睦のパーティを、来る四月十七日（火）十二時から催します。場所・費用は未定。ご出席の方は三月末日までに、編集部にお問い合わせの上お申込み下さい。

●一八四号の一〇六ページ、クスクラ・バービッチ監督はイスクラ・バービッチの誤植でした。訂正しておわびいたします。

●一八三号のイメージチェンジ以来、毎回、投稿がだんだん増えてきますので、ヤッターという感じです。「わいふ」の使命は何とい

ってもわたちの自由な発言の場を確保することにあるのですから、これはど嬉しいことはありません。

一つだけお願い。これまで、重要な、あるいは痛切な問題提起があっても、必ずしも毎回それに応える声が届きませんでした。誰かが応えてくれるだろう、ではなく、自分が応えなくては誰が応える、の意気こみで、どうかお声をよせて下さい。

●新連載の「智よ、自然に学べ」の著者のこくぶんさんはコピーライター。短い文ばかり書いていたので長いのは自信ない……とおっしゃるのですがとてもすばらしい筆力。「甲子ハイツー〇二号室」は「都市化」の中での女の一人暮らしを描いて、カッコいい女性誌には絶対に登場しない現実をくり抜けて見せてくれる予定です。どうぞお楽しみに！

●一八五号一〇一頁冒頭の小見出しが、一〇〇頁冒頭に間違っつてついていました。作者の吉岡さんにもまことに申しわけなく、心からおわび申し上げます。

●では四月まで、ごきげんよう！

購読申込は

ハガキか電話でどうぞ。
すぐ本に振替用紙をそえてお送りしますの
で、折返しご送金ください。バックナンバ
ーのご注文も同様に。二冊以上まとまりま
すと送料が半額以下になります。

WIFE

(隔月刊) 186号

1984年 3月1日発行

印刷・浩文社印刷

定価 450円

(年間購読料送料共 3600円)

発行所・樹グループわいふ

編集・わいふ編集部

東京都新宿区加賀町2-4 ● 162

TEL (03) 260-4771

郵便振替 東京5-110430

銀行口座 三菱銀行神楽坂支店

普通預金 052-4348909

購読中止は……

かならずお申出ください。送金をお忘れに
なる方が多いので、誌代が切れてもひき続
き送本しています。お申出がないと、お送
りしてしまうので、ぜひハガキか電話を。

男と女の近未来はどう変わる

「第三の女性」論

医学博士 法政大学教授 千葉康則 著 定価 980 円

女性はいま、どんな大変化を遂げているのか。その進路は、従来の男性とも女性とも違う第三の道である。

この事実を科学者の目で冷静に見つめる著者は、男性である。

畏友千葉康則教授の、人間科学と新しい女性のあり方との出会いによる、衝撃的な展開が本書である。

小此木啓吾（精神医学者）

目次

- 「女性に学問はいらぬ」という神話
- 「男は仕事、女は家庭」論の崩壊
- 受動的な性から能動的な性へ
- 模倣される、これからの女らしさ
- 社会はなぜ「らしさ」を必要とするのか
- 男性主導の競争社会は行きつまたつた
- 男たちも変わりつつある
- 女性解放思想の歩みをたどる
- 競争社会を超える第三の道

●発行／助たばこ総合研究センター（TASC出版）
●発売／主婦人生活社

〒113 東京都文京区湯島2-19-15
電話 03（815）7161（代）

※店頭で入手できないときは、書店に申し込んでとり寄せてください。

最新刊 〈女・いま生きる〉③

プロの主婦・ プロの母親

水島照子 ■ ボランティア労働銀行の10年

「労力にインフレはない。労力をあたらしい愛の通貨にしましょう。労働銀行の利息は愛情です」——十年前はじまった「ボランティア労働銀行」はユニークな主婦の活動としていま大きな注目を集めている。全国に二六〇支部、二六〇〇人の会員を擁するまでになった。この構想の生みの親、推進者である著者が、自身の生いたちとこの十年の歩みをふりかえりながら高齢化社会における女性の生き方を語る。一三〇〇円 千250

◆シリーズ〈女・いま生きる〉既刊

① 現代女性の生き方

小森健吉編・何のための「女性学」か 歴史、社会、心理、生理、宗教……総合的な研究。一七〇〇円 千250

② 夫婦——人生の長い午後

清野博子著 読売新聞婦人部記者が追うさまじまな夫婦のドラマ。夫は仕事、妻は子育て——いつのまにかできてしまった溝を埋めるのは？……一三〇〇円 千250

ミネルヴア書房

〒607 京都市山科局私書箱
24号 振替京都二一八〇七六

汐文社

東京都文京区本郷1-26
TEL.03-815-8421~4

女性たちの自立と連帯を探る画期的講座!
サークルや学習会等のテキストに最適の書!

●木村栄・田中喜美子・武田京子編

各1200円

講座 **主婦** 《全3巻》絶賛刊行中

2 壁のなかの主婦たち

●新刊発売

「幸せ」を約束されたはずの結婚生活の行く手に待つものは何か。育児期の閉塞、子離れ期のあせりと、やがて訪れる空しさ、そして三たびの……。「こんなはずではなかった」という泣きの底にある閉ざされた主婦人生を多角的・体験的に描きながら、女性たちの生き方を問うおそろ

●おもな執筆者

木村栄／半田たつ子／和田好子／佐藤洋子／田中喜美子
友松悦子／駒野陽子／鈴木忠子／沖藤典子／水畑道子／他

1 主婦はつくられる

●好評発売中

生まれおちたその時から、なによりも、女らしさを求められ、結婚志向に駆られていく女性たち。家庭・学校・社会などくわしの現場と、絵本少女マンガ・女性誌・テレビなど各メディアの、女たちをめぐる状況を生々しくとらえ、主婦がどのようにつくられていくかを浮き彫りにする

③動きだした主婦たち

●10月下旬発売予定

父親の自立と子育て

木村 栄

「いたい父親は、家庭の中でどんな役割を果たしているのか」と男の自立にもかかわる新たな女子の立場・家庭像を大胆に提起する

1200円

母性をひらく

子どもに歩む自立への道

木村 栄

子育の視点から、女が働くことの大切さと、自立の必要性を切々と説きあかす。この大切さと、同時にみちた体験を通して、ひらかれた母性の苦ありようを生きいきと描く

1200円

主婦からの自立

武田京子

家事・育児、老親の介護など「一家のきりも主婦の現実を見すえ、女も男もともに人間らしく生きられる道をさぐる

1200円

アメリカ「豊かさ」とはなにかレポート

田中美智子

異常なまでの犯罪と腐敗、愛の不毛と孤独、人間にとって健全なアメリカをどう見つけようか。会心のルポルタージュ

1200円

世界を駆けぐる不滅の原爆長編シリーズ

はだしのゲン

●コミック版(中沢啓治作) 全8巻 各600円
●児童文学版(深沢一夫作) 全3巻 各980円
●絵本版(中沢啓治作・絵) 全1巻 1200円